

うねむれ やまだ  
有年牟礼・山田遺跡発掘調査報告書



2014年3月

兵庫県赤穂市教育委員会

# 有年牟礼・山田遺跡発掘調査報告書



2014年3月

兵庫県赤穂市教育委員会

巻頭図版



有年牟礼・山田遺跡遠景 西から。手前中央矢印が有年牟礼・山田遺跡。丘陵地帯の間を縫うように流れる矢野川の北岸に本遺跡は位置している。右奥には、姫路市の市街地や播磨灘、淡路島がみえる。



有年牟礼・山田遺跡近景 南から。奥にあるのは赤穂市と上郡町を隔てる丘陵部。その丘陵部から流れ出る山田川によって形成された小規模な扇状地の先端部に調査区は位置している。



調査区近景 南東から。調査区内では、周溝内にマウンドの貼石とみられる石材や土器の落ちこんだ方形周溝墓が2基検出された。



調査区垂直写真 上が北。南西側（1号墓）と北東側（2号墓）の方形周溝墓は、周溝の一辺を共有している。また、1号墓には周溝が明らかに途切れる部分があり、陸橋部であると判断される。

巻頭図版



1号方形周溝墓検出状況 北西から。周溝の最上層は黒褐色で、遺構検出は比較的容易であった。転落した貼石と思われる石材の一部もみえている。



1号方形周溝墓掘削状況 北西から。周溝内からは多数の石材が検出された。ただし、主体部やマウンドの痕跡は、調査区の削平が激しく、検出できなかった。



**2号方形周溝墓検出状況** 北西から。1号墓の北東側に寄り添うように2号墓が検出された。周溝は1号墓同様に、最上層に黒褐色層が堆積している部分がある。



**2号方形周溝墓掘削状況** 2号方形周溝墓はやや小型で、周溝が浅い。貼石とみられる石材の検出数も比較的少なく、遺物もほとんど出土しなかった。

巻頭図版



1号方形周溝墓南溝断面状況 東から。1号墓の南溝はもっとも残存状況がよく、石材も多く検出された。



1号方形周溝墓南溝断面 東から。石材を取り除くと、その下層から遺物が比較的多く出土した。これらの遺物は溝底からではなく、石材同様、溝底からやや浮いた状態で出土した。



1号墓南溝断面 東から。右が1号墓のマウンド側で、周溝内にはマウンド流出土と思われる土層が堆積している。



1号方形周溝墓遺物出土状況 東から。出土した土器はいずれも細片で、原位置を保ったものは検出できなかった。遺物は溝内に意図的に投棄されたものではなく、マウンド流出に伴う2次堆積によるものと考えている。

巻頭図版



1号方形周溝墓北溝掘削状況 東から。1・2号墓が共有している周溝である。左側が1号墓、右側が2号墓。



1号方形周溝墓北溝石材棱出状況 東から。石材が噛みあっている部分がある。



2号方形周溝墓北溝検出状況 東から。石材の一部がみえている。



2号方形周溝墓北溝石材検出状況 かなり削平を受けているが、2号方形周溝墓でも石材が検出された。

巻頭図版



掘立柱建物群掘削状況 北から。調査区では近隣で行われた昭和 63 年度調査同様、大規模な古代の集落跡が検出された。しかし、方形周溝墓の内側では柱穴はほとんど検出できていない。



土坑 2 遺物出土状況 南西から。飛鳥時代の土坑である。完形に近い遺物が出土している。



昭和 63 年度調査 No. 2 トレンチ近景 北から。今回報告する調査は、昭和 63 年度の発掘調査の成果を受けて実施された（本文第 3 章参考）。



昭和 63 年度調査区 No. 2 トレンチ垂直写真 上が北。昭和 63 年度の発掘調査は圃場整備に伴うもので、調査区左上に本書で報告する方形周溝墓の一部が検出されている。

巻頭図版



昭和 63 年度調査「A 区大溝」断面 南から。本書で報告する 1 号墓の東溝にあたる「A 区大溝」の土層断面（本文第 3 章参照）。多くの石材が、溝底よりやや浮いた状態で検出されている。



昭和 63 年度調査掘立柱建物 西から。昭和 63 年度の調査では古代の道構が検出され、掘立柱建物跡も検出されている。



1号墓出土土器集合 大部分は在地産のものだが、吉備や讃岐産胎土を持つ搬入土器が含まれる（第5章参照）。また、胸部下半に穿孔をもつ個体や、大型裝飾器台の存在などからも、この土器群の特殊性がうかがえる。  
(昭和63年度及び平成23年度出土土器集合)

巻頭図版



大型装飾器台 高杯状の形状をとり、胸部には多数の円形透穴と突帯を持つ。



大型装飾器台口縁部 粗いヘラ描きによって大ぶりの鋸歯文を描いている。また、一部に赤色顔料の塗布が認められる。



加飾壺 胎土分析では讃岐産胎土を使用していると判断された（第5章参照）。円形浮文や波状文・直線文などで入念に装飾されている。



大型二重口縁壺 胎土分析では讃岐産胎土を使用していると判断された（第5章）。円形浮文や刻目を持つ突帯で装飾されている。

卷頭図版



大型装飾器台の比較 右奥は有年原・田中1号墳丘墓出土装飾器台（弥生時代後期）。本調査で出土した大型装飾器台（弥生時代終末期）と法量や特徴が酷似しており、型式変化が追える。



古代遺物集合 飛鳥時代後半から奈良時代前半のものが主体である。

## 序 文

兵庫県南西端に位置する赤穂市は、「人が輝き 自然と歴史・文化が薫る やさしいまち」を目指しています。「忠臣蔵」で著名な赤穂城跡や、日本三大上水道の一つに数えられる江戸時代の旧上水道のほかにも、市の北部にあたる有年地区には埋蔵文化財をはじめとする多くの文化財が点在し、有年地区は「文化財の宝庫」とも呼ばれています。

本書で報告する有年牟礼・山田遺跡では、赤穂市内では初めてとなる弥生時代の方形周溝墓を確認し、赤穂市域の弥生社会を明らかにする重要な成果が得られました。この調査成果が赤穂市の歴史のみならず、周辺地域や最新の考古学研究の一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたりご協力、ご指導いただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。

赤穂市教育委員会  
教育長 室井久和

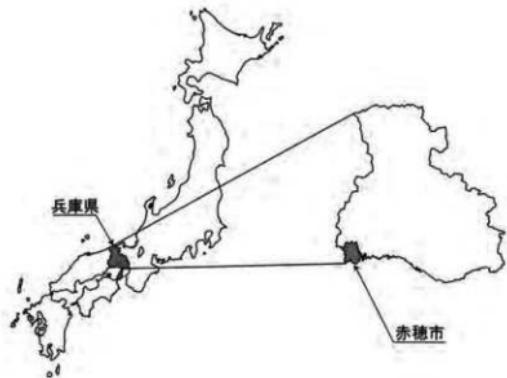


図1 赤穂市位置図

## 例　　言

- 1 本書は、兵庫県赤穂市有年牟礼に所在する有年牟礼・山田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は国庫補助事業として実施し、整理作業及び報告書刊行は赤穂市教育委員会の単独事業として実施した。現地での発掘調査は、赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係の荒木幸治が、調査後の整理作業及び報告書の作成は同係の山中良平が担当した。
- 3 発掘調査は、平成24年2月14日から平成24年3月31日（実働37日）まで実施した。整理作業及び報告書執筆は、平成24年4月1日から平成26年3月7日まで、赤穂市埋蔵文化財調査事務所（兵庫県赤穂市東有年68番地）にて実施した。
- 4 本書の執筆及び編集は第6章を除き山中が行った。出土遺物の洗浄、接合、実測及び拓本は入江麻紀（整理調査員）、大川加奈子（同）、坂井美和（同）、篠宮欣子（同）、永瀬優美子（同）、山本直美（同）が実施し、遺構及び遺物のトレスースは荒木、山中、入江、坂井、山本が行った。現地調査での写真撮影は荒木が、遺物写真撮影については山中が実施した。
- 5 現地調査写真は、35mmカメラNIKON NewFM2によるカラーネガ、カラーリバーサル撮影、中判カメラMamiya ProSDによるモノクロネガ、カラーリバーサル撮影、そしてデジタルカメラNIKON D300（1,230万画素）による撮影を行っている。遺物写真は、デジタルカメラNIKON D300による撮影である。空中からの斜め写真は、4×5カメラ及び中判カメラによって撮影した。報告書ではそれをスキャニングし、デジタルデータ化したもの用いている。また、昭和63年度調査時の写真についても、カラーリバーサルフィルムをスキャニングし、デジタルデータ化したもの用いて編集を行っている。
- 6 本書はAdobe社InDesignCS6及びIllustratorCS6によるデジタル編集を行っている。
- 7 本書で使用する方位は、特に記さない限り平面直角座標系に基づく方眼北である。なお本書で用いた緯度、経度および平面直角座標は、旧測地系の既設杭を利用した測量であることから、世界測地系に基づいた値へ後に変換したものとなっている。調査地は平面直角座標系（世界測地系）第V系に属している。
- 8 本書での標高値は、東京湾標準潮位（T.P.）を用い、メートル単位で表記している。
- 9 空中写真測量は、赤穂市の委託を受けた株式会社ジオテクノ関西が行った。
- 10 第6章は、白石　純氏（岡山理科大学）から玉稿を賜った。記して感謝する。
- 11 本報告にかかる出土遺物および記録資料は、赤穂市教育委員会が赤穂市埋蔵文化財調査事務所において保管している。広く活用されることを希望する。（TEL：0791-43-6962）
- 12 整理調査に関しては、下記の方々、機関に資料提供、ご指導、ご協力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げる。  
大久保徹也、岸本一宏、寺沢蘆、乗松真也、藤井整、森岡秀人  
岡山理科大学、兵庫県教育委員会文化財課、兵庫県立考古博物館

表　紙：1号墓出土土器集合

中表紙：方形周溝墓群検出状況

裏表紙：1号墓出土土器集合写真遺物の実測図

# 目 次

## 卷頭図版

序 文	・	例 言
目 次	・	図表目次

## 第1章 地理的・歴史的環境 ······ 1

1 有年地区の地理的・歴史的環境	····· 1
2 調査区周辺の地理的環境	····· 5

## 第2章 既往の調査と調査の経緯 ······ 7

1 既往の調査	····· 7
2 平成 23 年度調査の経緯と経過	····· 8
3 調査の体制	····· 10

## 第3章 昭和 63 年度の調査概要 ······ 12

1 調査の経緯と経過	····· 12
2 調査概要	····· 12
3 まとめ	····· 22

## 第4章 平成 23 年度の調査成果 ······ 23

1 調査概要	····· 23
2 基本層序	····· 24
3 弥生時代の遺構・遺物	····· 28
4 飛鳥時代以降の遺構・遺物	····· 44
5 遺構に伴わない遺物	····· 64

## 第5章 有年牟礼・山田遺跡出土土器の胎土分析 ······ 67

1 分析目的	····· 67
2 分析方法	····· 67
3 分析結果	····· 68
4 おわりに	····· 68

## 第6章 有年牟礼・山田遺跡の位置づけ ······ 71

1 方形周溝墓の構造と遺構の形成過程	····· 70
2 方形周溝墓の位置づけ	····· 73
3 古代集落の位置づけ	····· 79
4 まとめ	····· 82

## 写真図版

# 図 表 目 次

図 1 赤穂市位置図	1	図 62 有年牟礼・山田遺跡出土土器の砂礫觀察写真	85
図 2 有年地区遺跡地図	1	図 63 推測される遺構の形成過程	71
図 3 調査区周辺等高線図	6	図 64 真船市内における装飾器台	74
図 4 有年牟礼・山田遺跡の既往の調査箇所	9	図 65 有年原・印中遺跡埴丘墓群	75
図 5 昭和 63 年度調査№ 70 ドレンチ遺構配置図	12	図 66 有年原・印中遺跡埴丘墓群出土土器	76
図 6 昭和 63 年度調査№ 70 ドレンチ出土遺物	13	図 67 飛鳥時代～奈良時代の遺構の変遷	80
図 7 昭和 63 年度調査№ 2 ドレンチ遺構配置図	14	図 68 山田奥窪跡出土須恵器	81
図 8 昭和 63 年度調査 A 区大溝平面図	15		
図 9 昭和 63 年度発掘調査出土遺物	16		
図 10 昭和 63 年度調査 A 区大溝出土遺物 1	19		
図 11 昭和 63 年度調査 A 区大溝出土遺物 2	20	表 1 有年牟礼・山田遺跡における既往の調査	8
図 12 昭和 63 年度調査 A 区大溝出土遺物 3	21	表 2 有年牟礼・山田遺跡出土土器の胎土分析試料一覧表	69
図 13 昭和 63 年度調査№ 2 ドレンチ A 区出土遺物	22		
図 14 平成 23 年度調査区平面図	23		
図 15 平成 23 年度調査区遺構配置図	24		
図 16 調査区土壌断面図	25		
図 17 昭和 63 年度・平成 23 年度調査区統合図	26		
図 18 調査区断面図	27		
図 19 土坑 1 出土遺物	28		
図 20 1 号竪溝土壌断面図	28		
図 21 1 号竪溝平面図	29		
図 22 1 号竪溝平面図	30		
図 23 1 号竪溝土壌断面図	31		
図 24 1 号竪溝土壌断面図	32		
図 25 石材の検出状況	32		
図 26 1 号竪溝石材断面図	33		
図 27 1 号竪北溝平面図	34		
図 28 1 号竪北溝土壌断面図	35		
図 29 1 号竪北溝石材断面図	35		
図 30 1 号竪東溝（昭和 63 年度調査埋土）出土遺物	36		
図 31 1 号竪南溝出土遺物	37		
図 32 1 号竪西溝・北溝出土遺物	39		
図 33 2 号竪周溝土壌断面図	40		
図 34 2 号竪平面図	41		
図 35 1 号竪北溝平面図	42		
図 36 1 号竪北溝土壌断面図 2	43		
図 37 1 号竪北溝石材断面図 2	43		
図 38 土坑 2 平面図・土層断面図	45		
図 39 土坑 2 出土遺物	46		
図 40 土坑 3 平面図・土層断面図	47		
図 41 土坑 3 出土遺物	47		
図 42 方形網講墓最上層出土遺物 1	49		
図 43 方形網講墓最上層出土遺物 2	50		
図 44 落ち込み平面図・土層断面図	52		
図 45 落ち込み出土遺物 1	53		
図 46 落ち込み出土遺物 2	54		
図 47 挖立柱建物跡 1 平面図・断面図	56		
図 48 挖立柱建物跡 2 平面図・断面図	57		
図 49 挖立柱建物跡 3 平面図・断面図	58		
図 50 挖立柱建物跡 4 平面図・断面図	59		
図 51 挖立柱建物跡 5・6 平面図	60		
図 52 挖立柱建物跡 5 柱穴断面図	61		
図 53 挖立柱建物跡 6 柱穴断面図	61		
図 54 挖立柱建物跡 7 平面図・断面図	62		
図 55 穴穴周土遺物	63		
図 56 溝 1 平面図・断面図	64		
図 57 溝 1 出土遺物	64		
図 58 遺構に伴わない遺物	65		
図 59 有年牟礼・山田遺跡出土土器の产地推定 (K-Ca 敷布図)	67		
図 60 有年牟礼・山田遺跡出土土器の产地推定 (K-Ti 敷布図)	67		
図 61 有年牟礼・山田遺跡出土土器の产地推定 (Tl-Ca 敷布図)	68		

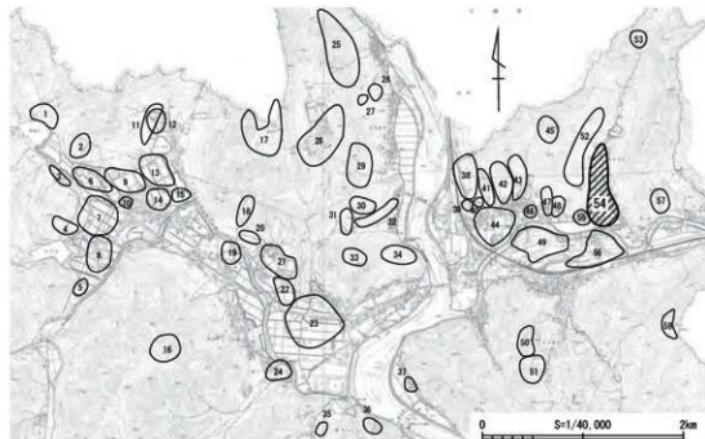
# 第1章 地理的・歴史的環境

## 1 有年地区的地理的・歴史的環境

### 赤穂市の地勢

赤穂市は兵庫県南西端に位置し、岡山県との県境に位置する。北を赤穂郡上郡町、東を相生市、西を岡山県備前市と接し、南に播磨灘を臨む。市の面積 126.88km<sup>2</sup>のうち、約 7 割は標高 200 ~ 400 m 程度の丘陵が占め、中央部を縫うようにして二級河川千種川が南流している。この千種川により、市域の北部には狭長な谷底平野や河岸段丘からなる盆地が、南部の河口部には三角州の発達によって平野が形成されている。

現在の赤穂市街地となる南部の三角州の形成や塩田開発を契機とする干拓は、中世以降に進行したため（赤穂市 1981）、古代以前の遺跡分布の中心は市域の北部にある。なかでも有年地区は千種川流域で最大級の平地面積を持つ盆地であり、千種川による南北の河川交



- 1 : 西有年・馬鹿踏遺跡  
2 : 北山古墳群  
3 : 西有年・柴床遺跡  
4 : 長根古墳群  
5 : 西有年・香山遺跡  
6 : 西有年・堂免遺跡  
7 : 西有年・長根遺跡  
8 : 西有年・往来南遺跡  
9 : 西有年・玄形遺跡  
10 : 西有年・北遺跡  
11 : 北山古墳群  
12 : 西有年・木ノ口池遺跡  
13 : 西有年・木ノ目遺跡  
14 : 西有年・垣内田遺跡  
15 : 西有年・垣田遺跡  
16 : 清水山寺跡  
17 : 黒沢山光明寺跡  
18 : 与井谷古墳群  
19 : 西有年・宮原遺跡  
20 : 西有年・井谷口遺跡  
21 : 西有年・堂場ヶ市遺跡  
22 : 西有年・遠古殿遺跡  
23 : 東有年・神田遺跡  
24 : 上芦生遺跡  
25 : 野田遺跡・野田古墳群  
26 : 上所二ノ塚遺跡  
27 : 上所山遺跡  
28 : 精谷山古墳  
29 : 中所古墳群  
30 : 後藤陣山城跡  
31 : 三軒家遺跡  
32 : 三軒家古墳群  
33 : 有年山古墳跡  
34 : 放免山古墳群  
35 : 下芦生遺跡  
36 : 糸子城跡  
37 : 富原遺跡  
38 : 北原遺跡・北原古墳群  
39 : 桃無山古墳群  
40 : 奥山古墳群  
41 : 奥山遺跡・奥山古墳群  
42 : 木虎谷跡・木虎谷古墳群  
43 : 憧谷古墳群  
44 : 有年原・田中遺跡  
45 : 奥山田古墳群

図 2 有年地区 遺跡地図

通と東西の陸路交通とが交差する地域である。そのためか、有年地区には縄文時代前期から近世にいたるまでの様々な文化財が集中しており、一帯は「文化財の宝庫」とも呼ばれる。ここでは有年牟礼・山田遺跡の立地する有年地区の歴史的環境について概観したい。

### 縄文時代

赤穂市域では旧石器時代に属する確実な遺跡は確認されていないが、西有年・馬路池遺跡からは縄文時代早期から前期に属する可能性のある石器が出土しており、現在確認されている赤穂市最古の遺跡となっている。

有年地区で遺跡が増加するのは縄文時代後期になってからのことである。有年原・クルミ遺跡では後期初頭の土坑と晚期の建物跡が、有年牟礼・井田遺跡では後期中葉の土器溜りが検出されている。他に上蒼生遺跡、西有年・木ノ目池遺跡などでも後期の土器が出土しているが、いずれも出土量はさほど多くなく、存続期間も短い。このことから、有年地区的縄文遺跡は小規模な集落が散在的に立地しているのが特徴といえよう。例外的に、東有年・沖田遺跡では後期初頭から晚期の遺構面が存在し、比較的大規模な集落遺跡であることが判明しており、注目される。

### 弥生時代

有年地区においては、これまで弥生時代前期の遺物及び遺構は全く確認されておらず、様相は不明である。中期前葉の遺跡としては、有年原・田中遺跡、東有年・沖田遺跡があげられるものの、若干の遺物出土に留まるもので、その様相は明らかではない。

続く中期中葉～後葉には遺跡数が激増し、西有年・遠古殿遺跡、西有年・畠田遺跡、西有年・堂場ヶ市遺跡、野田遺跡、有年牟礼・井田遺跡など大小の遺跡が有年地区各地に展開する。これらの遺跡のほとんどは後期へと継続せず、継続しても規模を縮小させていることから、遺跡の増加は一時的なものであったと理解される。しかし、有年原・田中遺跡、東有年・沖田遺跡の両遺跡は中期前半から継続する大規模な遺跡であることから、有年地区における拠点的な集落であったと考えられる。

弥生時代の有年地区では特徴的な墳墓が存在することが知られている。東有年・沖田遺跡では中期中葉の円形周溝墓が検出され、供獻土器も出土している。弥生時代後期には有年原・田中遺跡で円形墳丘墓群が検出されている。特に有年原・田中1号墳丘墓は、円形墳丘、突出部、貼石、大型裝飾器台などの特殊な供獻土器をもち、当地域の代表的な弥生墳丘墓として注目を集めている。有年原・田中遺跡の背後の山塊に立地する奥山遺跡ではかつて小形内行花文鏡が採集されていることや、木虎谷遺跡や北原遺跡では箱式石棺が分布していることから、弥生時代後期から終末期の墳墓の存在が予想されている。

また、本書で報告するように有年牟礼・山田遺跡においても弥生時代終末期の方形周溝墓群が検出された。このように、有年地区は弥生時代中期から終末期までの特徴的な墳墓が確認されている興味深い地域である。

## 古墳時代

弥生時代終末期から古墳時代前期の集落遺跡としては有年原・田中遺跡、東有年・沖田遺跡、有年原・クルミ遺跡などが挙げられるが、検出された遺構が少なく、その様相が明らかであるとは言い難い。

前期古墳については、野田古墳と津村古墳が挙げられる。野田古墳は墳丘形態は不明だが竪穴式石室が存在したとされる。津村古墳は小型の円墳に箱式石棺を納め、前期古墳に該当する可能性があるものの、確定できるほどの資料は出土していない。

一方で、有年地区の北側に隣接する赤穂郡上郡町高田地区周辺では、千種川流域内で唯一の三角縁神獣鏡の出土した西野山3号墳や、前方後円墳である正福寺北谷古墳、中山13号墳などの前期古墳が多く立地しており、対照的である。前述した野田古墳についても赤穂市の北端に位置しており、有年地区というよりもむしろ上郡町高田地区と捉え得る位置に存在している。このように、有年地区には前期古墳がほとんど立地していないことが大きな特徴となっている。

中期に入ると初期須恵器や陶質土器、韓式系土器が出土した有年原・田中遺跡が代表的な遺跡となる。出土した初期須恵器には焼け歪みが激しいものや窯体片が付着したものが含まれ、周辺に初期須恵器窯の存在が想定されている。また、千種川流域では最大級の規模を誇る蟻無山1号墳（帆立貝形古墳・全長52m）が築造され、円筒埴輪を始め、家・馬・舟形埴輪などの形象埴輪、器台といった初期須恵器の出土が確認されている。

この蟻無山1号墳を嚆矢とし、周辺には蟻無山2・3号墳、奥山古墳群、放亀山古墳群などの小型円墳からなる古墳群が形成される。奥山古墳群では円筒埴輪や銅留短甲が出土しており、いわゆる「初期群集墳」と位置づけられるだろう。

後期後半から終末期には木虎谷古墳群・惣計谷古墳群・塚山古墳群などに代表される群集墳が有年地区内で爆発的に増加する。これらの古墳群は横穴式石室を持つ小円墳や箱式石棺を納めた積石塚からなり、横穴式石室については多種多様な型式が存在することもその特徴の1つである。例えば木虎谷2号墳は石棚状の施設を持ち、野田2号墳、塚山6号墳などは玄門部に立柱状の施設を持つ。採集遺物からその大部分は6世紀末～7世紀初頭に築かれたものとされるが、発掘された事例が少なく、その築造時期や変遷は現状では明らかにしがたい。

これらの群集墳の増加に対応するように、有年地区各地で集落が展開する。東有年・沖田遺跡、西有年・垣内田遺跡、西有年・木ノ目遺跡、有年牟礼・井田遺跡などで多くの遺構が検出されている。特に、東有年・沖田遺跡は建物跡と平地に築かれた横穴式石室を持つ小古墳がセットで検出されており、注目される。また、有年牟礼・井田遺跡からは多くの竪穴建物跡と鍛冶遺構が検出されており、有年地区内の主要な集落遺跡であったことが判明している。

## 古代

飛鳥時代には、古代山陽道が赤穂郡上郡町域を東西に横断し、駿家や古代寺院は上郡町域に立地する。赤穂郡衙も上郡町域に存在したものと推定されている。

当該期の有年地区では遺跡数とその規模は拡大傾向にあり、多種多様な遺構・遺物が検出されている。代表的な遺跡としては、有年牟礼・山田遺跡をはじめとし、有年牟礼・井田遺跡、有年原・クルミ遺跡、有年原・田中遺跡、東有年・沖田遺跡、西有年・堂免遺跡、西有年・長根遺跡などが挙げられる。また、有年牟礼・山田遺跡の北側丘陵には6世紀末から操業を開始したとされる山田奥窯跡が存在しており、須恵器片が採集されている。

有年原・田中遺跡、東有年・沖田遺跡、西有年・長根遺跡では大型の掘立柱建物群や円面硯、墨書き土器などが出土している。また、有年原・クルミ遺跡では「奥津家」と墨書きされた奈良時代前半の須恵器が、有年牟礼・山田遺跡では「秦」と刻書きされた須恵器が出土し、周辺に官衙的な性格を持った集落が存在していた可能性を示している。

古代における赤穂郡は、渡来系氏族とされる秦氏との関わりが深い地域である。平城宮出土木簡には現在の有年原地区に比定される赤穂郡大原郷と秦氏との関連を示すものが含まれる。また、文献上では8~12世紀の郡司として秦氏の名が多く見えることや、旧赤穂郡域には秦河勝を祭神とする大避神社が濃密に分布していることなど、その関連性はあらゆる方面から指摘されている。有年牟礼・山田遺跡から出土した「秦」刻書き須恵器や、官衙的な性格の想定される遺跡が多いことは、秦氏の存在を傍証するものといえるだろう。

また、その設定時期は不明であるが、圃場整備及び区画整理以前の地形図を参照すると、有年地区東部の有年牟礼・井田遺跡及び有年原・クルミ遺跡周辺には一辺109mで構成される条里型地割が確認できる。有年原・田中遺跡や有年牟礼・山田遺跡などの古代の集落遺跡の展開とあわせ、注目される。

## 中世

中世になると、筑紫大道（中世山陽道）が有年地区を東西に横断し、その周辺に遺跡が多く分布するようになる。代表的なものとして大型の掘立柱建物跡が検出された東有年・沖田遺跡、井戸内から木摺臼が出土した西有年・長根遺跡などが挙げられる。また、有年牟礼・山田遺跡に隣接し、青磁・白磁が出土している有年牟礼・宮ノ前遺跡、鍛冶遺構が検出された西有年・往来南遺跡、呪符木簡が出土した有年原・田中遺跡、土坑墓と思われる遺構から龍泉窯系青磁碗が出土した有年原・北山遺跡なども注目される。

東西交通の主要ルートとなったことで、多くの山城や山岳寺院も築かれた。城跡としては有年山城、鍋子城、鶴ヶ堂城、高野須城、後藤陣山城がある。山岳寺院としては、黒沢山光明寺、医王山駿行寺、清水山寺跡、六道山遍照院跡などの寺院が点在する。特に黒沢山光明寺は現在でも多くの石造物と礎石が残されており、大規模な山岳寺院であったことがわかっている。

## 近世以降

近世の有年地区は西国街道（近世山陽道）という東西の陸路交通と、千種川を南北に往来する高瀬舟による河川交通の交差点として栄えることになる。江戸時代の有年地区は、赤穂藩・安志藩・幕府（天領）それぞれの所領となり、各藩の舟着場が千種川沿いに設置された。また、有年地区の中央に存在した有年宿は、およそ100軒の家々が軒を連ね、西国街道中

でも大規模な宿場町であったとされる。

現在でも、千種川を航行する高瀬舟のために設置された高瀬舟灯台や、高瀬舟船着場跡である大波止・小波止、東有年の大庄屋を務めた有年家の長屋門などが、往時の様子を今に伝えている。

### 文化財の宝庫

このように、有年地区には縄文時代前期から近世までの文化財が連綿と存在する。財団法人有年考古館の設立（1950年）に代表される松岡秀夫氏による先駆的な研究活動や、1980年代以実施されている圃場整備・区画整理に伴う発掘調査によって、その内容はかなり明らかになってきている。

これらの成果の蓄積によって、個別の調査成果を当地域の地域史の中に位置づけることが可能となっており、各種文化財の価値をさらに高めるものとなっている。この点においても有年地区はまさに「文化財の宝庫」といえるだろう。

## 2 調査区周辺の地理的環境

本書で報告する有年牟礼・山田遺跡は、有年地区内でも東部にあたる有年牟礼にあり、赤穂市と北側の赤穂郡上郡町とを隔てる丘陵部から流れ出る山田川の東岸に位置している。山田川は南の矢野川へと合流し、矢野川は千種川へと合流している。

調査区は、この山田川によって形成された小規模な扇状地の南端部に位置しており、谷が大きく開けた南向きの微高地上に位置している。調査地の南側、約100mには千種川の支流となる矢野川が迫っている。

調査区の北側には丘陵部がわずかに張り出し、台地上になっている部分があるが、この部分に現在の有年牟礼地区山田集落が位置している。この部分は平成18年度の民間宅地開発に伴う調査で平安時代の集落が存在することが判明しており、少なくとも古代から居住域として集落が営まれているものと考えられる。しかし、古墳時代以前の居住域は発見されておらず、弥生時代や古墳時代に居住域があったかは不明である。

ただし、当遺跡から山田川を隔てた北西側の丘陵斜面には、赤穂市最大の群集墳である塚山古墳群が存在しており、古墳時代後期後半にはそれに対応した居住域が存在したものと推測される。

また、調査区周囲の圃場整備前の地割を観察すると、設定時期は不明であるが、人工的な方形地割をみつけることができる。矢野川を挟んだ対岸の有年原地区や有年横尾地区にも基準方位や基準線を同じにする条里状の方形地割が存在している（赤穂市2008）が、現段階では関連性は不明である。

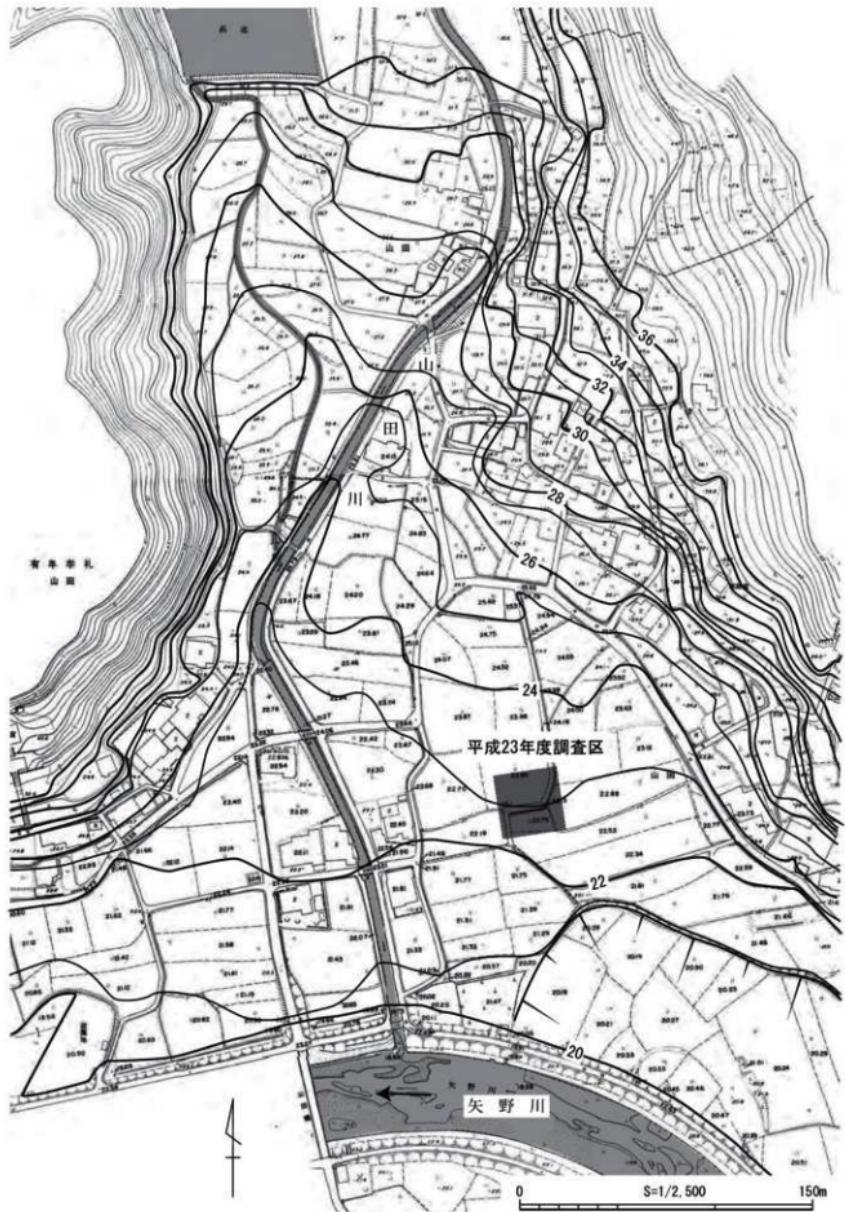


図3 調査区周辺等高線図（昭和63年度圃場整備以前の旧都市計画図を使用）

## 第2章 既往の調査と調査の経緯

### 1 既往の調査

赤穂市北部にあたる有年地区は、前述のように多くの文化財が存在する。これらの文化財、特に埋蔵文化財については、有年考古館の創立者である松岡秀夫氏が、戦前から昭和40年代にかけて地道な遺物採集や分布調査を行い、その存在が明らかにされたものが多い。有年牟礼・山田遺跡についても、松岡氏が先鞭をつけた分布調査によって遺物の散布が確認されていた。

昭和50年代後半には、有年牟礼・山田遺跡を含む有年牟礼地区の農業基盤整備事業（圃場整備事業）が計画され、昭和59年7月に赤穂市農林水産課（当時、農林水産課）により赤穂市教育委員会へ埋蔵文化財の取扱いについての照会があった。昭和61年度より5ヶ年で事業が実施される計画であったこの事業は、計画面積約26.5haという広大なもので、事業地内にはすでに周知の埋蔵文化財包蔵地となっていた有年牟礼・山田遺跡やハトカ茶畠遺跡などが含まれていた。

昭和60年度にはこの農業基盤整備事業に先立ち、赤穂市教育委員会より委託を受けた赤穂市埋蔵文化財調査会によって事業地内の詳細な分布調査が実施された。この分布調査は有年牟礼地区のみでなく、同様に農業基盤整備事業の実施が計画されていた西有年地区及び高雄地区も対象となり、調査面積の合計21.5haという大規模な分布調査となった。この分布調査の結果、有年牟礼地区事業地内のほぼ全域について遺物の散布が認められた。

この調査成果を受け、赤穂市教育委員会は農林水産課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、農業基盤整備工事対象範囲において毎年度確認調査を実施し、埋蔵文化財の存在が確認された部分についてはその都度、保存協議を行うこととした。また、盛土施工などによって遺構の保護が図られる部分は確認調査にとどめ、工事によって破壊される部分については全面発掘調査を実施し、記録保存を行うことに決定した。

昭和61年度からは農業基盤整備事業の進捗に合わせ、事業範囲内の確認調査及び全面発掘調査を実施した。昭和61年度の全面調査の総面積は1,022m<sup>2</sup>であり、弥生時代から平安時代の建物跡や繩文時代のものと思われる石器類が検出され、有年牟礼・山田遺跡が長期間にわたって存続する複合遺跡であることが判明した。

続く昭和62年度にも37ヶ所にトレーニングを設定した確認調査及び合計2,547m<sup>2</sup>の全面発掘調査が実施された。この時の調査では、弥生時代から江戸時代の建物跡や中世の輸入陶磁器等を検出し、遺跡の内容がより詳細に判明した。

そして、昭和63年度には約3.4haが農業基盤整備事業の対象地となり、詳細分布調査を実施した。その成果を受け、44ヶ所にトレーニングを設定する確認調査及び合計4,050m<sup>2</sup>の全面発掘調査を実施した。この調査をもって有年牟礼地区的圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査は完了した。ちなみに、これらの農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査については、団体営ほ場整備事業者（赤穂市）からの委託事業及び国庫補助事業として実施している。

その後、小規模な開発に伴って調査が行われ、平成 18 年度の調査では有年牟礼・山田遺跡の北側隣接地で平安時代の遺構を検出し、遺跡の範囲が拡大することが明らかになった。

また、平成 23 年度には民間宅地開発に伴う確認調査、そして本書で報告する範囲確認調査が実施された。

## 2 平成 23 年度調査の経緯と経過

本書で報告する平成 23 年度の調査は、前述の昭和 63 年度に実施された圃場整備事業に伴う有年牟礼・山田遺跡の発掘調査成果を受けて実施したものである。以下にその経緯を説明する。

昭和 63 年度の発掘調査では、調査時に「No.2 トレント A 区」とした地区から飛鳥時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡や遺物が多数検出されたが、それらの遺構に混じって弥生土器や石材が落ち込んだ溝が検出された。この遺構は調査時には「S D 01」「大溝」「溝状遺構①」と呼称され、弥生時代中期のものとされたが、その性格については不明であった（以下、昭和 63 年度に検出された遺構を「A 区大溝」と呼称する）。

発掘調査終了後の有年牟礼・山田遺跡出土遺物整理調査の結果、A 区大溝出土土器の中に特殊な土器が存在していることが明らかになった。具体的には、胎土に角閃石を含み、他地域からの搬入土器と判断される個体や、大型の装飾器台が含まれていた。

同年度には、有年原・田中遺跡についても発掘調査が実施され、突出部、貼石、装飾器

表 1 有年牟礼・山田遺跡における既往の調査

調査年度	調査主体	調査原因	調査期間	調査面積	備考
昭和 60 年度	赤穂埋蔵文化財調査会	農業基盤整備事業	昭和 60 年 5 月 20 日～昭和 61 年 3 月 31 日	215,000m <sup>2</sup> (分布調査)	分布調査。 有年牟礼・西有年・高疊地区。
昭和 61 年度	赤穂市教育委員会	農業基盤整備事業	昭和 61 年 10 月 27 日～昭和 61 年 12 月 15 日		確認調査。
昭和 61 年度	赤穂市教育委員会	農業基盤整備事業	昭和 62 年 3 月 8 日～昭和 62 年 3 月 23 日	1,022m <sup>2</sup>	本発掘調査。 弥生時代中期～室町時代の遺構。
昭和 62 年度	赤穂市教育委員会	農業基盤整備事業	昭和 62 年 9 月～昭和 63 年 3 月	2,547m <sup>2</sup>	本発掘調査。 弥生時代中期～江戸時代の遺構。
昭和 63 年度	赤穂市教育委員会	農業基盤整備事業		(分布調査)	分布調査。
昭和 63 年度	赤穂市教育委員会	農業基盤整備計画事業	昭和 63 年 4 月 1 日～昭和 63 年 4 月 28 日	4,050m <sup>2</sup>	
昭和 63 年度	赤穂市教育委員会	農業基盤整備計画事業	昭和 63 年 9 月 27 日～昭和 63 年 12 月 31 日		本発掘調査。 弥生時代中期～鎌倉時代の遺構。
平成 8 年度	赤穂市教育委員会	下水管設置	平成 8 年 11 月 6 日～平成 9 年 2 月 25 日	40m <sup>2</sup>	集落排水設備工事に伴う調査。 埋蔵文化財確認されず。
平成 18 年度	赤穂市教育委員会	民間宅地開発	平成 18 年 8 月 9 日～平成 18 年 8 月 11 日	25m <sup>2</sup>	確認調査。平安時代の遺構。 埋蔵文化財包蔵地範囲を拡大。
平成 23 年度	赤穂市教育委員会	民間宅地開発	平成 23 年 6 月 22 日	1 m <sup>2</sup>	確認調査。埋蔵文化財確認されず。
平成 23 年度	赤穂市教育委員会	更回確認	平成 24 年 2 月 13 日～平成 24 年 3 月 31 日	1,000m <sup>2</sup>	確認調査。庄内式扇形圓周墓群、古代の掘立柱建物群。本書にて報告。

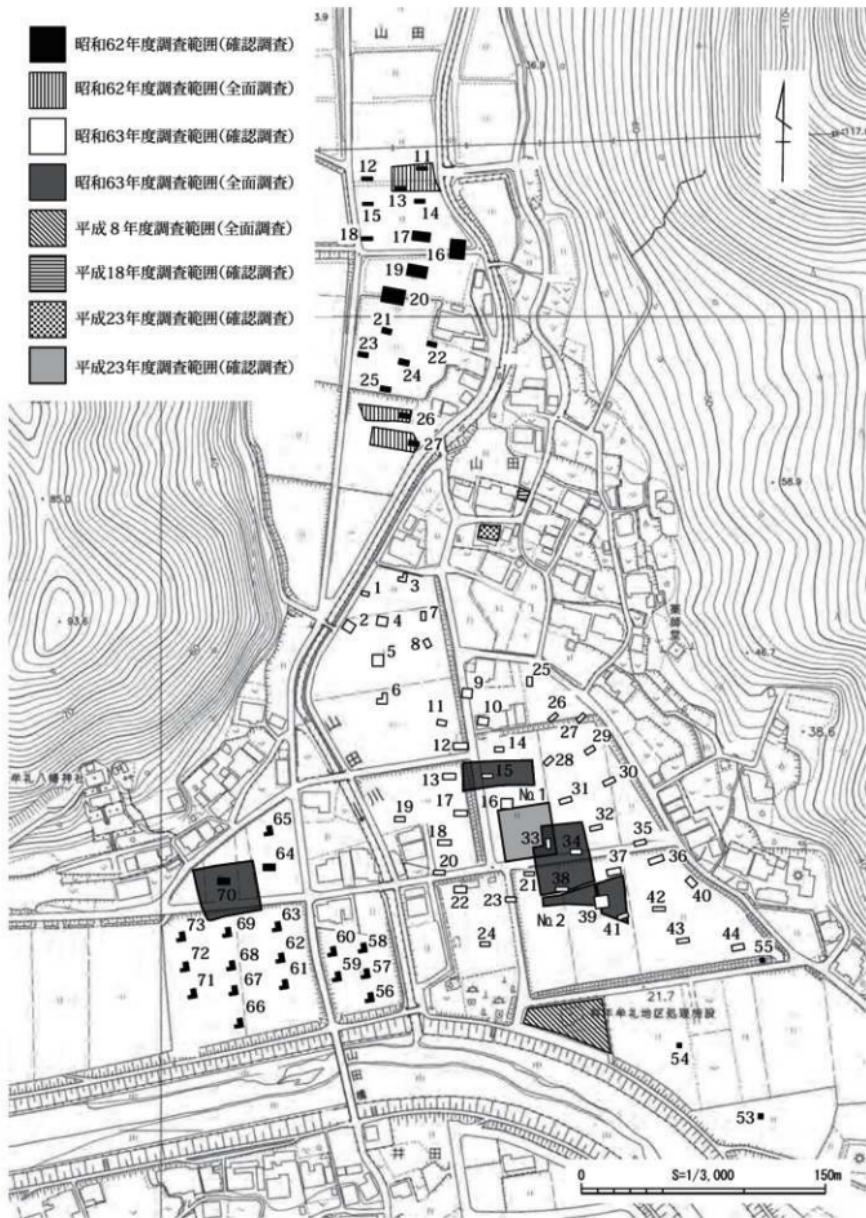


図4 有年牟礼・山田遺跡の既往の調査箇所

台などの供献土器を持つ円形埴丘墓が検出され、有年地区の墳墓の特殊性とともに、その重要性が注目されるようになった。

この成果を受け、有年牟礼・山田遺跡A区大溝出土装飾器台と有年原・田中1号墓出土装飾器台の形状及び溝中に大量の石材が転落しているという検出状況が酷似していることから、A区大溝が墳墓の周溝である可能性が指摘された。また、出土土器中には角閃石を含む搬入土器も存在し、注目された。さらに、出土土器の年代は庄内式期に併行するものと理解されるようになり、有年原・田中遺跡埴丘墓群に後続する墳墓である可能性が指摘されるようになった（赤穂市教委 1999、岸本 2006、赤穂市教委 2008 ほか）。

考古学研究上で注目されてきた有年原・田中1号墳丘墓に後続する墳墓の様相が判明すれば、赤穂市の歴史のみならず、周辺地域をも含めた弥生時代から古墳時代への墳墓や社会の変化を明らかにするうえで非常に重要な資料となることが期待された。

そのため、赤穂市教育委員会ではこの遺跡の重要性を鑑み、昭和63年度の調査で検出された遺構の範囲及び内容を把握するための確認調査を実施することとした。

### 3 調査の体制

本書で報告する有年牟礼・山田遺跡の調査については、赤穂市教育委員会事務局が主体となり、平成23年度に発掘調査を実施、平成24年度から25年度にかけて整理調査及び報告書の執筆作業を行った。

赤穂市教育委員会事務局

平成23（2011）年度（発掘調査）

【教育長】 室井久和 【教育次長】 高山康秀

【文化財担当課長兼文化財係長事務取扱】 中田宗伯 【市史編さん担当係長】 小野真一

【文化財整備推進専門員】 宮崎素一 【民俗・普及担当】 藤田忠彦

【発掘・整理担当】 荒木幸治 【事務担当】 加藤章江、平田ちひろ

【発掘作業員】 山中良平（大阪大学大学院生）

【調査員】 入江麻紀、大川加奈子、坂井美和、山本直美

平成24（2012）年度（整理調査）

【教育長】 室井久和 【教育次長】 三谷勝弘

【文化財担当課長兼文化財係長事務取扱】 中田宗伯 【市史編さん担当係長】 小野真一

【文化財整備推進専門員】 宮崎素一 【文化財調査担当】 藤田忠彦

【整備・普及担当】 荒木幸治 【発掘・整理担当】 山中良平

【事務担当】 村杉美季、平田ちひろ

【調査員】 入江麻紀、坂井美和、高松尚子、永谷文香、山本直美

平成 25（2013）年度（整理調査）

【教育長】 室井久和 【教育次長】 三谷勝弘

【文化財担当課長兼文化財係長事務取扱】 中田宗伯 【市史編さん担当課長】 小野真一

【文化財整備推進専門員】 宮崎素一 【文化財調査担当】 藤田忠彦

【整備・普及担当】 荒木幸治 【発掘・整理担当】 山中良平

【事務担当】 村杉美季、池田早織

【調査員】 入江麻紀、坂井美和、永濱優美子、山本直美



現地説明会風景（平成 24 年 3 月 20 日開催）

## 第3章 昭和63年度の調査概要

前述のように、平成23年度の発掘調査は昭和63年度の調査成果を受けて実施したものであるため、まず本章で昭和63年度調査の概要を述べておきたい。

### 1 調査の経緯と経過

発掘調査は、昭和61年度より開始された有年牟礼地区農業基盤整備事業に伴って、確認調査及び全面発掘調査が実施された。確認調査は2m×5mのトレンチを44ヶ所に設定し、記録保存が決定した部分、計4,050m<sup>2</sup>について全面発掘調査を実施した（図4）。

調査期間は昭和62年度確認調査時の70トレンチを拡張して実施された発掘調査が昭和63年4月1日から昭和63年4月28日までである。44ヶ所の確認調査及び全面発掘調査が昭和63年9月27日から昭和63年12月31日までとなっている。当時の調査担当者は、宮崎素一、藤田忠彦、篠宮欣子である。

当時の出土遺物整理作業については、洗浄が行われた状態で中断しており、一部の主要な遺物のみ接合・復元、実測が行われた状態であった。そのため、平成23年度発掘調査及びその整理作業と合わせて昭和63年度出土遺物の整理作業も実施した。

### 2 調査概要

**調査の概要** 昭和63年度の全面発掘調査は70トレンチ（昭和62年度確認調査No.70トレンチ地点）、No.1トレンチ（同No.15トレンチ地点）、No.2トレンチ（同No.33、34、38、39、41トレンチ地点）の計3区に分けられている。

70トレンチは約890m<sup>2</sup>の調査区である。調査時は有年牟礼・山田遺跡の範囲に含まれていたが、現在は有年牟礼・宮ノ前遺跡として登録されている。検出された遺構は柱穴300基以上、掘立柱建物跡7棟、カマド跡4基、土坑7基、土坑墓



図5 昭和63年度調査No.70トレンチ遺構配置図

1基、溝状遺構3条が検出されている。

掘立柱建物跡は桁行3間×梁行2間で、規模は桁行6m×梁行4m前後のものが主体となっている。土坑からは白磁片が出土し、土坑墓からは須恵器の壺を利用した土器棺や供

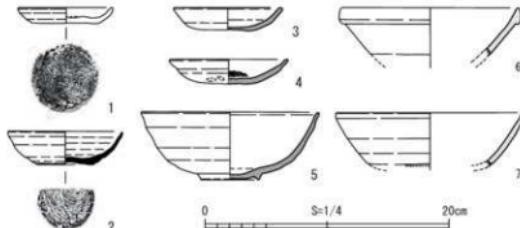


図6 昭和63年度調査No.70トレンチ出土遺物

献土器となる瓦器碗が出土している。出土遺物から、遺構は13世紀代のものが主体と考えられる(図6)。

包含層からは弥生時代の石器や、鎌倉時代の輸入陶磁器(青磁碗・白磁碗)、瓦器碗、瓦器小皿、土師器小皿、鉄製紡錘車などが出土している。輸入陶磁器が多く出土した遺跡として、赤穂市内でも重要な中世遺跡である。

No.1トレンチは約630m<sup>2</sup>の調査区である。検出された遺構は柱穴300基以上、掘立柱建物跡3棟、土坑4基である。出土遺物から、遺構は平安時代以降のものと考えられる。

No.2トレンチは約1,600m<sup>2</sup>の調査区で、調査区の北西部から平成23年度調査区で方形周溝墓と認定された「A区大溝」が検出された。他に検出された遺構として、柱穴500基以上、掘立柱建物跡7棟以上、溝状遺構7条、井戸1基、カマド跡3基を検出している。遺構の時期は奈良時代以降のものである。井戸は木製井戸枠を作っており、出土遺物から奈良時代のものと判断される。また、包含層より「秦」刻書須恵器が出土している。

**A区大溝の概要** No.2トレンチでは、主に古代の掘立柱建物跡が多く検出されたが、調査区の北西部(調査時のグリッド名「A区」)では大型の溝状遺構が検出された。調査直後の実績報告書によれば、「A区大溝」は「L字形状を呈し、幅約2.5m、深さ0.8mをもつ。溝中には、割石による礫石列が存在した。また、弥生時代中期の壺や須恵器などが出土した。遺構性格としては不明である」とされている。ここでは再整理結果も踏まえ、「A区大溝」の概要を述べる。

A区大溝は東西10.5m、南北12.5mにわたって検出され、北東方向に主軸を持つ逆L字状を呈している。最上層の黒褐色土は古代の遺物を包含し、周囲には古代の遺構が集中していたため、検出当初は弥生時代の遺構と認識されていなかったという。溝は中央部分でほぼ直角に曲がり、東側と南側の溝(以下、東溝・南溝)に分けられる。

東溝は長さ南北9.5m、深さ0.5mで、北側で溝が途切れている。溝の埋土には、多数の石材が含まれていた。石材は角礫で、溝の底面ではなく、底からやや高い位置から検出されている。出土遺物はほとんどなかったという。

南溝は長さ8.6m以上で、調査区外北西側へと続いている。東側の溝と同様に石材が検出されているが、南東隅では石材の量が少ない。これは当初から南東隅の溝の深さが浅かったために、石材が後世の削平とともに失われたためと思われ、写真等からもこの部分は周囲に比べ溝



図 7 昭和 63 年度調査 No. 2 トレンチ遺構配置図

底の標高が高かったことがわかる。

調査の最終段階になって溝内に落ち込んだ石材を除去すると、石材の下からは大量の土器が出土した。当時の出土状況図によれば、出土土器は大きく 3 群に別れ、南東隅に近い部分では完形に近い広口壺（19）や壺の口縁部（22）が、南溝のほぼ中央から須恵器・甕（39）が出土したほか、西半から調査区の西壁にかかる部分から大量の弥生土器が出土した。装飾器台（33）や角閃石の含まれる加飾壺（34）、大型二重口縁壺（35）はこの地点から出土しており、大部分の破片は調査区西壁断面の精査中に出土したものであるため、詳細な出土状況は明らかではない。しかし、当時の調査担当者によれば大型二重口縁壺（35）は小片となっていたが、加飾壺（34）はほぼ完形の口頸部が逆位で出土したことである。装飾器台（33）も小片化しているがほぼ完形に復元できることや、加飾壺（34）の出土状況などから、南溝の西端で検出された土器群は二次的な堆積や移動を受けたものではなく、溝内に供獻されていた可能性も考えられる。

**出土遺物の概要** 昭和 63 年度調査の出土遺物は、縄文時代から中世にいたるまでのものがあるが、大部分は飛鳥時代後半から奈良時代前半の遺物が主体であり、集落の中心時期を示して

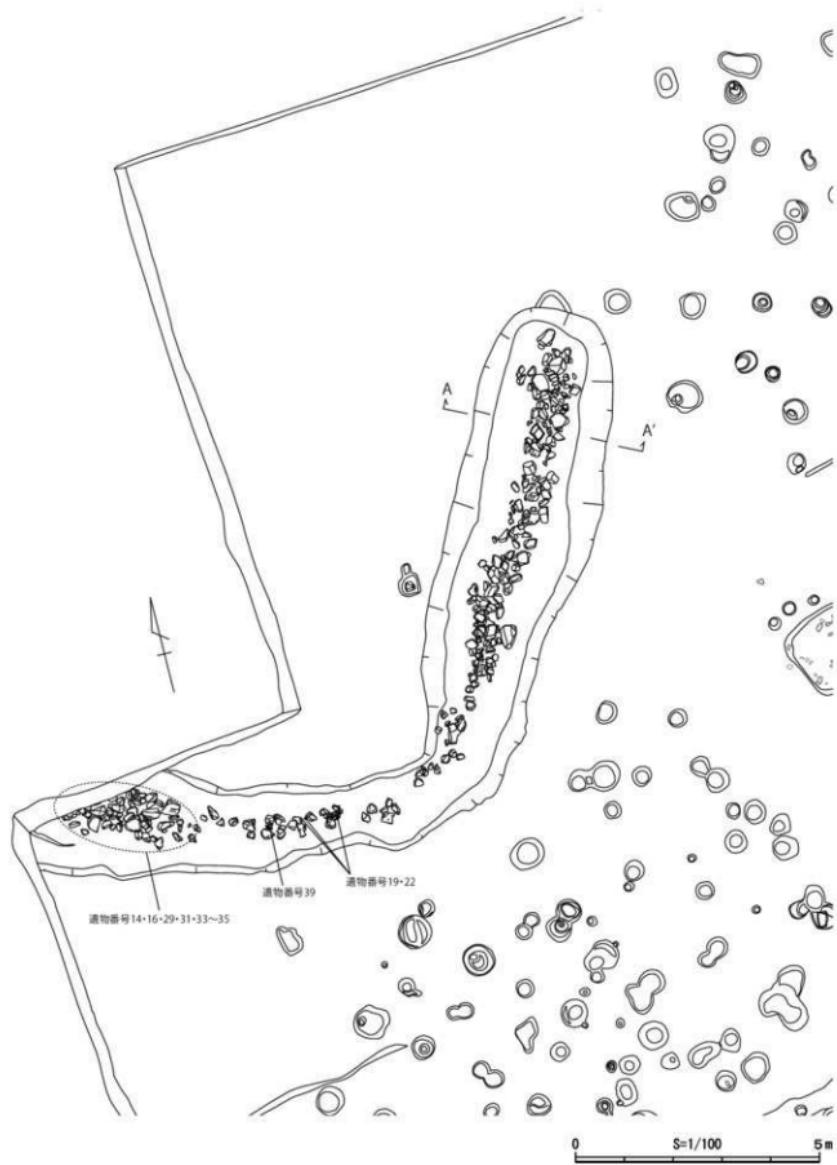


図8 昭和63年度調査 A区大溝平面図



図9 昭和63年度確認調査出土遺物

いる。ここでは出土遺物の概要について報告したい。

8～13は確認調査34トレンチから出土した遺物である。No.2トレンチのA区大溝周辺にあたる。

8は弥生土器・壺の底部。底部は比較的しっかりとしたもので、わずかに上げ底になっている。内面は細かな横方向のハケ、外面は縦方向のミガキ。胎土は黄褐色系。

9は須恵器・杯B身。高台はやや内側に貼りつけられている。底部はヘラ切り無調整。他は回転ナデ。

10は須恵器・杯B蓋のつまみを持たないタイプ。全面回転ナデ。激しく焼け歪んでおり、中央部が陥没しているような形状となり、本来の形状を保っていない。外面全体に自然釉が付着しているが、破断面の一部にも自然釉が付着している。また、外面には円形に他個体の付着がみられ、その内側には自然釉の付着がみられない。このことから、一度割れた後に、再度、径9.2cmの個体が重ねられて焼成されたことがわかる。転用焼台の可能性が高い。

11は須恵器・高杯。低い脚部に杯B蓋を天地反転させたような平坦な杯部を持つ。全面回転ナデ。

12は須恵器・椀。口縁部はわずかに肥厚する。全面回転ナデで、底部は右回転糸切。

13は打製石鐵。サヌカイト製で重量0.6g。

14～35はA区大溝から出土した弥生時代の遺物である。

14は弥生土器・鉢の口縁部。口縁部は面を持つ。全面横方向のナデ。外面には不自然なふくらみがあり、片口の一部と思われ、片口鉢の口縁部になる可能性が高い。胎土は黄褐色系。

15は弥生土器・甕の底部。やや上げ底になっている。内面は円形に横方向のハケを施す。外面は縦方向のナデか。胎土は黄褐色系。

16は弥生土器・甕の底部。底部はほぼ痕跡化している。内面ケズリ。胎土は黄褐色系。当地域ではあまりみられない形状の甕の底部。鉢の可能性もある。

17は弥生土器・直口壺の口縁部か。内外面ともナデ調整。胎土は黄褐色系。

18は弥生土器・広口壺。口縁部は下方に拡張し、端部に面を持つ。底部は明瞭に作り出

されている。外面は縦方向のミガキ、内面は下半が横方向のケズリ、上半がユビオサエ。特に内面上半は粘土接合痕が明瞭に観察でき、粘土組積み上げではなく、粘土組巻き上げによって成形されていることが明瞭に観察できる。外面に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。また、胴部下半の底部付近に円形の穿孔がみられる。胎土分析結果は在地産である（第5章参照）。

19は弥生土器・広口壺。口縁部は単純に外反する。比較的明瞭な底部を持つ。外面は縦方向のミガキ。内面は横方向のケズリ。胎土分析結果は在地産である（第5章参照）。

20は弥生土器・鉢の肩部。内面は縦方向のハケを施す。外面には、多条沈線と列点文が施文されている。列点文はC字状の文様が縦7個で一単位となる。胎土は黄褐色系。

21は壺もしくは器台の口縁部。端部に剥離痕がみられ、本来の形状は上方に立ち上がりを持つものと思われる。外面は縦や斜め方向のハケ。胎土は茶褐色系。

22は弥生土器・広口壺の口縁部。口縁端部には面を持つ。外面は右上がりのタタキ後、細かなハケによってタタキを消す。胎土は茶褐色系。

23は弥生土器・器台の胴部から口縁部と思われる個体。受部にあたる部分は平坦面をなし、直立する胴部へとほぼ直角につながる。口縁端部は完全に剥離しており、本来の形状は不明。おそらく上下に拡張し、口縁部に拡張面をもつと思われる。胴部内面は横方向のケズリ、受部外面には横方向に強いナデが施される。胎土は黄褐色系。

24は弥生土器・装飾器台の脚部上半から胴部。接合しないが同一個体と思われる3破片からの復元である。脚部と胴部の境界となる屈曲部に断面M字状の突帯を1本巡らせる。突帯には3条一単位となる粗い波状文が1段施文されている。波状文は部分的に2段になっている部分もある。透穴は脚部に1段、胴部に2段みられ、脚部と胴部の透穴は千鳥配置となり、最低でも5方向以上にあけられている。内面はユビオサエで粗く成形され、粘土接合痕が明瞭に観察される。外面は細かな縦方向のハケ。脚部外面はミガキ調整か。脚部に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。昭和63年度A区大溝出土破片と接合するものが平成23年度調査区1号方形周溝墓南溝東半から出土している。胎土分析結果は在地産である（第5章参照）。

25は弥生土器・装飾器台の脚部。昭和63年度A区大溝出土破片と同一個体と思われるものが平成23年度調査区1号方形周溝墓南溝東半から出土している。脚端部は剥離している可能性もあるが、残存状況が悪く判断できない。外面には3条の沈線が巡り、その間を充填するように波状文が2段分、施文されている。内面は細かな横方向のハケ。内面に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。

26は弥生土器・鉢もしくは高杯の口縁部と思われる。内面は細かなミガキ。口縁部外面には6条の沈線が施文されている。胎土は黄褐色系。胎土分析結果は在地産である（第5章参照）。

27は弥生土器・高杯の口縁部。複合口縁状を呈し、口縁部の中位には粘土接合痕が観察できる。調整は磨滅のため不明。胎土は黄褐色系。

28は弥生土器・高杯の杯部。外面に脚柱部の剥離痕跡がみられる。外面は縦方向のハケ、内面は縦方向のミガキ。杯部に断面円錐形の穿孔のようなものがみられるが、不明である。胎土は黄褐色系。

29は弥生土器・高杯の脚柱部。上端には粘土を付加し、杯部を成形する際の接着痕跡と

思われる爪形の刺突が1周している。内面にはシボリ痕がみられる。胎土は黄褐色系。

30は弥生土器・高杯の脚柱部。ユビオサエによって粗く成形されている。内面には粘土接合痕が観察できる。あまり類例のない形状をしており、高杯とならないかもしれない。胎土は黄褐色系。

31は弥生土器・高杯の脚部。脚端部は面を持ち、外面には1条の沈線が巡る。胎土は黄褐色系。

32は弥生土器・高杯の脚部。脚端部には面を持ち、1条の沈線を巡らせる。内面は横方向のミガキ。円形透穴の一部が確認できる。胎土は黄褐色系。

33は弥生土器・大型装飾器台。脚部・胴部・受部が明瞭に分かれる高杯状の形状を呈す。脚部断面の粘土紐接合痕のみ外傾接合となっていることから、接合成形はいわゆる「倒立技法」を使用していると判断される。つまり、天地逆位の状態で脚部を成形後、正位置に戻し、その上に粘土紐を積み上げることで胴部と口縁部を成形している。表面は磨滅が激しいが、内外面とも縱方向のハケが確認できる。口縁部は大きく垂下させることで拡張面を成形し、そこに比較的太いヘラ状工具を用いて大ぶりで粗雑な鋸歯文を施文している。胴部には突帯が6条巡り、その断面形状は四角形や三角形、M字状など一定しない。円形透孔は4段、それぞれ5~6方向に穿孔されている。外面の一部に黒斑と赤色顔料の塗布が認められる。色調は黄褐色系。胎土分析結果は在地産である（第5章参照）。

34は弥生土器・加飾壺。外面は細かい縱方向のハケの後、ミガキ。胴部内面は細かな横方向のハケ、口縁部内面は縱方向のミガキ。口縁部は大きく垂下し、拡張面を成形している。拡張面には擬四線状の沈線の上に、円形浮文が貼りつけられている。円形浮文は3個1単位となり、4方向を意識して貼りつけられているが、4個1組となっている部分がある。円形浮文の上には二重竹管文が施文され、円形浮文貼付後には拡張面下端に刻目が施されている。頸部には細い突帯が巡り、肩部には直線文と波状文からなる文様が施文されている。両文様とも施文原体は同じもので、6~7本1単位となる櫛状の工具で施文している。施文順は上段から下段へと順に施文されている。底部は小さな円盤状を呈する。胎土は茶褐色系で、細かな粒子の黒雲母と角閃石を含んでいる。胎土分析結果は讃岐産である（第5章参照）。

35は弥生土器・大型二重口縁壺。外面は縱方向のミガキ、内面は細かなハケ。口縁端部には円形浮文が貼りつけられ、一重の竹管文が施文されている。円形浮文は口縁端部をほぼ等間隔に一周している。頸部には突帯が巡り、突帯貼付後に大きく刻目がつけられている。胎土は茶褐色系で、大きな粒子の黒雲母と角閃石を含んでいる。胎土分析結果は讃岐産である（第5章参照）。

36~43はA区大溝や周辺から出土した弥生時代以外の遺物。

36は須恵器・杯H身。底部ヘラ切り無調整。他は回転ナデ。

37は須恵器・杯B蓋。つまみは一部のみ残存しており、形状は不明。全面回転ナデ。口縁部内面に他個体の付着がみられ、重ね焼きの痕跡と思われる。外面と内面の一部に自然釉

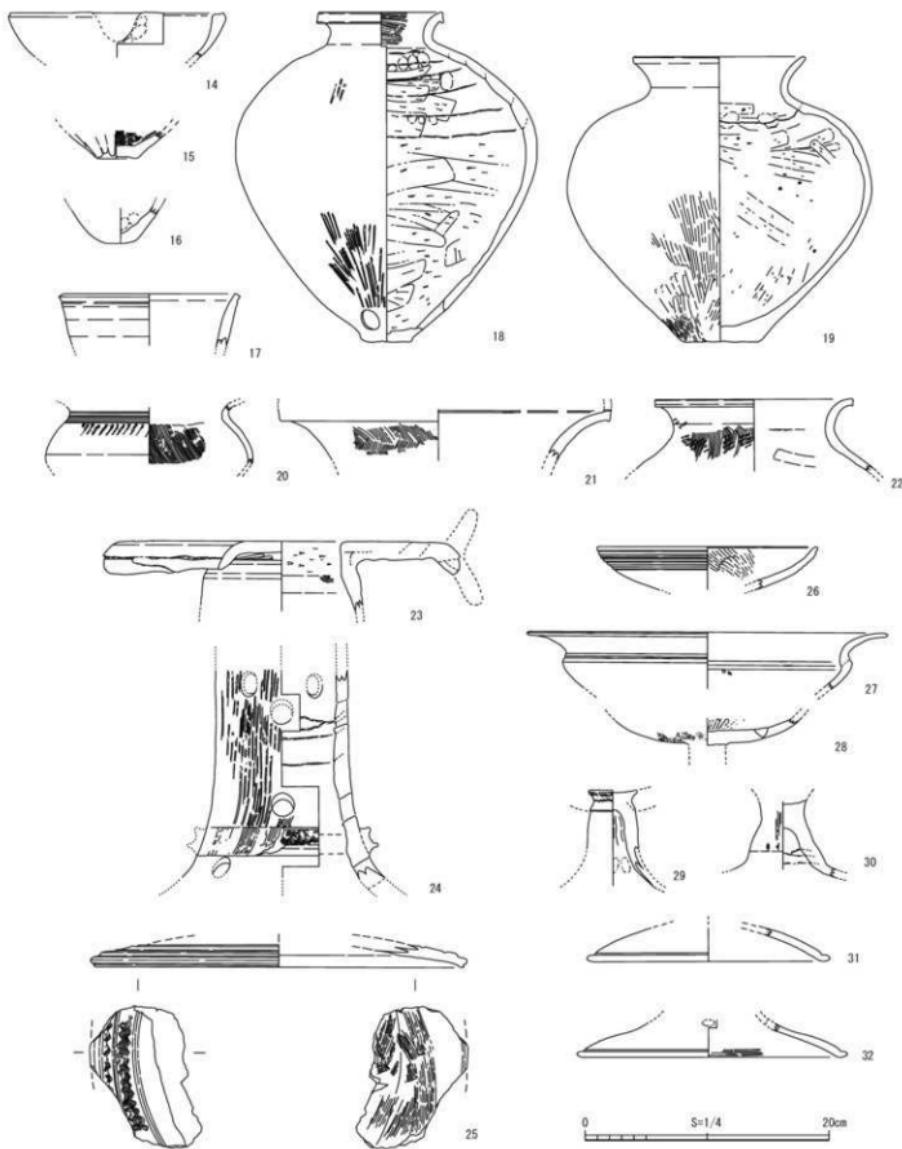


図 10 昭和 63 年度調査 A 区大溝出土遺物 1

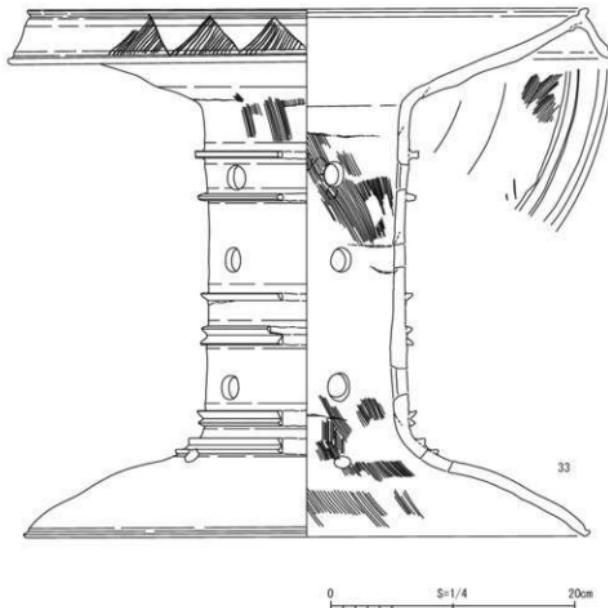


図11 昭和63年度調査 A区大溝出土遺物2

が付着している。

38は須恵器・長頸壺の肩部から頸部。全面回転ナデ。肩部に「×」を連続させたような線刻文様が施文されているが、文様は「×」が1単位ではなく、「/」を1周施文した後に、「＼」が施文されることで「×」の連続のようにみえている。激しい焼け膨れがみられる。

39は須恵器・甕の肩部から口縁部。口縁部は全面回転ナデ。肩部は外面格子タタキ、内面同心円文當て具痕。肩部の形状がいびつなため、横瓶の可能性がある。

40は白磁・椀の底部。高台は削り出し輪高台。高台以外、全面回転ナデ。見込み部には1条の沈線が巡る。内面全面と外面の上半に施釉している。

41は須恵器・杯類の口縁部。全面回転ナデ。外面には細い刀子状の工具で、「秦」と刻書されている。

42は打製石鏃。サヌカイト製で重量 1.1 g。

43は縄文土器・深鉢の口縁部付近と考えられる個体。縄文時代晚期のいわゆる突帯文土器の可能性がある。器壁には突帯が貼りつけられ、その突帯にD字状の刻目が施されている。

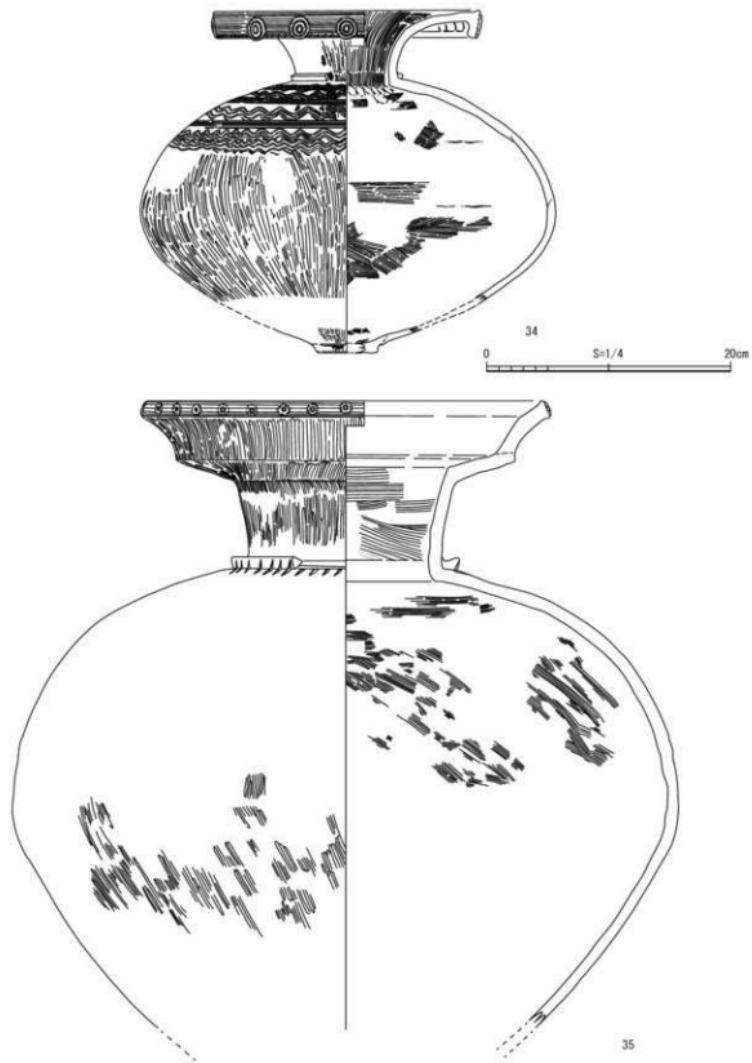


図 12 昭和 63 年度調査 A 区大溝出土遺物 3

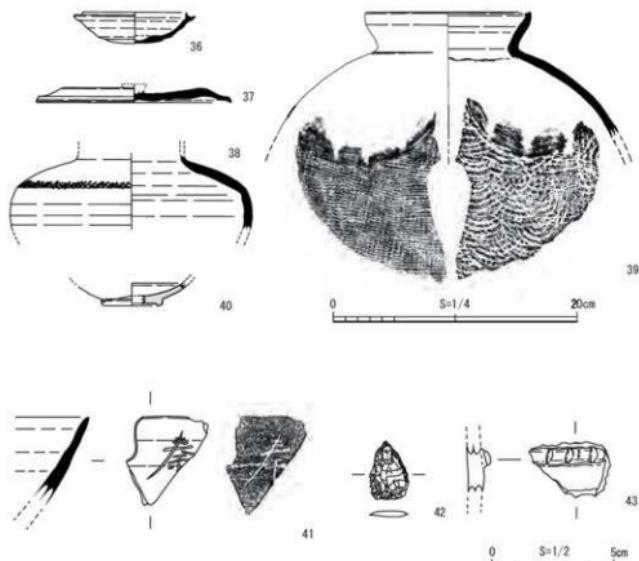


図 13 昭和 63 年度調査 №2 トレンチ A 区出土遺物

### 3まとめ

昭和 63 年度調査で検出された「A 区大溝」は調査範囲が部分的であったため、調査当時はその重要性が十分には認識されていなかった。しかし、その後の整理調査や類例の調査等で、角閃石を胎土に含む搬入土器の存在や墳墓遺構の可能性が明らかとなったことは非常に大きな成果となり、平成 23 年度の発掘調査の契機となった。

調査当時の最大の成果は、飛鳥時代から奈良時代の大規模な集落跡が検出されたことであった。赤穂市内では最大級の古代集落遺跡であると同時に、「秦」刻書須恵器をはじめとする律令期の遺物が出土するなど、赤穂市の古代集落の様相を明らかにし得る大きな成果を得ることができた。その大規模さから、かつては赤穂郡衙や赤穂郷家の可能性が指摘されたこともあった（水口 1992）。また、隣接する有年牟礼・宮ノ前遺跡の調査でも、中世を中心とする遺構を多数検出しており、古代から中世への集落変遷を考える上で重要な資料となっている。

## 第4章 平成23年度の調査成果

### 1 調査概要

平成23年度の発掘調査は、昭和63年度調査で確認されたA区大溝の範囲確認調査とし、A区大溝の延長が存在すると思われる範囲、約1,000mに調査区を設定し、発掘調査を実施した。

検出された遺構は、弥生時代中期後半の土坑1基（土坑1）、弥生時代終末期の方形周溝



図14 平成23年度調査区平面図

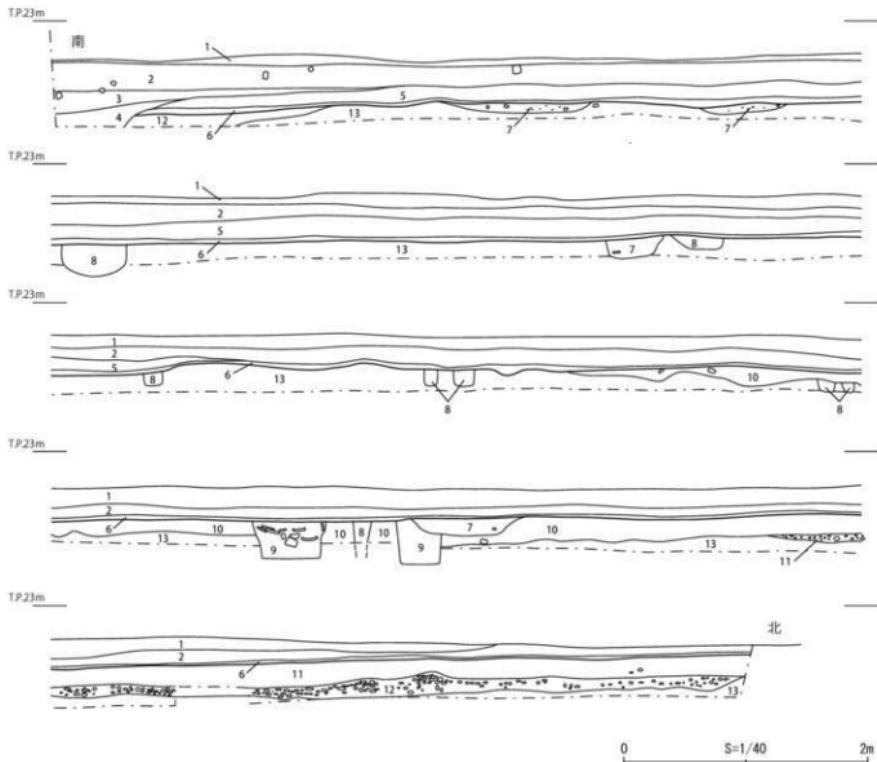


図 15 平成 23 年度調査区遺構配置図

墓 2 基（1・2 号方形周溝墓）、飛鳥時代から奈良時代前半の掘立柱建物跡 7 棟（掘立柱建物跡 1～7）、土坑 2 基（土坑 2・3）、土器を包含する埋土を持つ落ち込み 1ヶ所（落ち込み）、平安時代の溝 1 条（溝 1）である。遺物は縄文時代晩期から江戸時代までのものが出土したが、大部分は弥生時代終末期と飛鳥時代後半から奈良時代前半までの遺物である。

## 2 基本層序

調査区は標高およそ 22.7 m に位置し、南西側に向かって緩やかに傾斜している。調査地の



現代・水田底土	古代・土坑埋土
1 :HueN/7(灰白) 細粒砂 しまり強	7 :Hue10YR6/2(灰黄褐色) 中粒砂 しまりやや弱 マンガン・粗砂含む
現代・昭和63年度ほ場整備時造成土	8 :Hue10YR6/3(にふい黄橙) 中粒砂 しまりやや弱 炭・焼土含む
2 :Hue10YR6/3(にふい黄橙) 細粒砂 しまり強	9 :Hue10YR4/1(褐色) 細粒砂 しまり強
現代・昭和62年度調査埋土	落ち込み埋土
3 :Hue5B6/1(青褐) 中粒砂 マーブル状 しまりやや弱	10 :Hue10YR5/1(褐色) 砂礫 しまり強 径1~3cmの亜角礫含む
4 :Hue10BG5/1(黒褐) 中粒砂 マーブル状 しまりやや弱	11 :Hue10YR5/1(褐色) しまり強 鉄分沈着
中世・近世・耕作土	地山
5 :Hue2.5Y7/1(褐白) 細粒砂 しまりやや弱	12 :Hue10YR3/1(黒褐) 細粒砂 しまり強
6 :Hue7.5YR6/6(橙) 細粒砂 しまりやや弱 鉄分沈着	13 :Hue10YR7/2(にふい黄橙) 細～中粒砂 しまり強 径1cm以下の礫含む

図 16 調査区土層断面図

現況は水田であり、現地表面 20cmまでは現代の耕作土が堆積している（図 16 - 第 1 層）。その下層には昭和 63 年度の圃場整備に伴う造成土（図 16 - 第 2 層）が約 20cm に渡って堆積し、その下層には中世以降の耕作土が堆積している。（図 16 - 5・6 層）。遺構検出面はその下層、標高 22.3 ~ 22.6 m に存在する。ただし、調査区の南西端については記録保存調査の対象となつた地点であるため、圃場整備による切土工事によって遺構面が完全に削平されている。遺構面は自然地形に沿って北東から南西へ向かって低くなっている。

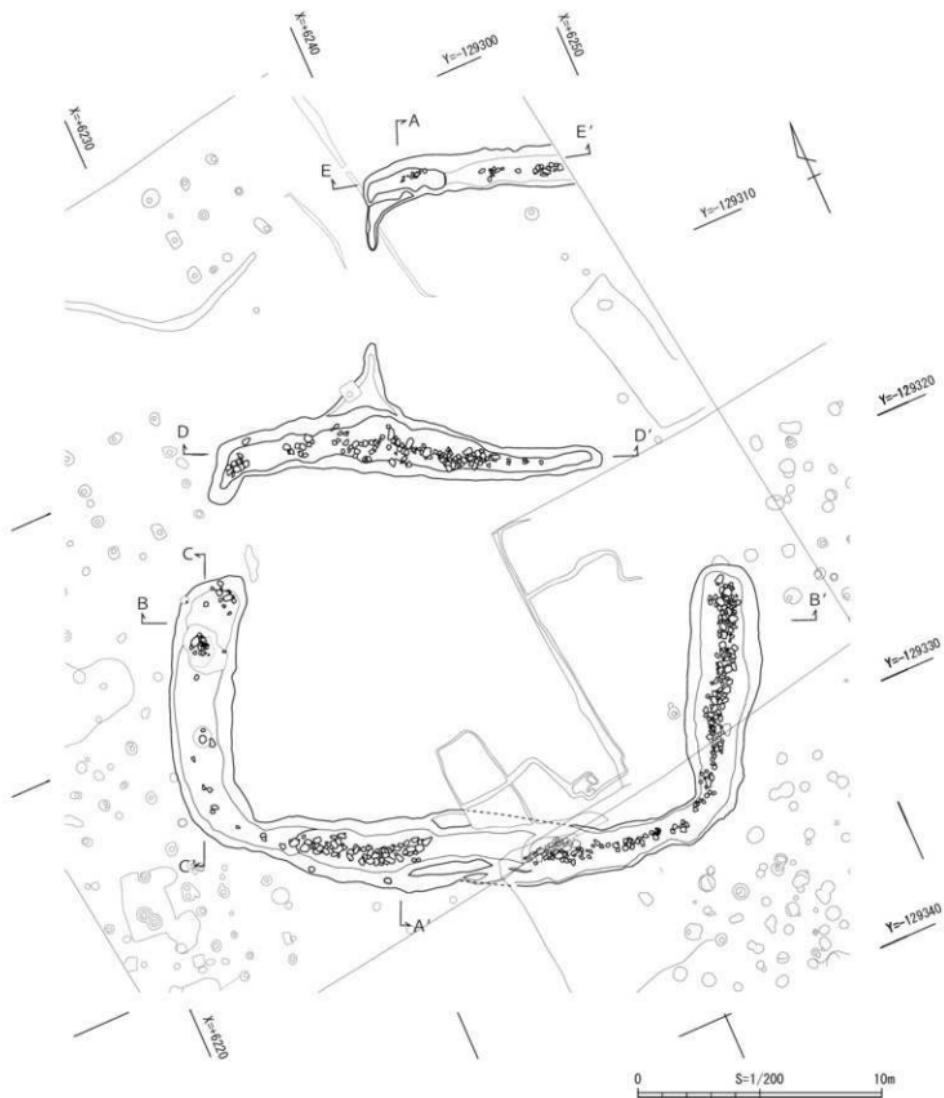


図 17 昭和 63 年度・平成 23 年度調査区統合図

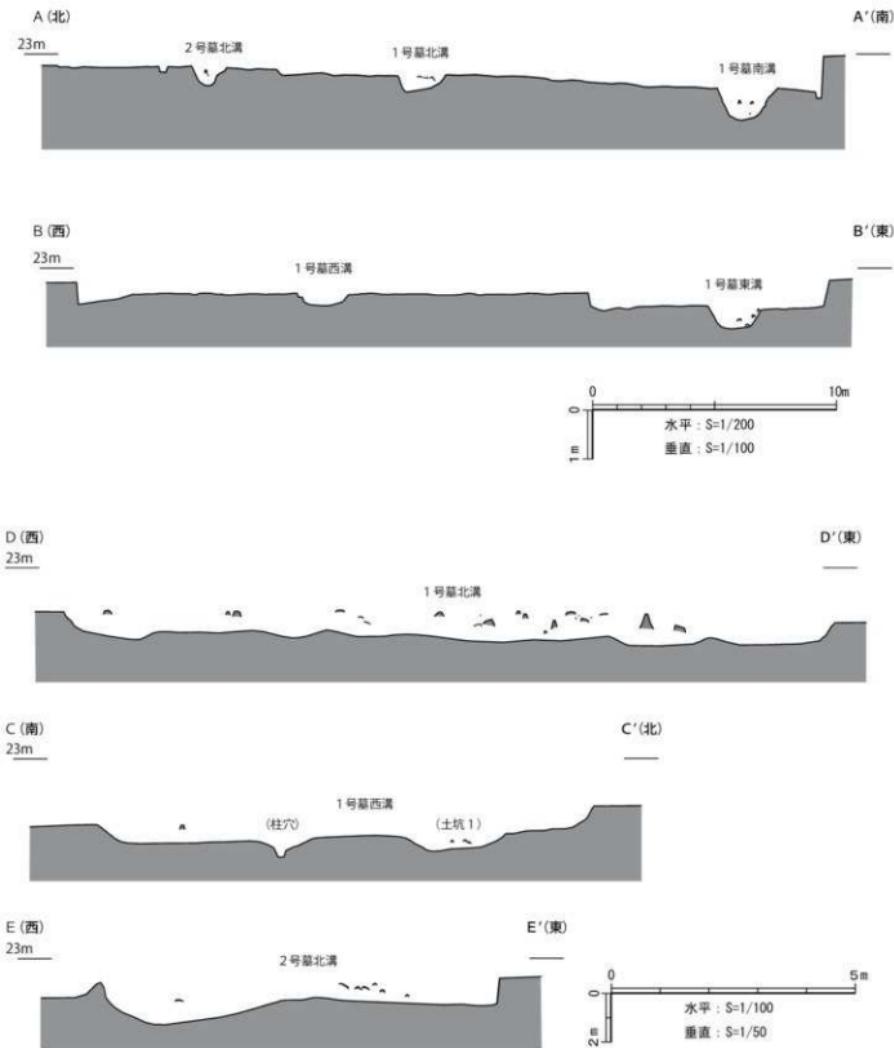


图 18 调查区断面图

遺構面は1面のみで、弥生時代終末期から中世までの遺構が検出された。南側の地山は比較的均質な中粒砂からなるが、北側では洪水砂とおもわれる砂礫が地山となっている。

### 3 弥生時代の遺構・遺物

#### (1) 土坑1

土坑1は調査区のほぼ中央で検出された。上層は、後述する1号方形周溝墓の西側周溝によって完全に破壊されており、検出できたのは下層だけと思われる。また、埋土の土質が1号墓周溝埋土に酷似していたため当初その存在を認識できず、完掘した段階でその存在を認識した。そのため、1号方形周溝墓西溝出土遺物との間に混入がみられる。

規模は検出面で直径2.5m、深さ9cmを測り、形状は円形を呈する。埋土は一層で、地山に接するように底面から弥生土器が出土した。

44は土坑1の底面に張り付くように出土した弥生土器・壺の底部。焼成はやや悪く、表面は剥離・磨滅している。周囲からは接合不可能だが、同一個体と思われる破片が散乱した状態で検出されている。

出土した土器から、土坑1は弥生時代中期後半の遺構と判断される。

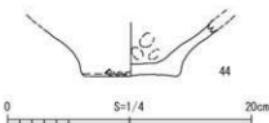


図19 土坑1出土遺物

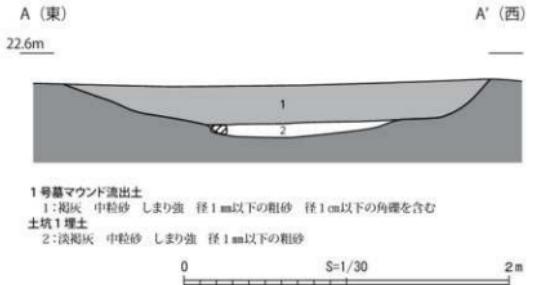


図20 1号墓西溝土層断面図

#### (2) 1号方形周溝墓

**内容と規模** 今回の調査は、この1号方形周溝墓（以下、1号墓）の範囲確認を目的として実施したが、検出された遺構は地山に掘りこまれた溝及び溝内に散乱した石材と土器群のみであり、遺構の残存状況は良好であるとは言い難い。しかし、本遺構はその形状や出土土器等から「方形周溝墓」と判断した。その根拠については第6章にて詳述することとし、

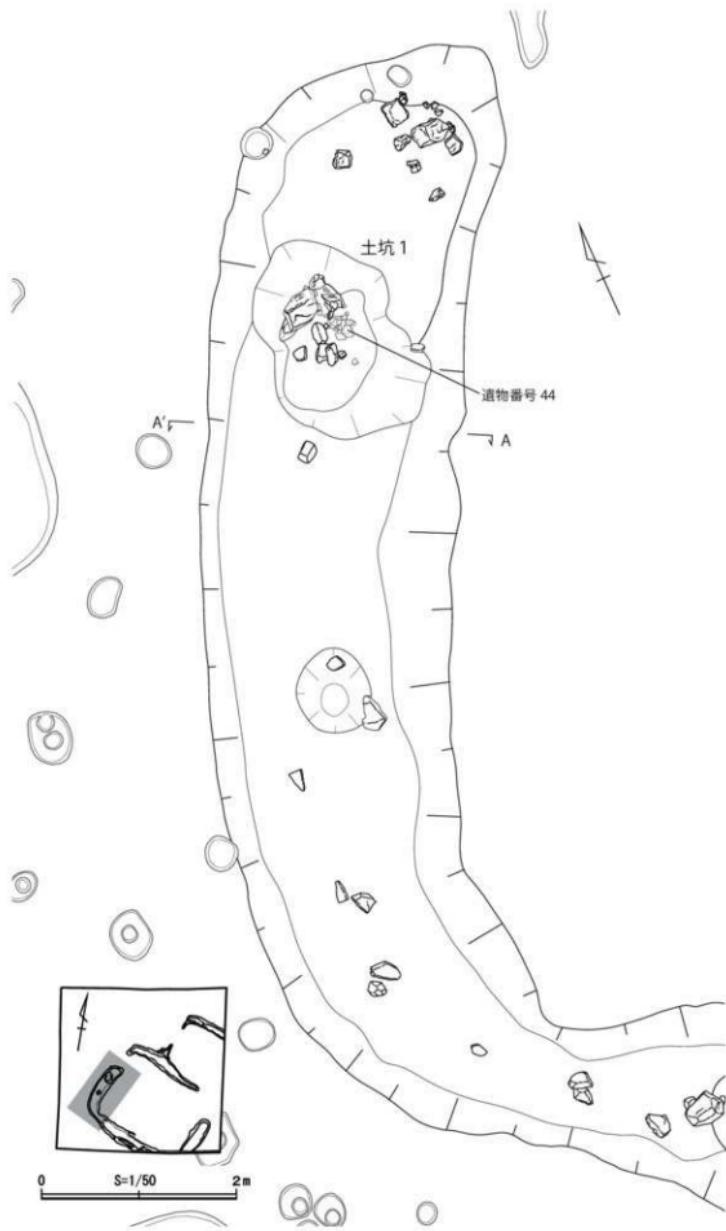


图 21 1 号墓西溝平面图

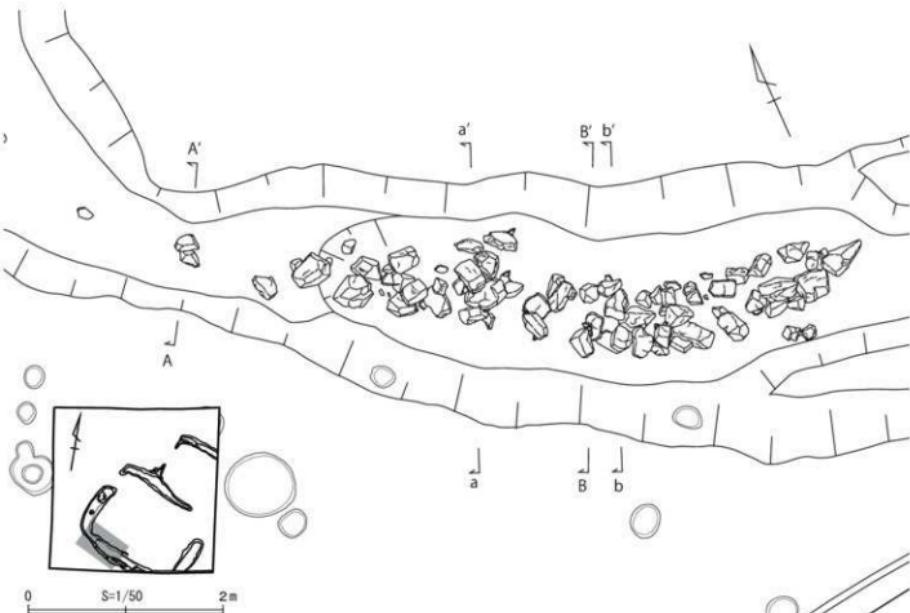


図 22 1号墓南溝平面図

本節では遺構・遺物の検出状況といった事実報告及び観察結果についての報告を行う。

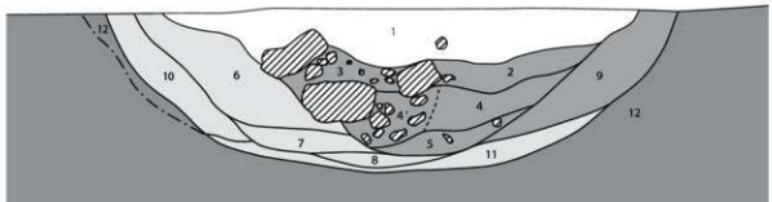
第3章で述べたように、1号墓の東溝と南溝の東半は昭和63年度にすでに調査が実施されていたが、今回の調査によって北溝、西溝及び南溝の西半を検出し、その規模及び形状を明らかにすることができた。

1号墓は、南北16.4m×東西20.6m（溝底間）の東西に長い長方形を成し、北西部と北東部にそれぞれ幅3m、6mの陸橋部を持つ。周溝の深さは検出時で最深0.7m、最大幅は3mであるが、上面は大きく削平されており、本来の周溝の深さ、幅、マウンド及び陸橋部の高さは不明である。

**周溝の状況** 周溝は砂質土からなる地山をU字状に掘り込んで形成されている。周溝の壁は比較的整った面を持っており、一部、マウンド側の方が壁面の傾斜がきつい部分があつたが、大部分の周溝はU字状になだらかに傾斜している。南溝が最も深く、検出面から深さ0.7m、標高21.6mまで掘りこまれているが、北溝の最も浅い部分では約5cmの深さとなっている。

この周溝の深さの差異は人為的なものではなく、遺構面全体が北東から南西側へとゆるやかに標高が低くなっているため、より標高の高かった北側が激しく削平を受け、北側周溝が浅くなっていると思われる（図14・18）。そのため、本来の地表面からの周溝の深さは、どの位置でもほぼ同じような深度であったと推測される。

22.5m



## 飛鳥時代以降の埋土

- 1号墓マウンド流出土  
 1: Hue10YR4/2(灰黄褐色) 極細粒砂 しまりやや弱 径2mm程度の角礫・須恵器を多く含む  
 2: Hue10YR4/3(にぶい黄褐色) 細粒砂 しまり強 径2mm程度の角礫を1%程度含む  
 3: Hue10YR2/3(黒褐色) シルト しまり強 径50mm程度の角礫・弥生上器を含む 径5mm程度の角礫を1%程度含む  
 4: Hue10YR2/3(黒褐色) シルト しまり強 径50mm程度の角礫・弥生上器を含む 径5mm程度の角礫を10%程度含む  
 4': 4層と同質だが、角礫・弥生土器含まない  
 5: Hue10YR3/2(黒褐色) 中粒砂 しまりやや弱 径3mm程度の角礫・黄色粒をわずかに含む  
 流出土  
 6: Hue10YR4/2(灰黄褐色) 極細粒砂 しまりやや強 灰褐色の粗砂をマーブル状に含む  
 7: Hue10YR4/2(灰黄褐色) 極細粒砂 しまり強 径2mm程度の角礫を1%程度含む  
 8: Hue7.5YR3/3(暗褐色) 極細粒砂～シルト しまり強 黏性あり  
 1号墓マウンド流出土  
 9: Hue7.5YR4/6(褐) 中粒砂 しまり弱 灰褐色の粗砂をマーブル状に含む  
 流出土  
 10: Hue10YR3/3(暗褐色) 粗粒砂 しまり弱 灰褐色の粗砂をマーブル状に含む  
 11: Hue7.5YR5/6(明褐色) 粗粒砂 土壌化  
 地山  
 12: Hue10YR6/6(明褐色) 中粒砂～シルト しまり強 上層は砂質、下層はシルト

図 23 1号墓南溝土層断面図 1

周溝は等高線に平行・直交して掘削されており（図 14）、周溝掘削当時に周囲の微地形が意識されていた可能性が高い。また、東西南北全ての周溝はその中央部が最も深く、隅部に向かうにつれ浅くなり、隅部では周溝が無くなるか、検出できた深さが5cm程度になっていく。

**埋土の堆積** 周溝埋土最下層には層厚約10cmの明褐色土層が堆積していたが、この土層には礫及び遺物は全く含まれていない（図23—第10・11層）。

その上層には褐～暗褐色系の土層が堆積し、いくつかの土層に分層できた。分層できた褐色系の土層の内、マウンド側に堆積しているもの（図23—第2～5、9層）には径5cm以下の礫や径3mm程度の黄色粒が多く含まれる傾向があった。この傾向は東西南北どの位置の周溝埋土でも観察できたことから、径数cmの礫や径3mm程度の黄色粒が含まれる土層は本来マウンドを形成していた土層である可能性が高く、マウンドの流出土が周溝内に堆積しているものと判断した。また、マウンドとは反対側に堆積した土層（図23—第6～8、10、11層）には、ラミナのみられる灰色の粗砂が含まれており、流水による流入土であると推測できた。

さらに、マウンドの流出土と考えられる土層の内、周溝斜面に堆積した土層（図23—第9層）には遺物や石材が含まれておらず、風雨によってマウンドが徐々に流出したことによ

る堆積と思われる。一方、上層（図 23 第 3・4 層）には多くの弥生土器及び径 2～50cm 程度の石材が多く含まれており、マウンドの流出土（図 23 第 9 層）がある程度堆積した後、マウンドが大規模に崩壊し、マウンド上にあった石材や土器が周溝に落ち込んだものと判断される。

**貼石の状況** マウンド流出土の最上層で検出された石材は、東西南北全ての周溝で確認できた。石材は径 50cm を超えるような比較的大型のものもあるが、径 20cm 以下の小型の石材が主体となるようである。大部分は円磨度の低い角礫で、周辺の山地で多く見られるものである。ただし、本遺跡の地山は砂質土からなり、このような大型の石材は含まれていないことから、周辺の山地より人為的に持ち込まれたものと考えられる。石材は周溝壁際では検出されず、周溝の中央に列状に検出された。いずれも遺構外からの自然堆積層と思われる土層（図 23 第 7～11、13、14 層）より上位で検出され、周溝がある程度埋没してから、マウンドの流出とともに石材が転落し、堆積したと考えられる。

これらの石材はマウンドの流出土とともに周溝内に落ち込んでいることから、本来的にはマウンド上に存在したものと判断される。検出された石材の中には互いに組み合ったような状況を呈するものがあり（図 25・27、北溝西端部）、全体の傾向としてマウンド側から滑り落ちたような状況を示していた。

のことから、これらの石材は 1 号墓のマウンド斜面に設置されていたもの、いわゆる「貼石」が転落したものであると判断した。同時に、周溝内では原位置を保った石材は検出できなかったことから、貼石はマウンド斜面の上部にのみ施されたものと判断できるだろう。

ちなみに、東溝については昭和 63 年度調査時に石材を撤去し、埋土を完掘したため、石材の検出図は統合したものである。

**土器の状況** 土器はこの転落した貼石が含まれる土層と同じ土層から検出され、その多くは石材の下から検出された。小片が多く、完形のものや原位置を保っていると考えられるものはほぼ存在せず、いずれも二次堆積によるものと考えられた。周溝の埋土の最下層から土器が出土していないことからも、周溝から出土した弥生土器は当初から周溝に投棄されたものではなく、本来、マウンド上に存在したものがマウンド及び貼石の流出とともに周溝内に落ち

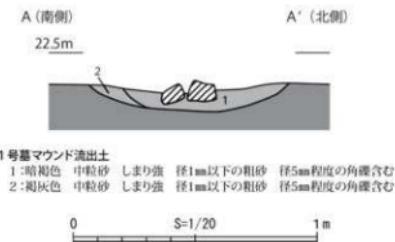


図 24 1 号墓南溝土層断面図 2



図 25 石材の検出状況（1 号墓北溝西端・北から）

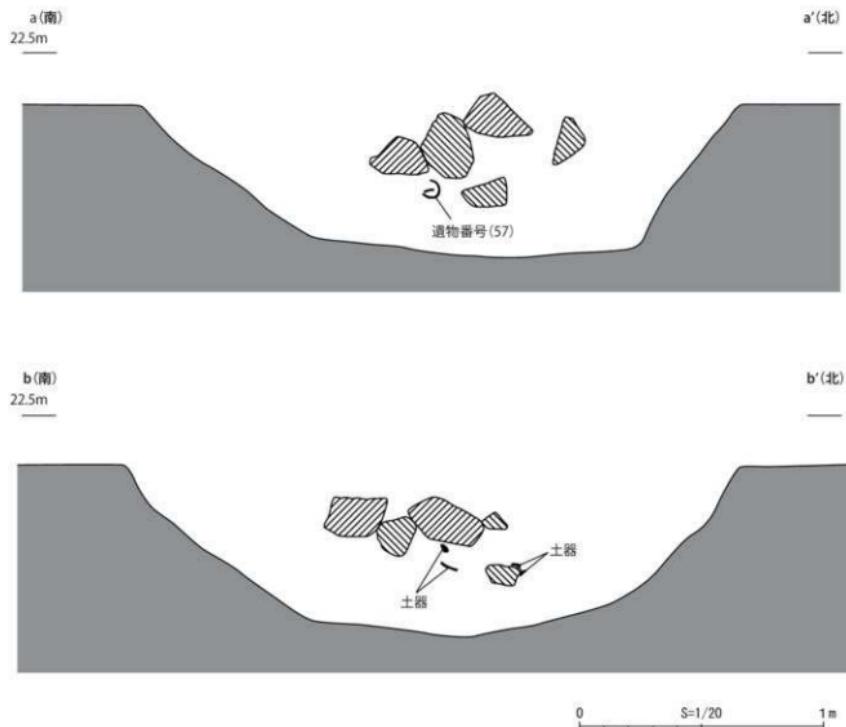


図 26 1号墓南溝石材断面図

こんだものと判断できる。

**陸橋部** 前述した周溝は、東西南北全てで認められたが、全周せず、北西部及び北東部の2箇所で途切れている。当初、大規模な削平により周溝が消滅したものとも考えられたが、周囲の周溝の深さが検出面から約25~30cmと比較的深いことから、当初から意図的に周溝が掘り残された、いわゆる陸橋部になるものと判断した。

1号墓北西部で検出した北西陸橋部は、検出面で幅3mを測り、隅部から約1.8m南側に存在する。北東部で検出した北東陸橋部は、検出面での幅は約6mを測る。削平が激しく、本来の形状を保っていないが、南側に隣接する東溝北端が突然途切れていることから、陸橋部と認定した。陸橋部北側の1号墓北溝の深さが約10~15cmとかなり浅く、北東隅の周溝は削平されているものと考えられることから、本来はもっと小規模なものであったと思われる。また、北西陸橋部と同様、隅部に取りつくものではなく、隅部からやや南側に取りつ

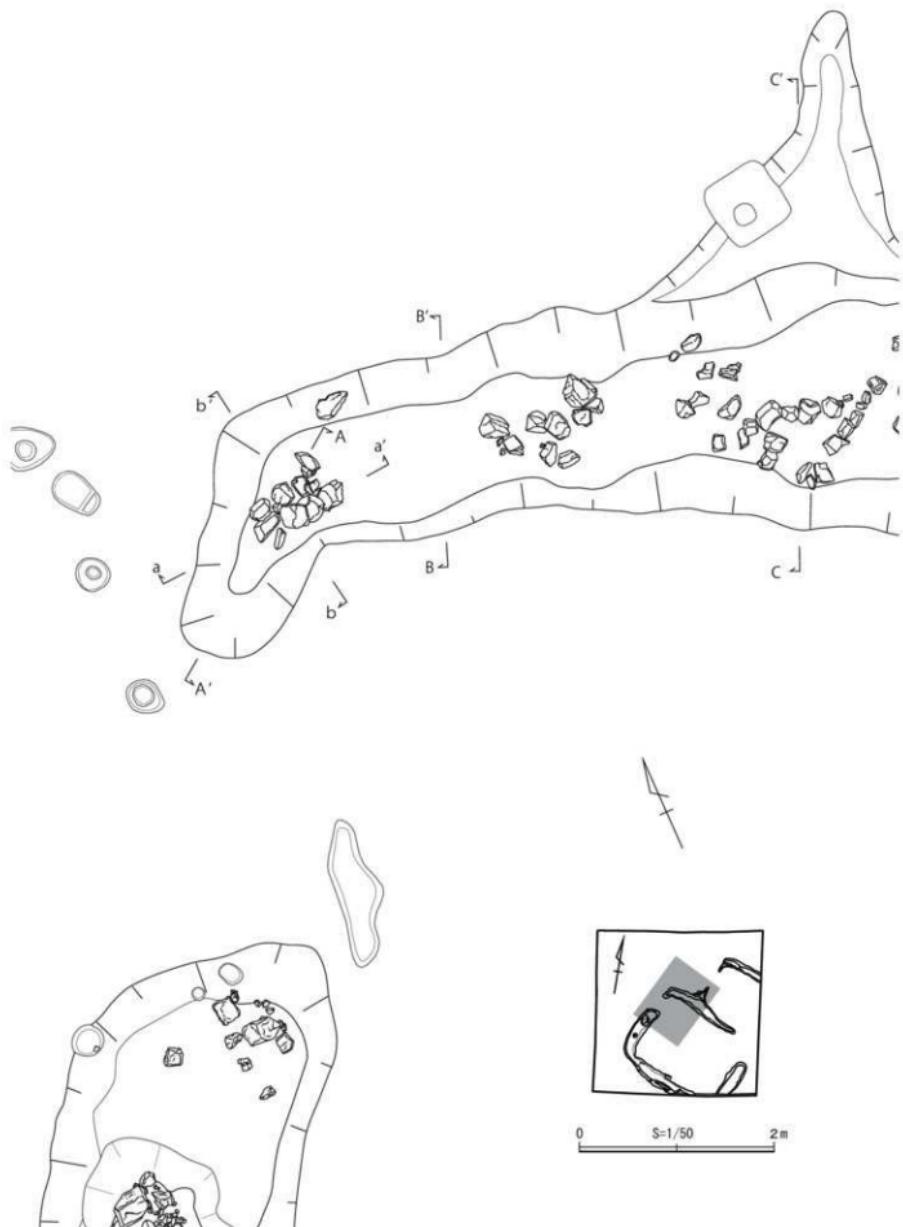


图 27 1号墓北沟平面图 1

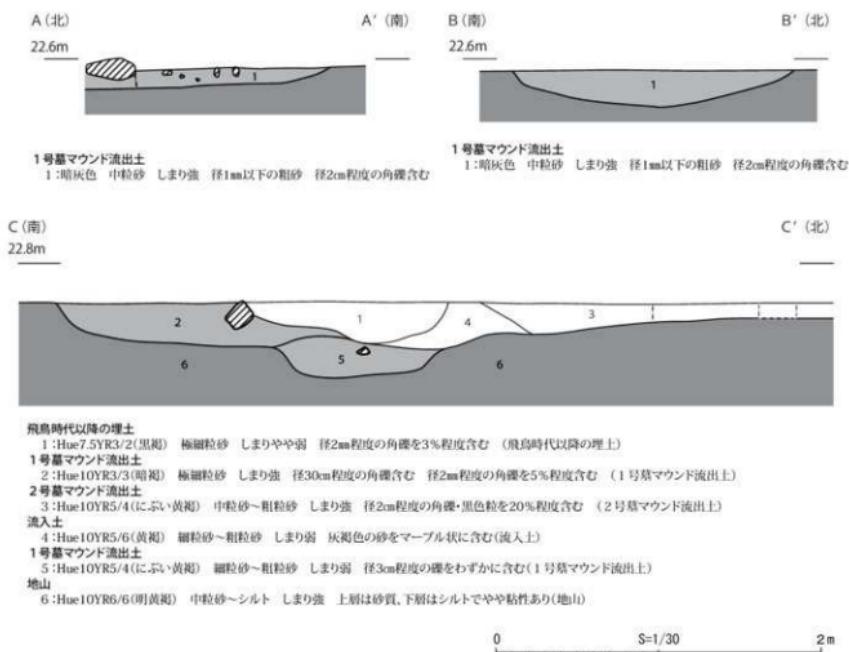


図 28 1号墓北溝土層断面図 1

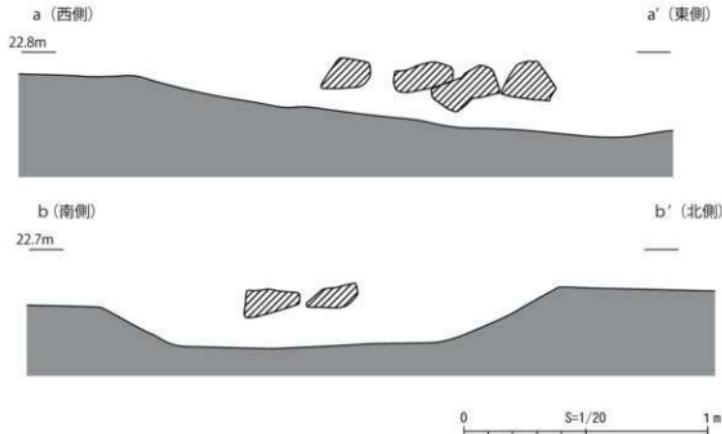


図 29 1号墓北溝石材断面図 1

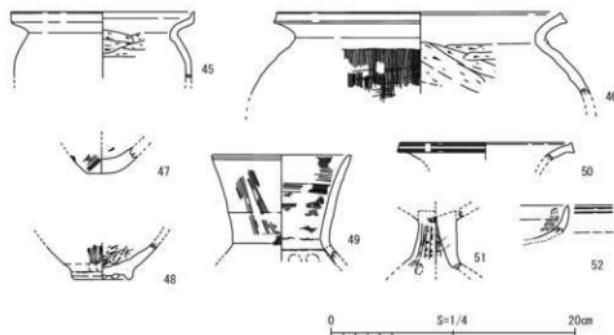


図 30 1号墓東溝（昭和 63 年度調査埋戻土）出土遺物

くものであった可能性もある。

**主体部** 1号墓は完全に削平されており、精査を慎重に行ったが、マウンドや主体部について全く検出できなかった。

**廃絶後の様相** 周溝にはマウンド流失土と考えられる土層が堆積し、その上層には黒褐色系の土層（図 23 第 1 層）が堆積していた。この土層は周溝の最上層となり、飛鳥時代の遺物を多く含むことから、周溝が完全に埋没したのは飛鳥時代以降と考えられる。

**出土遺物** 1号墓からは南溝を中心として弥生土器が多く出土したが、そのほとんどが小片である。

45～52 は東溝から出土した遺物。昭和 63 年度調査時の埋戻土から出土したもので、本来の出土位置を保っているとは考えにくく、南溝東半から出土した遺物も混入しているものと思われる。

45 は弥生土器・甕もしくは鉢の口縁部。口縁端部にはわずかに立ち上がりがみられ、内面は頸部付近まで横方向のケズリが及ぶ。外面に黒斑があり、胎土は黄褐色系。この甕の口縁部の形状は、当地域ではあまりみられないものである。形状からみれば吉備地域の甕に類似しており、吉備型甕の模倣土器の可能性もある。

46 は弥生土器・甕の口縁部。口縁端部は面を持つ。内面は頸部付近まで横方向のケズリ、外面は右上がりのタタキ後に縱方向のハケを施し、タタキを消している。胎土は茶褐色系。

47 は弥生土器・甕の底部。底面は不明瞭。内面は縱方向のケズリ。胎土は黄褐色系である。

48 は弥生土器・甕の底部。内面は不定方向のケズリ、外面は縱方向のハケ後に縱方向のミガキを施す。底部はユビオサエによって上げ底に成形されている。胎土は茶褐色系。

49 は弥生土器・長頸壺の頸部から口縁部。細頸壺といったほうがよいかもしれない。ラッパ状に広がる口縁部をもち、外面は縱方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。口縁端部外面には 1 条の沈線が巡る。頸部の内面には粘土接合痕が観察できる。胎土は黄褐色系。

50 は弥生土器・広口壺の口縁部。端面は強いナデによってわずかに拡張されている。内面に黒斑があり、胎土は黄褐色系。

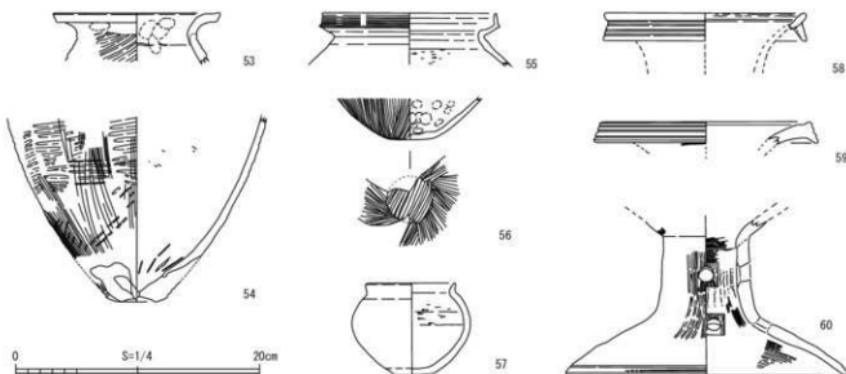


図31 1号墓南溝出土遺物

51は弥生土器・高杯の脚柱部。外面は縦方向のミガキ、内面にはシボリ痕が確認できる。脚柱部の中央には径2mm程度の穴が貫通している。また、剥離面の観察から脚柱部の成形後に粘土を付加し、杯部を成形していることがわかる。外面に黒斑があり、胎土は黄褐色系。

52は弥生土器・高杯の口縁部。小片だが、端部外面に2条の沈線を巡らせる。内面は縦方向のミガキか。外面に黒斑があり、胎土は黄褐色系。

53～60は南溝から出土した遺物。

53は弥生土器・甕の口縁部。外面は右上がりのタタキ、内面はナデ。口縁部付近まで叩き出したのち、粘土紐を付加して口縁部を成形している。口縁端部は摘み上げるように上方へ拡張し、端面を作っている。胎土は黄褐色系。

54は弥生土器・甕の底部から胴部。色調や調整の雰囲気が53と酷似しており、同一個体の可能性もある。胴部外面は下半が右上がりのタタキ、上半が水平のタタキが観察でき、典型的な分割成形技法を用いている。このタタキの後、細かな縦方向のハケでタタキを部分的に消している。内面には一部縦方向のケズリが観察される。底部形状はやや上げ底。外面に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。底部付近には穿孔状の器壁の剥離がみられ、人为的な穿孔の可能性がある。胎土分析結果は在地産である（第5章参照）。

55・56は弥生土器・甕。接合しないが同一個体と思われる破片である。底部は明瞭ではなく、ほとんど丸底化している。口縁端部には上方への拡張がみられ、拡張面には7, 8条からなる多条沈線が擬四線状に施文される。外面は縦方向の細いミガキ。ミガキは入念に施され、底部外面まで及んでいる。内面は不定方向のケズリで、器壁は数mmまで薄くなっている。底部内面にはユビオサエの痕跡が多くみられる。外面にはスス・コゲ状の炭化物が付着し、胎土は茶褐色系。これらの特徴から、典型的な吉備型甕であると判断できる。胎土分析結果は吉備産である（第5章参照）。

57は弥生土器・壺。底部はほぼ痕跡化し、丸底に近い。小型で無頸壺に近い形状だが、口縁部にわずかな立ち上がりがみられる。内面は横方向のケズリ。外面に黒斑があり、胎土

は黄褐色系。

58は弥生土器だが、器台もしくは壺の口縁部となると思われる破片。立ち上げた口縁部外面に、垂下口縁状に粘土を付加し、口縁部に広い面を成形している。その部分には4本の沈線が擬凹線状に巡る。また、口縁部立ち上がり部分の内面にも3、4本の沈線が巡っている。胎土は黄褐色系。

59は弥生土器・広口壺もしくは器台の口縁部。端面は大きく拡張し、擬凹線状に3本の沈線が巡る。外面は横方向のナデ。胎土は黄褐色系。

60は弥生土器・器台の脚部から受部。高杯となる可能性も考えられるが、胴部径が大きいことや、2段透穴などの特徴から器台と判断している。脚端部には1条の沈線を巡らせる。脚柱部には2段の透穴が穿孔され、方向数はそれぞれ3方向となると思われる。脚部内面は横方向のハケ、胴部内面にはシボリ痕と横方向のハケと粘土接合痕が観察できる。脚部外面に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。

61～63は、1号墓西溝から出土した遺物。

61は弥生土器・甕の底部。比較的明瞭な底部を持ち、内面は横方向のケズリがみられる。外面に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。

62は弥生土器・壺の底部。底部は痕跡化し、自立しない。底部内面にはシボリ痕がみられる。胎土は茶褐色系。

63は弥生土器・甕の底部。比較的明瞭な底部を持ち、外面にはわずかに右上がりのタタキが観察できる。内面は縱方向のケズリ。胎土は黄褐色系。

64～75は、1号墓北構から出土した遺物。土層ごとに遺物を取り上げることができなかつたため、後述する2号方形周溝甕に属する遺物との識別ができていない。

64は弥生土器・甕の底部。典型的な畿内第V様式系の甕で、螺旋タタキによって成形されている。黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。

65は弥生土器・甕の底部から胴部で、66と特徴が類似している。底部はほぼ痕跡化し、自立しない。内面はユビオサエと縱方向のケズリ。胎土は黄褐色系。

66は弥生土器・甕の底部から胴部。65と同様に底部はほぼ痕跡化し、自立しない。内面はユビオサエと縱方向のケズリ。胎土は黄褐色系。

67は弥生土器・甕の底部から胴部。底部はほぼ痕跡化しており、自立しない。外面は縱方向のハケ、内面はユビオサエ。全面に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。

65から67までの甕は、底部形状のみでいえば、吉備型甕に類似しているが器壁が厚く、胎土も在地のものである可能性が高い。吉備型甕の模倣土器の可能性がある。

68は弥生土器・広口壺の口縁部。口縁端部には面を持つ。内外面とも横方向のナデ調整。胎土は黄褐色系。

69は弥生土器・壺の口縁部か。外面下半には粗い縱方向のハケ、他は横方向のナデ。内面に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。

70・71は弥生土器・高杯の脚部及び脚柱部。接合しないが、同一個体と思われる。脚部には透穴が穿孔されているが、穿孔数は不明。脚部外面端部付近と中位に沈線が1本ずつ巡る。脚柱部上端には剥離痕が明瞭に観察でき、脚柱部の上端に粘土を付加することで杯部を

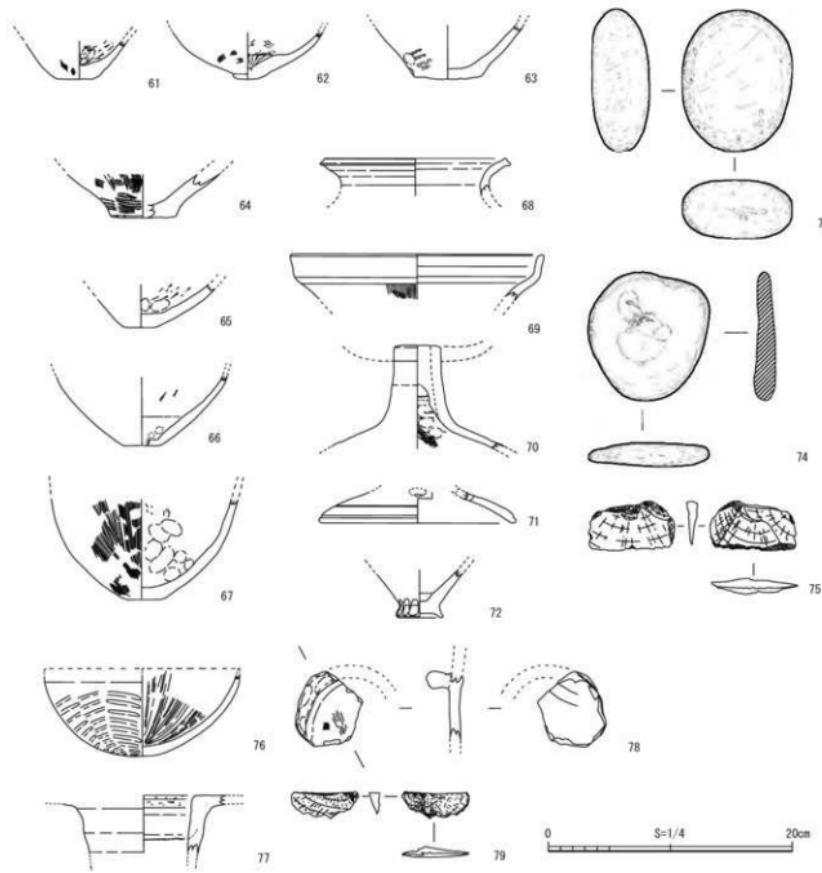


図32 1号墓西溝・北溝出土遺物

成形している。胎土は黄褐色系。

72は弥生土器・鉢の脚部。底部はユビオサエによって上げ底状に成形されている。磨滅が激しい。胎土は黄褐色系。

73は弥生時代以前のものと思われる叩石もしくは磨石。1号方形周溝墓の北溝底面付近で、貼石の転落した石材に混じって出土した。側面に敲打痕跡や擦痕のようなものが観察できる。重量は741g。

74は弥生時代以前のものと思われる石器。中央に窪みがあり、台石状のものになる可能性がある。73同様、1号方形周溝墓の北溝から転落した石材とともに出土した。重量は268g。

75は弥生時代以前のものと思われる削器。サヌカイト製で、表面はやや風化しているが、刃部には押圧剥離の痕跡が明瞭に観察できる。重量は27.8g。

76～79は機械掘削等で出土した遺物。

76は弥生土器・鉢。外面は螺旋タキ、内面には細かな縱方向のミガキを施す。口縁部付近に黒斑がみられ、胎土は黄褐色系。

77は弥生土器・器台の胴部から受部かと思われる個体。直立する胴部から水平に受部が伸びる。全面横方向のナデ。胎土は黄褐色系。類例がなく、弥生土器ではない可能性もある。

78は把手部。把手は逆U字状のものとなると思われる。外面ハケ。土師器の可能性もあるが、判断しかねる。

79は弥生時代以前のものと思われる石器・剝片。サヌカイト製で表面はわずかに風化している。層状の節理が観察できる。重量は7.4 g。

以上の遺物は、一部を除きすべて庄内式併行期に属する。詳細な時期とその根拠は第6章にて詳述したい。

### (3) 2号方形周溝墓

**内容と規模** 今回の調査は、1号墓の範囲確認を目的として実施したが、遺構検出を行った段階で1号墓北溝にとりつくように北側へ伸びる周溝が検出され、もう1基の方形周溝墓が存在することが明らかになった。このことにより、方形周溝墓が群を形成していることが判明した。

2号方形周溝墓（以下、2号墓）は、その南溝を1号方形周溝墓と共有している。検出できたのは西溝及び北溝だが、北溝の東端と東溝は調査区外のため検出できていない。そのため東西規模は不明であるが、昭和63年度の調査区内で周溝の南東隅が検出されていないことから、14 m以下であると判断

できる。南北規模は11.2 m（溝底間）

で、1号墓よりやや小型である。西側周溝には周溝が途切れる部分があるが、2号墓の西溝は周溝全体の深さが浅く、削平されたため検出できていない可能性が高く、積極的に陸橋部とは評価できない。

1号墓同様、上面は大きく削平されており、本来の周溝深さ、幅、マウンド及び陸橋部の高さは不明である。マウンド、主体部についても完全に削平されており、検出することはできなかった。

**周溝の状況** 2号墓は1号墓よりも標高の高い北東側に存在するため、

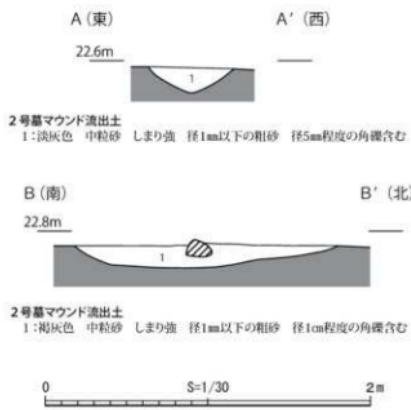


図33 2号墓周溝土層断面図

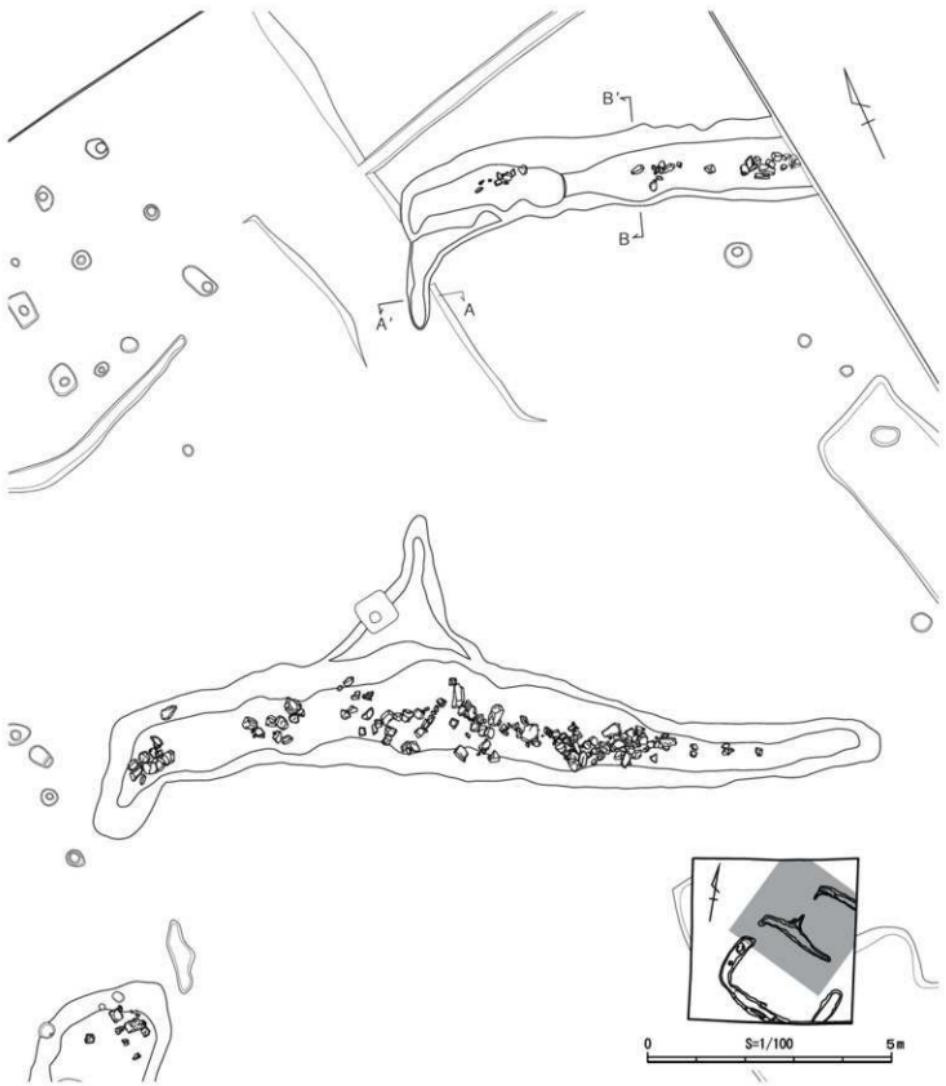


图 34 2号墓平面图

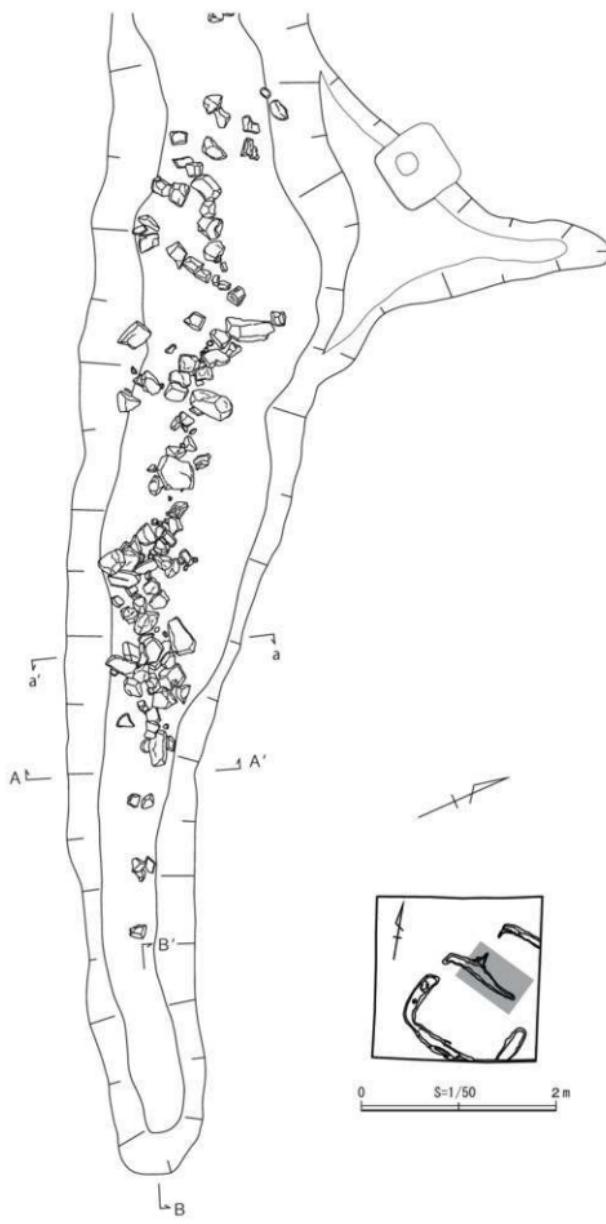


图 35 1号墓北溝平面图2

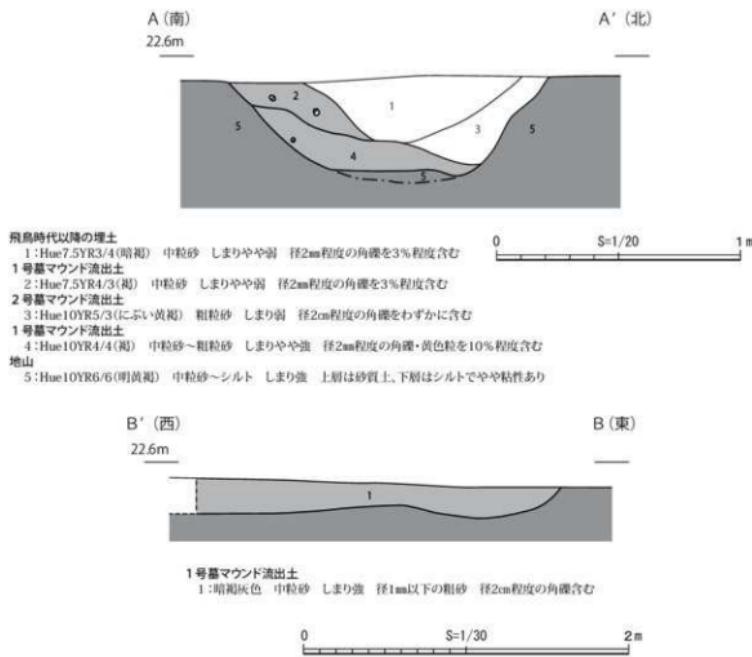


図 36 1号墓北溝土層断面図 2

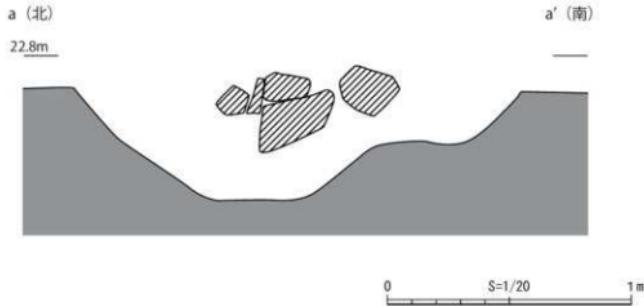


図 37 1号墓北溝石材断面図 2

削平を激しく受けている。検出できた周溝は、最深 15cm、幅 1.5 m で、1 号墓と比較すると残存状況は悪い。

周溝の埋土は一層で、石材（角礫）や弥生土器をわずかに含む土層で埋没している。この土層は石材や遺物を含むことから 2 号墓のマウンドを形成していたものが流出したものと考えられる。

また、2 号墓は南溝を 1 号墓の北溝と共有し、1 号墓北溝から西溝を掘り足すようにして周溝を巡らせている。周溝の深さは 1 号墓と比較すると非常に浅く、1 号墓北溝底と 2 号墓西溝底との間は約 20cm の段差となっている。

**貼石の状況** 2 号墓では北溝で石材が検出され、2 号墓にも貼石が存在したことが明らかになっている。南溝で検出された石材の一部は、土層断面の観察から 2 号墓のものであると判断され、少なくとも北側と南側の斜面には貼石が存在したことがわかる。西溝については削平が激しく、検出できた最大深は 15cm と非常に浅いため、石材も削平されたものと考えるのが妥当であろう。石材は 1 号墓同様、すべて角礫であったが、小形の石材が主体である。

**土器の出土状況** 2 号墓周溝からはわずかに土器が出土したが、いずれも小片であり、原位置を保ったものは存在しなかった。

**1 号墓との先後関係** 前述のように、2 号墓は 1 号墓と周溝の一辺を共有しており、その周溝の堆積状況から 1・2 号墓の先後関係を明らかにすることができた。

1 号墓北溝の最下層には白色粒や黄色粒が含まれる 1 号墓マウンド流出土特有の土層（図 36-4 層）が堆積している。その土層の上層は、1 号墓側では石材や弥生土器を含む土層（図 36-2 層）が堆積し、2 号墓側には礫をわずかに含む土層（図 36-3 層）が堆積している。この土層は 2 号墓のマウンドの流出土と考えられ、1 号墓のマウンドが流出した後に 2 号墓のマウンドが流出していることから、2 号墓は 1 号墓の築造後に築かれた可能性が高いものと判断できた。

**廃絶後の様相** 2 号墓周溝では飛鳥時代以降の埋土が確認できなかった。そのため、廃絶後の様相は不明で、1 号墓周溝のように、古代まで周溝が残存していたかどうかは不明である。

**出土遺物** 2 号墓からは弥生土器がわずかに出土したが、そのほとんどが小片であり、遺物からは時期を決定することは難しい。

## 4 飛鳥時代以降の遺構・遺物

### （1）土坑 2

土坑 2 は調査区の西側で検出された、径 6.0m × 3.8 m の不整円形の土坑である。上面は削平が激しいものと考えられ、検出できた深さはわずか 15cm であったが、多くの遺物が出土した。埋土は 2 層に分かれる。

図 39 は土坑 2 から出土した遺物である。

80 は飛鳥時代の須恵器・杯口蓋。天井部外面はヘラ切り無調整で、他は全面回転ナデ。

口縁端部は屈曲し、わずかに肥厚している。焼け歪みがみられ、外面には自然釉が付着する。

81は須恵器・杯H蓋。天井部ケズリ調整。他は全面回転ナデ。

82は須恵器・杯G身。底面はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。

83は飛鳥時代の須恵器・高杯。比較的高い脚部を持ち、杯部中位に1条の沈線が巡る。  
全面回転ナデ。

84は土師器・壺の口縁部。全面横方向のナデ調整か。

85は土師器・長胴壺の底部から胴部。外面は粗いナデやユビオサエ、内面は横方向のナデ。  
外面には黒斑がみられ、下半にはコゲやススと思われる炭化物が付着している。

86は土師器・鉢の口縁部。外面は細かな縱方向のハケ。内面は横方向のナデ。外面に炭

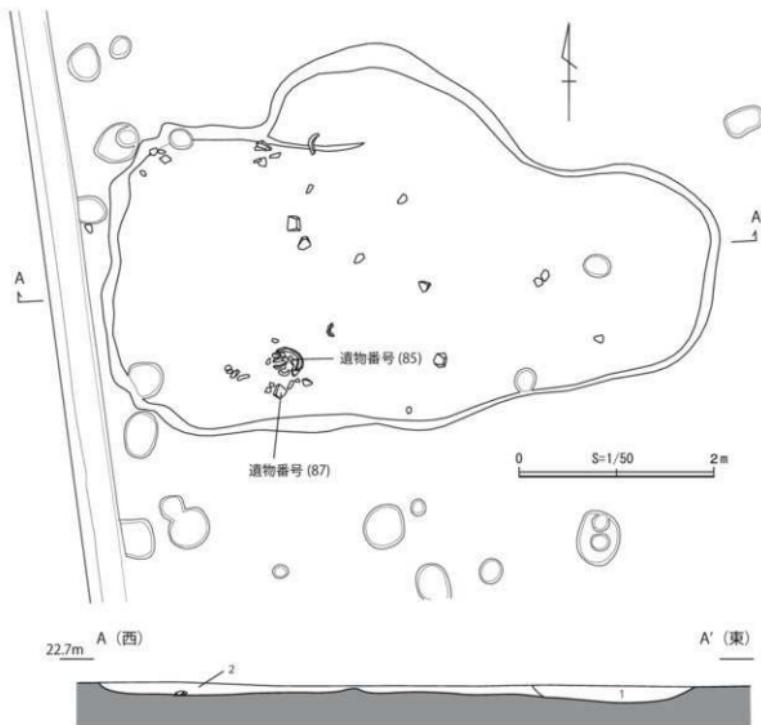


図38 土坑2 平面図・土層断面図

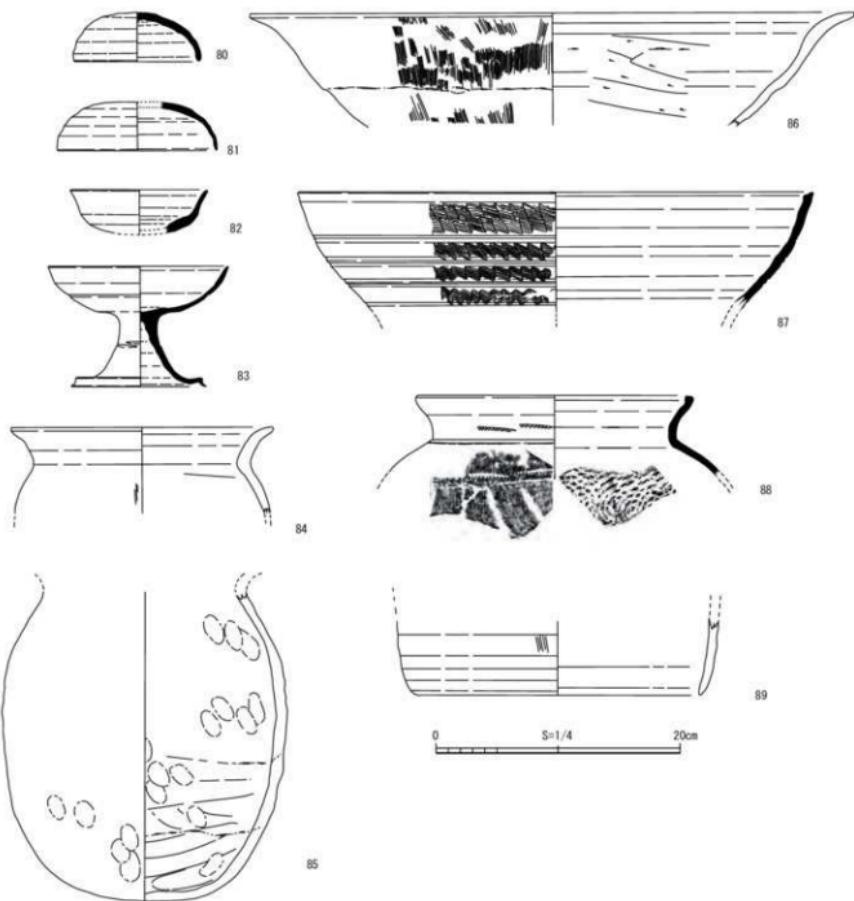


図39 土坑2 出土遺物

化物状の黒い付着物がみられる。

87は須恵器・甕もしくは鉢の口縁部。全面回転ナデ。外面には7条の沈線が4段に分かれて巡り、その間を充填するように波状文が施文されている。波状文は7本が一単位となっている。最上段だけは波状文が2段分施文されている。あまり類例の無い形状ではあるが、赤穂市内では有年原・田中遺跡で類例がある。

88は須恵器・甕の肩部から口縁部。口縁は内側に肥厚し、端面を持つ。口縁部は内外面全面回転ナデ。肩部外面は格子タタキ、内面は同心円文当て具痕。

89は土師器・壺の底部と思われる個体。内面は横方向のナデ、外面は縦方向のハケ。内外面に黒斑がみられる。

以上の出土遺物は飛鳥I～III期に併行するものと思われる。

#### (2) 土坑3

土坑3は調査区の西側で検出された、径2m×1mの不整円形の土坑である。土坑2同様上面の削平が激しく、検出できた深さはわずか15cmであったが、多くの遺物が出土した。埋土は1層。

図41は土坑3から出土した遺物。

90は土師器・把手。把手は板状を呈し、全面ユビオサエによって粗く成形されている。一部、粘土接合痕も確認できる。

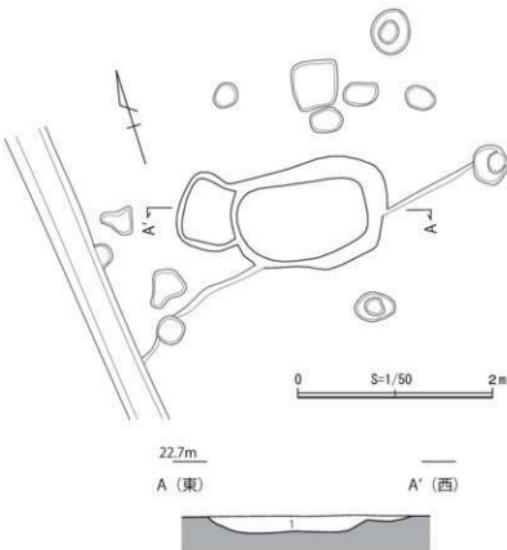
91は土師器・把手部。把手は角状を呈す。外面縦方向のハケ、内面は横方向のハケ。

92は須恵器・杯G身か。底部外面はへら切り無調整。他は全面回転ナデ。口縁端部はわずかに屈曲、肥厚する。焼け歪みが激しく、口縁部は楕円形を呈す。

93は須恵器・杯B身。小型のもので、高台は外寄りに付けられている。内面見込部と外面に自然釉が付着している。

94は須恵器・壺の底部付近。高台部分が剥離している。高台部分の接着面には数本の沈線が円形に刻まれており、高台接着のための痕跡と思われる。全面回転ナデだが、内面には不定方向のナデも観察できる。

以上の遺物は飛鳥III～Vに併行するものと判断される。



土坑3埋土  
1:培灰 中粒砂 しまり強 粒1mm以下の粗砂、粒5mm以下の礫を含む

図40 土坑3 平面図・土層断面図

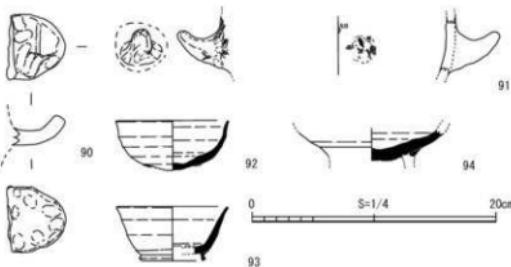


図41 土坑3 出土遺物

### (3) 方形周溝墓周溝上層から出土した遺物

前述のように、弥生時代終末期の方形周溝墓の周溝最上層には飛鳥時代から奈良時代前半の須恵器を含む黒褐色土が検出され、溝状遺構として確認された。埋土からは大量の須恵器・土師器が出土し、特に南西部から多くの遺物が出土している。

図42、43が方形周溝墓最上層から出土した遺物である。一部、混入と思われる中世から近世の遺物も含んでいる。

95は須恵器・杯H蓋。全面回転ナデ。外面に自然釉が付着している。わずかだが焼け歪みがみられる。

96は須恵器・杯H蓋。全面回転ナデ。

97～99は杯H身の口縁部。全面回転ナデ。

100は須恵器・杯H身。底面はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。

101は杯G蓋か。全面回転ナデ。

102は須恵器・杯G身。底面はヘラ切り無調整。他は回転ナデ。ヘラ切りの観察から、口クロの回転は左回転。

103は須恵器・杯G身か。底面はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。底部に焼け膨れがみられる。

104は須恵器・杯G蓋か。天井部ヘラ切り無調整、他は回転ナデ。全体に大きく焼け歪んでおり、本来の形状は不明である。

105は須恵器・杯B蓋のつまみ部。つまみは扁平なボタン状を呈す。全面回転ナデ。外面には自然釉が付着している。

106・107は須恵器・杯B蓋。全面回転ナデ。

108は須恵器・高杯。比較的高い脚部を持つ。脚部内面にシボリ痕がみられる。全面回転ナデ。

109は須恵器・高杯の脚端部。全面回転ナデ。

110は須恵器・長頸壺の肩部。肩部に1条の沈線を巡らせ、その下方に櫛描列点文を施文している。全面回転ナデ。

111は須恵器・長頸壺の肩部。全面回転ナデ。2条の沈線が巡り、その間を充填するよう列点文が2段、施文されている。

112は須恵器・平瓶の口縁部。全面回転ナデ。外面にわずかに自然釉が付着している。

113は須恵器・はそうの底部から頸部。体部中位に1条の沈線を巡らせる。孔は斜め上方から穿孔されている。全面回転ナデ。

114は須恵器・甕の肩部から口縁部。口縁部は直立するタイプのもので、口縁部は全面回転ナデ。肩部外面は平行タタキ目、内面は同心円当て具痕。内外面全面に自然釉が付着している。

115は須恵器・甕の頸部から口縁部。頸部内面は同心円当て具痕。口縁端部は肥厚し、丸みを帯びる。口縁部は全面回転ナデ。

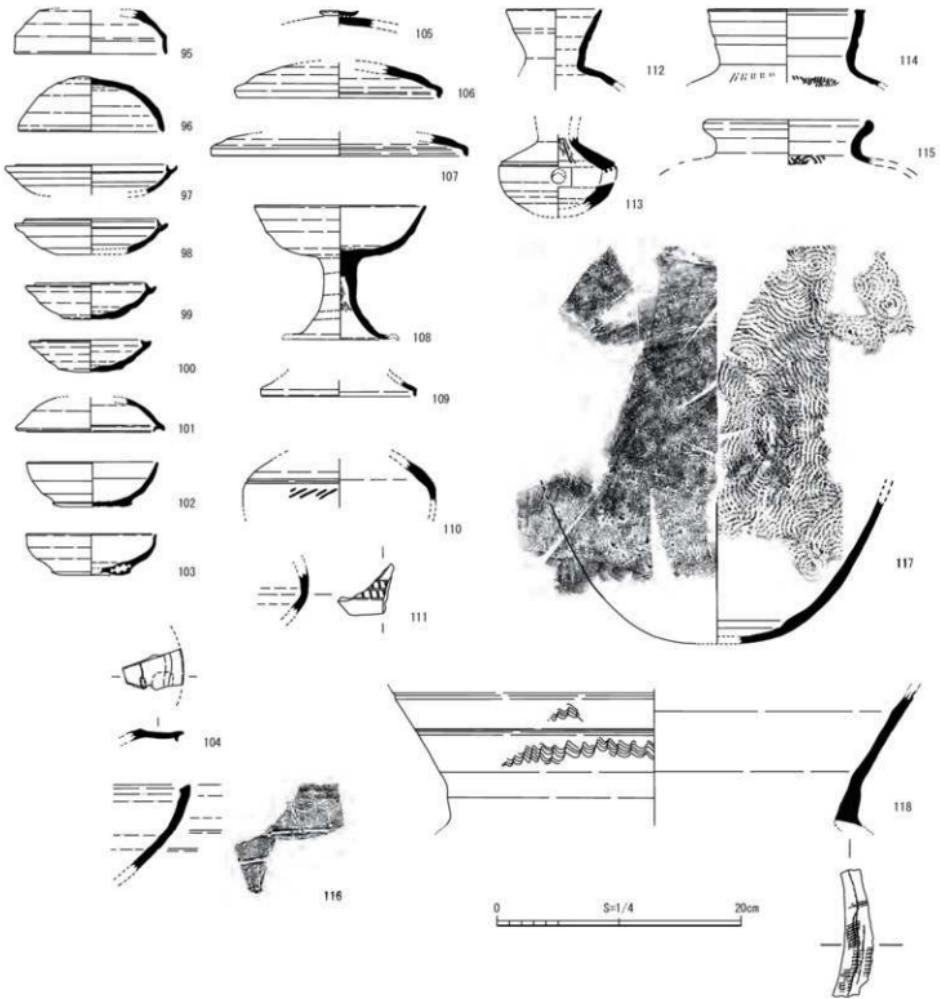


図42 方形周溝墓最上層 出土遺物 1

116は須恵器・甕の口縁部。口縁端部は面を持つ。全面回転ナデ。外面には3本の沈線が巡り、その間を充填するように10本1単位とする波状文が3段施文されている。87と同一個体の可能性がある。

117は須恵器・甕の底部から胴部。外面平行タタキ、内面同心円当て具痕。外面全面に自然釉が厚く付着している。

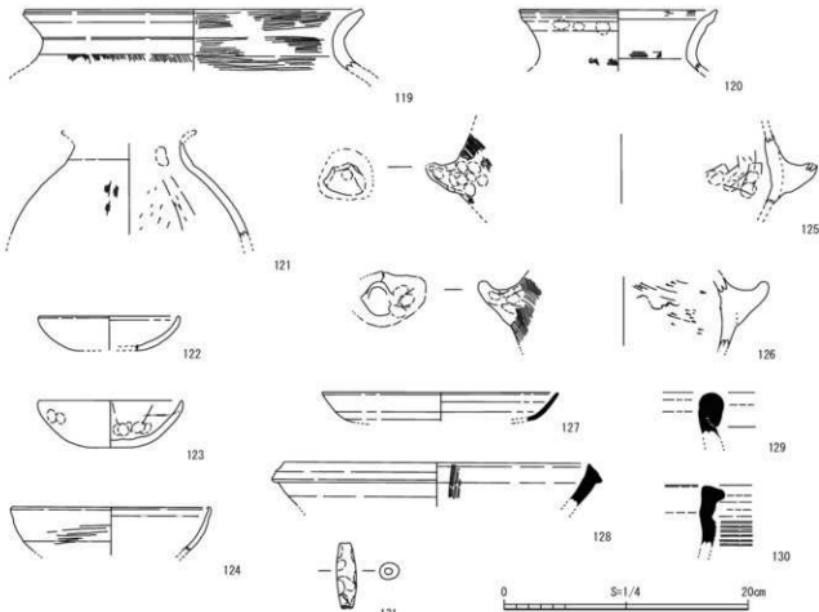


図 43 方形周溝墓最上層 出土遺物 2

118は須恵器・甕の口頸部。全面回転ナデ。外面には2条の沈線が巡り、その間を充填するように5本一単位とする波状文が2段巡る。また、肩部との接合面には肩部に施されていたと思われる平行タタキ目の圧痕が残されている。

119は土師器・甕の口縁部。口縁部端面には1条の沈線が巡る。外面には細かな縱方向のハケ、内面は横方向のナデとハケが観察できる。口縁部外面にはコゲと思われる炭化物が付着している。

120は土師器・甕の口縁部。口縁端部はわずかに屈曲、肥厚している。全面横方向のナデだが、内面の一部に横方向のハケが観察できる。

121は土師器・甕の口縁部付近。口縁端部は剥離しているものと思われる。口縁部外面は細かな縱方向のハケ。内面は横方向のケズリ。

122は土師器・杯の口縁部かと思われる個体。口縁端部はわずかに屈曲する。

123は土師器・杯。磨滅のため調整が観察できない。弥生土器の可能性もある。外面に黒斑があり、胎土は黄褐色系。

124は土師器・杯C。口縁端部がわずかに肥厚し、内面に沈線上の窪みが巡る。外面には横方向のミガキかと思われる調整が観察できる。

125は土師器の把手部。把手はやや平坦な角状を呈す。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケ。外面に黒斑がみられる。

126は土師器・把手部。把手は角状を呈す。外面は不定方向のハケ、内面は横方向のケズリ。

127は須恵器・杯類の口縁部かと思われる個体。磨滅がひどく、判断しかねる。外面に炭素の吸着がみられる。

128は須恵器・擂鉢の口縁部。全面回転ナデ。内面に4本一単位となる擂目が観察できる。

129は備前焼・甕の口縁部。口縁端部を折り返し、丸く収めている。

130は無釉陶器・甕の口縁部。全面回転ナデ。外面下半には沈線を6条巡らせる。

131は管状土錘。出土層位から、古代以降のものと考えられる。ユピオサエによって粗く成形されている。

以上の遺物は、127～131を除けば、おむね飛鳥I～平城IIに併行するものと捉えられ、大部分は飛鳥I～IIに併行するものと判断できる。

#### (4) 落ち込み

落ち込みは調査区の北西部で検出されたもので、遺物を大量に含んだ埋土をもつ。おそらく上層の掘立柱建物跡を建築する際の造成の痕跡と思われる。埋土は3層に分かれれる。

図45、46はおちこみから出土した遺物である。

132は須恵器・杯H蓋か。天井部外面はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。激しく焼け歪んでおり、本来の形状は不明。外面には焼台が付着している。

133は須恵器・杯B蓋の天井部。外面回転ケズリ、内面は回転ナデ。つまみは扁平化してはいるが宝珠つまみになっている。

134は須恵器・杯B蓋のつまみ。扁平なボタン状になっている。全面ナデ調整。一部、蓋本体の天井部が残存している。

135は須恵器・杯B蓋の口縁部。全面回転ナデ。

136・138・139は杯H身の口縁部。全面回転ナデ。

137・140は須恵器・杯H身。底面はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。

141は須恵器・杯G。底面はヘラ切り無調整。他は回転ナデ。

142・143は須恵器・杯B身。高台は内側に貼りつけられている。全面回転ナデ。

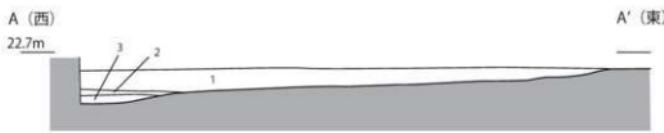
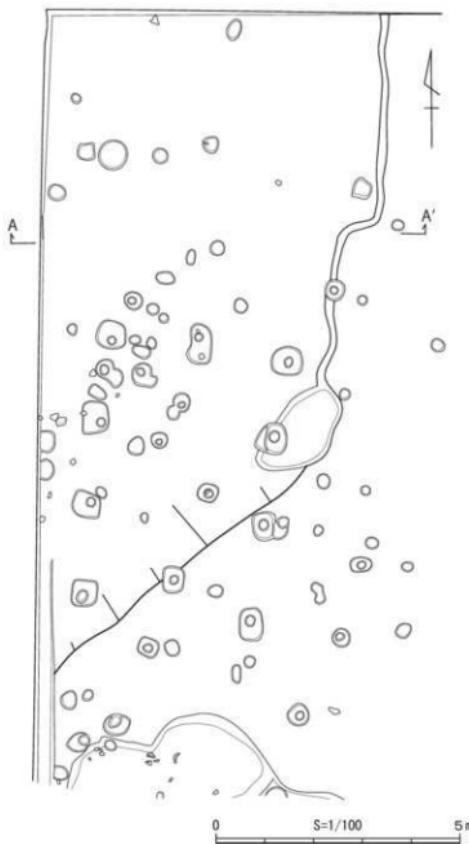
144・145は須恵器の底部。杯B身もしくは小型の壺か。高台は外側に貼りつけられている。底部外面はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。

146は杯B身の底部。高台は外側に貼りつけられているが、扁平なものである。底部外面はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。

147は須恵器・高杯の口縁部か。全面回転ナデ。

148は須恵器・高杯の脚端部。全面回転ナデ。

149は須恵器・長頸壺の肩部。全面回転ナデ。肩部の屈曲部にあたる部分には沈線が1条巡り、その上部に「×」を連続させたような線刻文様が施文されている。しかし、文様は「×」が1単位ではなく、「/」を1周施文した後に、「＼」が施文されることで「×」の連続のようにみえている。



落ち込み埋土  
 1:暗褐色 細粒砂 しまり強 須恵器・土師器を多く含む  
 2:褐 砂礫 しまり強 径3cm以下の混合む  
 3:褐灰 細粒砂 しまりふつう 砂礫を含まない

図 4.4 落ち込み 平面図・土層断面図

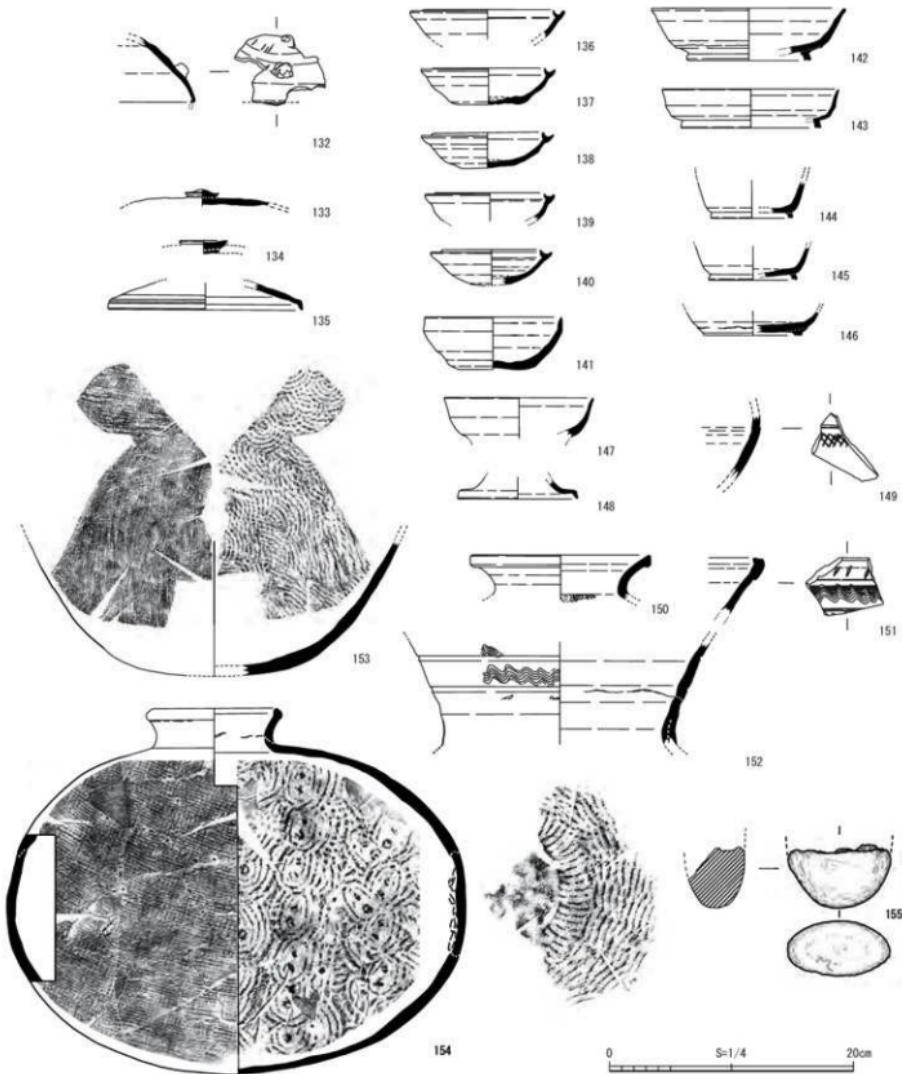


図 45 落ち込み 出土遺物 1

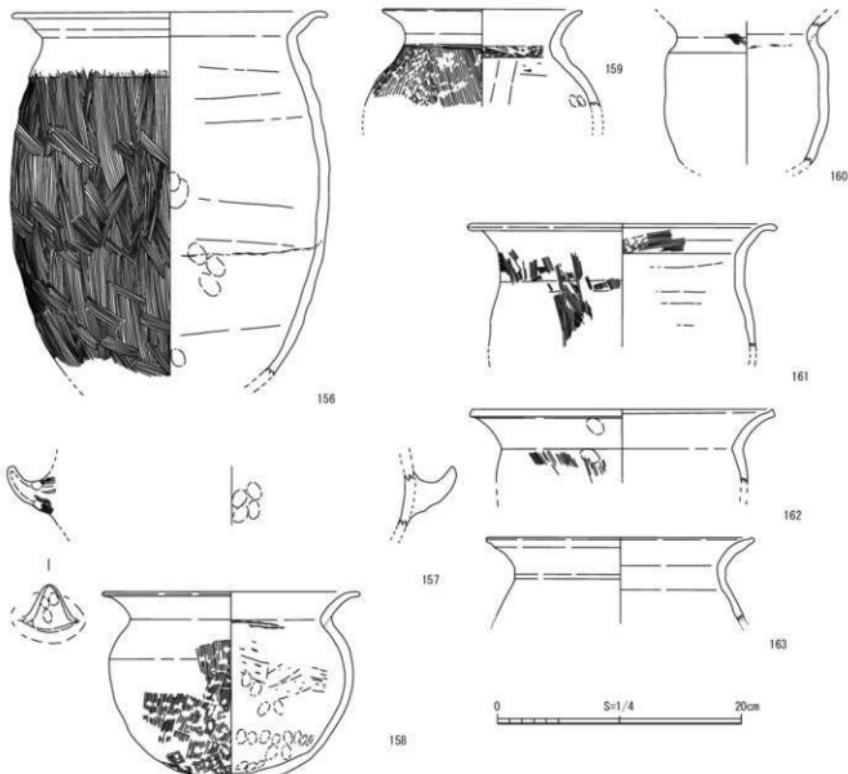


図 46 落ち込み 出土遺物 2

150 は須恵器・甕の肩部から口縁部。肩部内面には同心円当て具痕。口縁部は端部が肥厚し、内外面とも回転ナデ調整。

151 は須恵器・甕の口縁部。全面回転ナデ調整。口縁端部は肥厚し、断面が四角形になる。口縁部外面には 4 つ一単位となる列点文が施文されている。また、口縁部には沈線が 1 条巡り、その上下に 7 本一単位とする波状文が施文されている。内外面とも自然釉が付着している。152 と同一個体の可能性が高い。

152 は須恵器・甕の口縁部。全面回転ナデ。2 条の沈線が巡り、その間を充填するよう波状文が施文される。波状文は沈線の施文後に施され、6 本一単位となっている。内外面とも自然釉が付着している。151 と同一個体の可能性が高い。

153 は須恵器・甕の底部から胴部。外面は細いハケ状の調整にみえるが、おそらく細い条線の彫り込まれた叩き具の痕跡であろう。また、底部外面にはカキメ状の調整が観察でき

る。横瓶の一部となるのかもしれない。内面は同心円当て具痕。

154は須恵器・横瓶。口縁部はわずかに肥厚し、端部に面を持つ。外面格子タタキ、内面同心円当て具痕。内面の当て具痕は同心円が2つ繋がり、梢円形の同心円が1単位となっている。胴部の片側は円形の粘土板で閉塞されている。このことから、通常の甕と同様の形状に胴部成形後、粘土板で穴を閉塞後、胴部横位に穿孔、口頸部を接着するという製作技法が復元できる。

155は石器・叩石。側面に敲打痕がみられる。重量は223g。

156は土師器・長胴甕の胴部から口縁部。胴部外面は細かい縦方向のハケ、内面は横方向のナデ。外面には黒斑がみられる。

157は土師器の把手部。把手はやや扁平な角状を呈する。外面は縦方向のハケ、内面はナデ。外面に黒斑がみられる。

158は土師器・鍋。口縁部は甕と同様の形状をとる。外面縦方向のハケ、内面はナデ。外面に黒斑がみられる。

159は土師器・甕の胴部から口縁部。胴部外面は粗い縦方向のハケ、内面は横方向のケズリ。口縁部は内外面とも横方向のナデ。

160は土師器・甕の肩部から口頸部。磨滅のため、調整はほとんど確認できない。外面には黒斑がみられる。

161は土師器・甕の胴部から口縁部。形状から長胴甕になると思われる。口縁端部は強い横方向のナデによってわずかに垂れ下がる。胴部外面は細かい縦方向のハケ、内面は横方向のハケか。口縁部は外面が横方向のナデ、内面は横方向のハケを施す。外面にはススと思われる炭化物が付着している。

162は土師器・甕の胴部から口縁部。口縁端部はわずかに立ち上がり、端部に面を持つ。胴部外面は縦方向のハケ。口縁部は内外面とも横方向のナデ。

163は土師器・甕の胴部から口縁部。磨滅のため、調整はほとんど確認できない。口縁部は全面横方向のナデ。

以上の出土遺物は飛鳥II～平城Iに並行するものと判断できる。

#### (5) 据立柱建物跡1

**内容と規模** 調査区北側中央で検出した2間×2間の総柱建物である。平面形はほぼ正方形を呈し、北よりわずかに西を主軸としている。柱間はおよそ1.75m、柱痕跡はおよそ径20cm、平面規模は南北3.75m、東西3.5mとなる。

**出土遺物** P1-4より土師器の小片が出土しているが、図化不可能である。

#### (6) 据立柱建物跡2

**内容と規模** 調査区北西で検出した3間×2間の側柱建物である。平面形はわずかに南北に長い長方形を呈し、北を主軸としている。桁行柱間はおよそ1.40m、梁行柱間はおよそ2.10mであり、柱痕跡はおよそ径20cm。規模は桁行4.25m、梁行4.0mとなる。P2-4及びP2-9の南側に隣接して柱穴が検出され、本建物跡に伴うもの可能性もある。

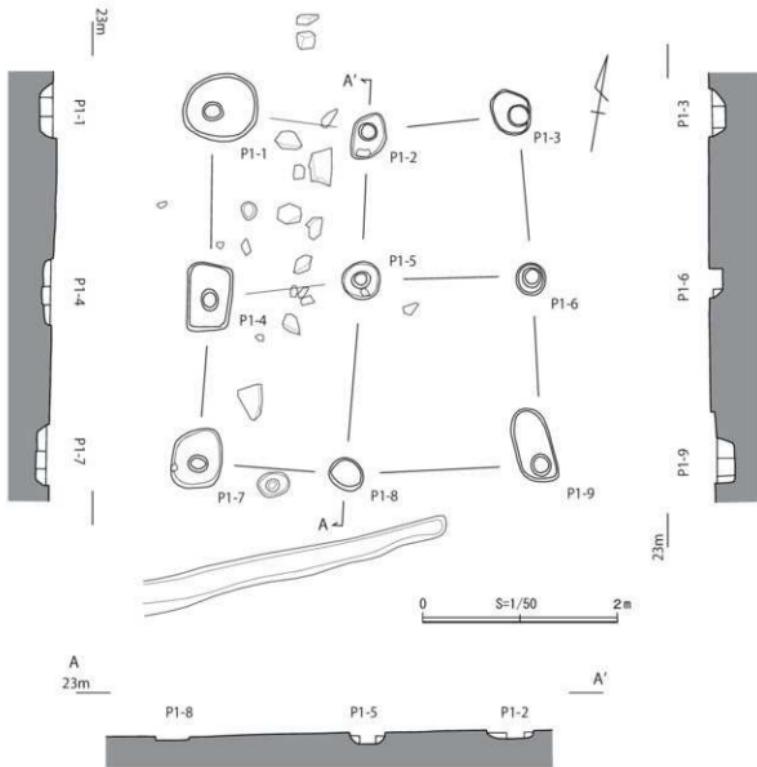


図 47 挖立柱建物跡 1 平面図・断面図

**出土遺物** P 2-4 から須恵器・杯、P 2-6 から土師器小片が出土しているが、いずれも図化不可能である。

#### (7) 挖立柱建物跡 3

**内容と規模** 調査区北西で検出した 3間×1間の側柱建物跡である。平面形は南北に長い長方形を呈し、北を主軸としている。P 3-6 と P 3-7 に間に柱穴が検出できなかったことから、P 3-2 は建物跡に伴わない可能性が高いだろう。また、P 3-5 は後述する掘立柱建物跡 4 に伴う可能性のある柱穴 (P 4-2) を一部破壊している。桁行柱間は 1.75 m であり、柱痕跡の径は 20 から 25cm。平面規模は桁行 5.35 m、梁行 3.75 m となる。北半部の柱穴は落ち込みの埋没後に掘りこまれている。

**出土遺物** 挖立柱建物跡 3 から出土した遺物のうち、図化できたものは図 55 の 164 ~ 166 の 3 点である。

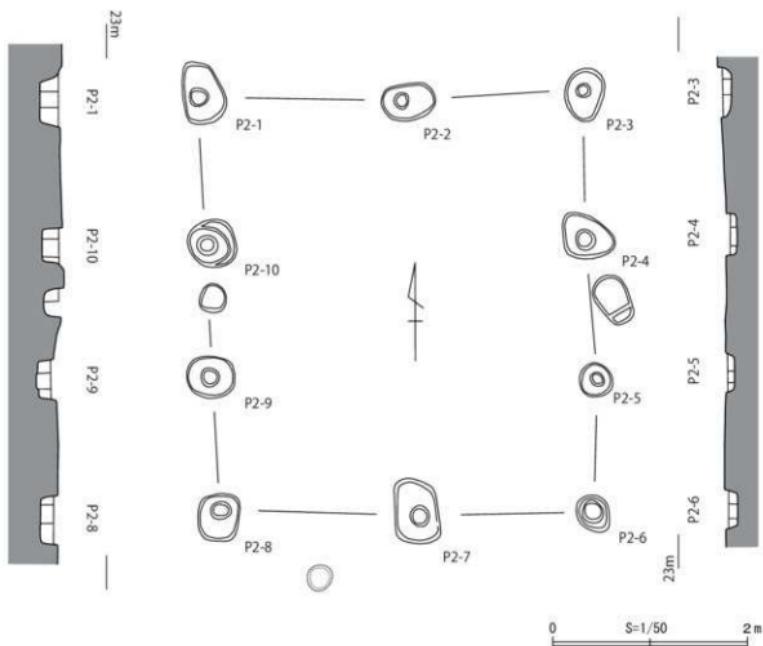


図 48 挖立柱建物跡 2 平面図・断面図

164はP3-1から出土した須恵器・壺の底部。全面回転ナデ。

165はP3-3から出土した須恵器。杯B身の底部と思われる。高台は外側に貼りつけられ、断面三日月状を呈している。全面回転ナデ。

166はP3-7から出土した土師器・甕の口縁部。端部はわずかに上方へつまみ上げている。内外面とも横方向のナデ。

他に全ての柱穴から遺物が出土しているが、いずれも細片で図化不可能である。

#### (8) 挖立柱建物跡 4

**内容と規模** 調査区北西で検出した3間×1間の側柱建物跡である。平面形は南北に長い長方形を呈し、北よりわずかに東側を主軸としている。P4-6とP4-7の間の柱穴は検出できておらず、掘立柱建物跡3同様、P4-2は建物跡に伴わない可能性があり、前述のようにP4-2は掘立柱建物跡3の柱穴(P3-5)によって破壊されている。

また、桁行柱間は1.5から1.8mであり、規模は桁行5.0m、梁行3.5mとなる。

**出土遺物** P4-2から土師器小片、P4-4から須恵器・甕小片などが出土地していが、いずれも細片である。

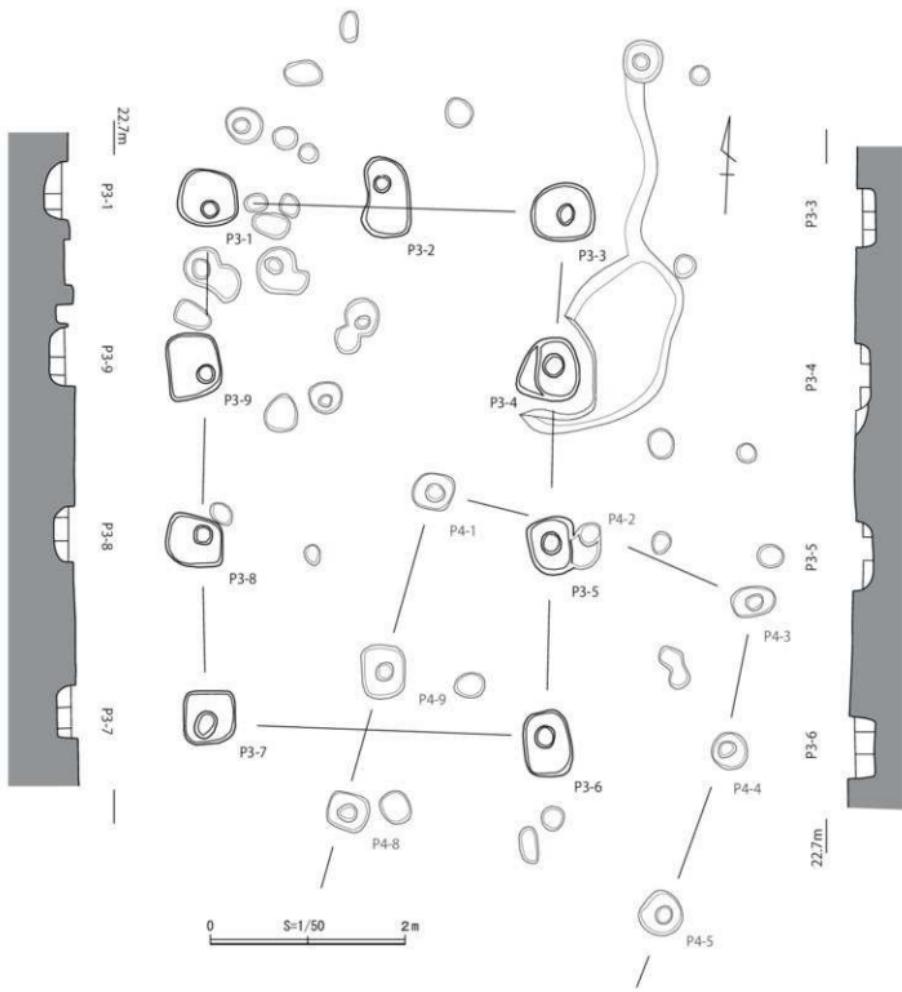


図49 掘立柱建物跡3 平面図・断面図

#### (9) 掘立柱建物跡5

**内容と規模** 調査区南西で検出した3間×2間の側柱建物跡である。平面形は南北に長い長方形を呈し、磁北よりわずかに東側を主軸としている。後述する掘立柱建物跡6と位置的には重なっているが、柱穴の切りあい関係は確認できない。桁行柱間は1.9m、梁行柱間は2.0mであり、規模は桁行5.75m、梁行4mとなる。

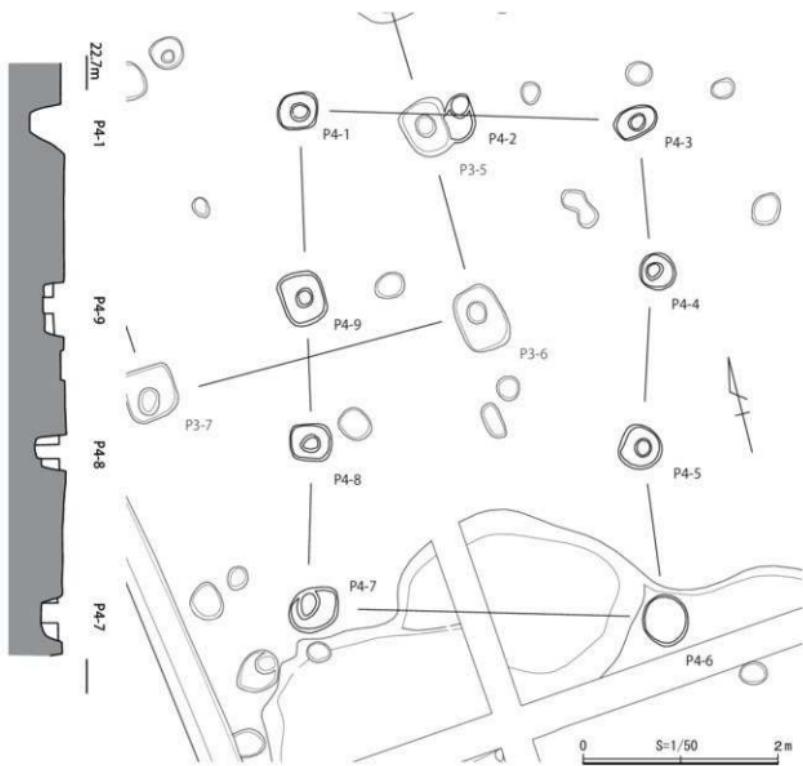


図50 掘立柱建物跡4 平面図・断面図

**出土遺物** P 5-4から須恵器・甕小片、P 5-7から土師器小片などが出土しているが、いずれも細片である。

#### (10) 掘立柱建物跡6

**内容と規模** 調査区南西で検出した3間×2間の側柱建物跡である。平面形は南北に長い長方形を呈し、ほぼ正確に北を主軸としている。西側は調査区外のため、検出することができない。桁行柱間は2.15m、梁行柱間は2.0mであり、規模は桁行6.5m、梁行3.4mとなる。

**出土遺物** 図55-167はP 6-6から出土した土師器・甕の口縁部。外面には一部縱方向のハケが観察できるが、他は全面横方向のナデ。他にP 6-3から土師器・甕小片、P 6-5から須恵器・甕小片などが出土している。

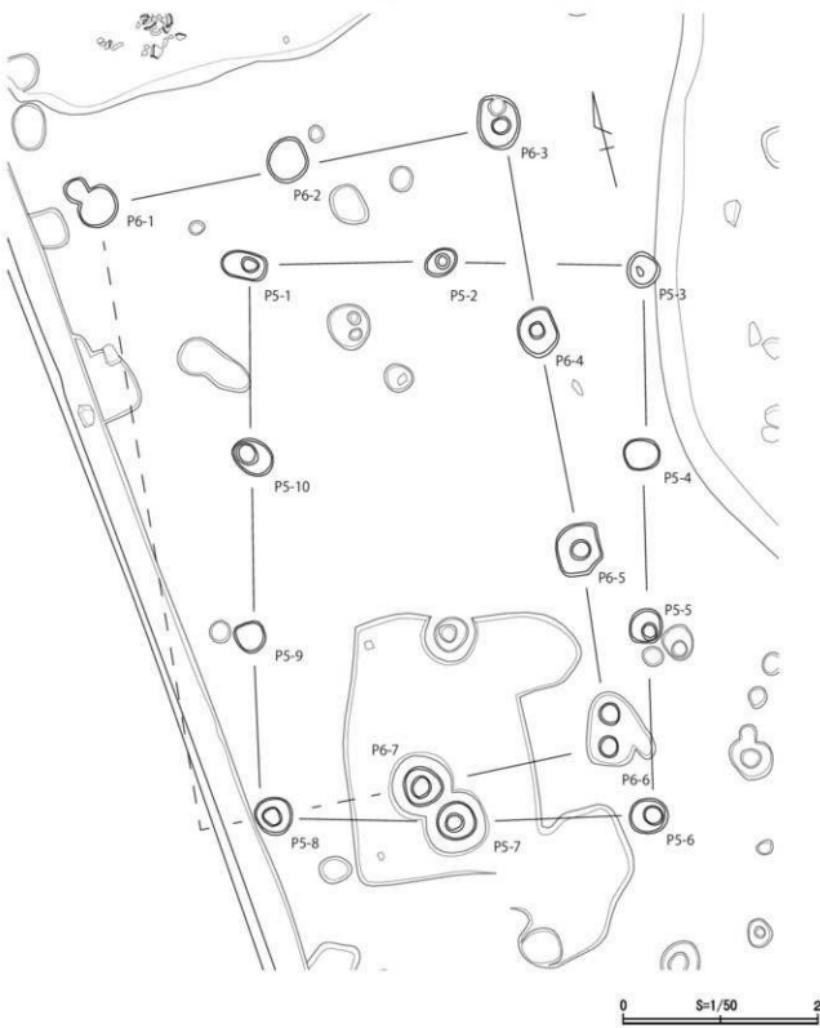


図 51 挖立柱建物跡 5・6 平面図

(11) 挖立柱建物跡 7

**内容と規模** 調査区南西で検出した掘立柱建物跡である。2間以上×2間の側柱建物跡となる可能性が高いだろう。平面形は東西に長い長方形を呈し、磁北よりわずかに東側を基準としている。東側は1号墓の南溝にかかっているが、柱穴埋土と1号墓南溝埋土の識別が困難であつ

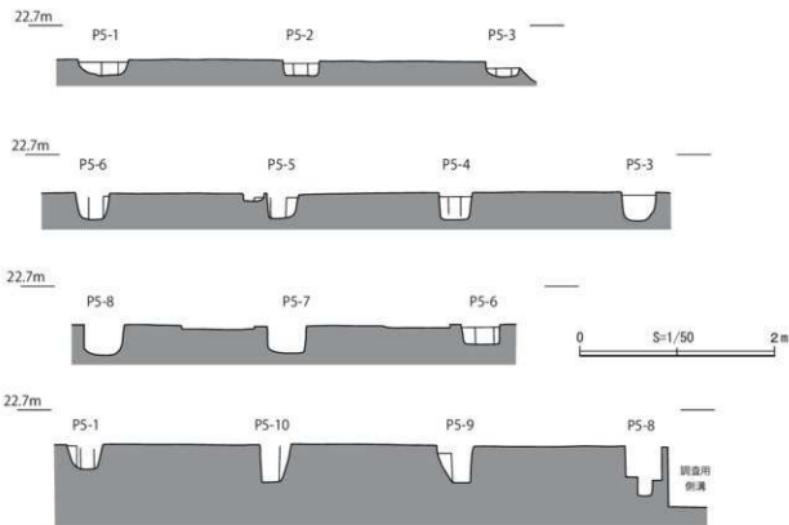


図 52 挖立柱建物 5 柱穴断面図

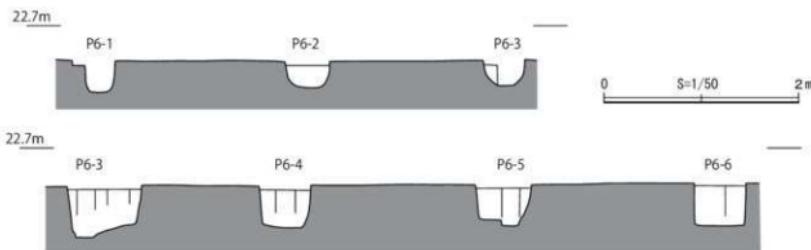


図 53 挖立柱建物 6 柱穴断面図

たため、上面では検出できていない。P 7-1 も地山まで掘り下げた段階で検出できたものである。桁行柱間は 1.85 m、梁行柱間は 1.75 m であり、規模は桁行 3.75 m 以上、梁行 3.65 m となる。

この建物跡の存在から、掘立柱建物跡 7 が建てられた段階では 1 号墓南溝はほぼ完全に埋没していたことがわかる。

**出土遺物** P 7-3 から弥生土器の小片、P 7-5 から須恵器・甕小片等が出土しているが、固化不可能である。

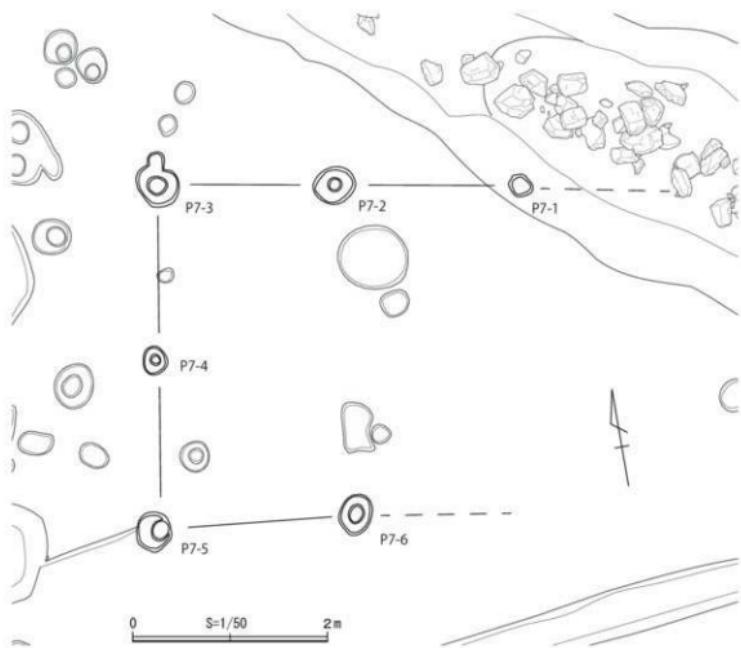


図 54 捜立柱建物跡 7 平面図・断面図

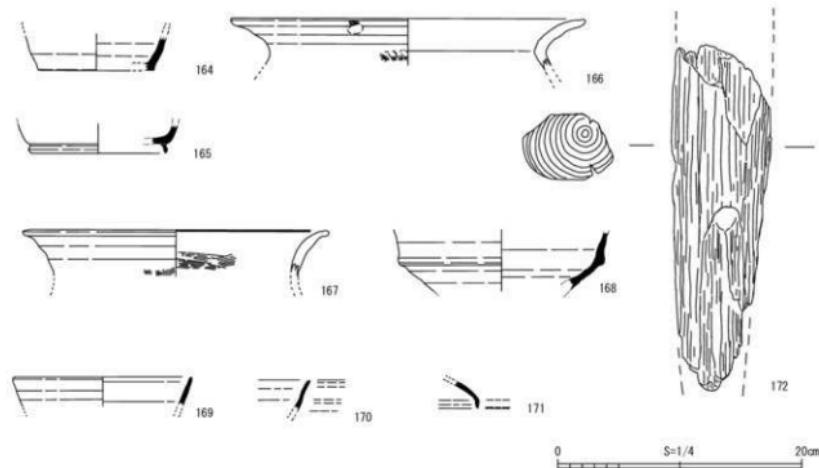


図 55 柱穴出土遺物

#### (12) 建物跡とならない柱穴

調査区内には掘立柱建物跡として復元できなかったが、柱穴が多数検出された。ここではその特徴を述べる。

柱穴は主に調査区の北西から南西部で検出され、方形周溝墓の存在する範囲、特に1号墓の範囲には全くといっていいほど検出されなかった。柱穴の深度は比較的浅く、検出できた深さは最大でも60cm程度である。このことから、柱穴群は大規模な削平を受けているものと判断される。

図55の168～172は柱穴から出土した遺物である。

168は須恵器だが、複合口縁状を呈する個体である。いわゆる「稜挽」の稜の部分になると考えられるが、不明である。内外面とも回転ナデ。内外面ともに自然釉が付着している。

169は須恵器・杯類の口縁部。小片のため器種不明。ほぼ直立する。全面回転ナデ。

170は須恵器・椀の口縁部か。小片のため器種不明。やや外反する。全面回転ナデ。

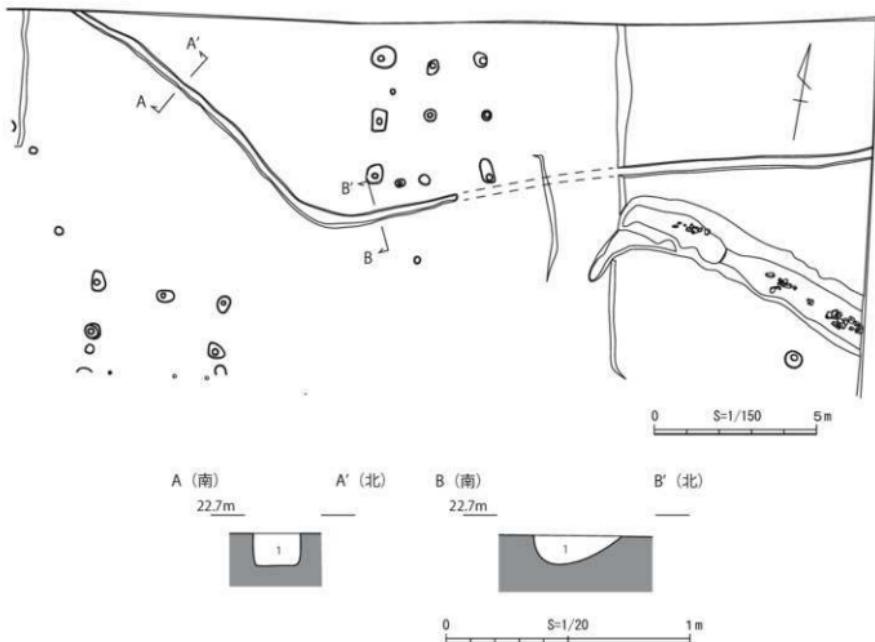
171は須恵器・杯B蓋。口縁端部は強く屈曲するが、天井部は丸みを帯びる。全面回転ナデ。

172は木製品・柱根。一部、面取りが行われている。遺存状況が悪いため断定できないが、杭状のものになる可能性もある。

#### (13) 溝1

**内容と規模** 溝1は調査区の北側を東西に横断するように検出された溝である。検出できた幅は0.6m、深さは0.4m。自然地形に沿って東から西側へと底面の標高が下がっていく。

断面は箱状やU字状となり、一定しない。また、一部は完全に削平され、検出することができない。



溝1埋土  
1:陶灰 中粒砂 しまり強い 径1mm以下の粗砂 径5mm以下の細砂

図56 溝1 平面図・断面図

**出土遺物** 溝1の埋土からは2点の図化可能な遺物が出土した。

173は須恵器・壺の底部。底部は円盤状でヘラ切り未調整。内面は回転ナデ。

174は古代の須恵器・壺の高台部。外面は横方向のケズリ、内面は回転ナデ。内面に自然釉が付着している。

出土遺物から溝1は平安時代に埋没したものと考えられる。

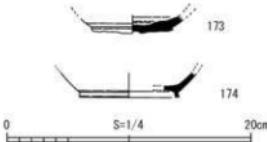


図57 溝1 出土遺物

## 5 遺構に伴わない遺物

今回の調査では、遺構に伴わない古代の遺物が多数出土している。

175は須恵器・杯H蓋か。天井部はヘラ切り無調整。他は全面回転ナデ。176は杯H身か。全面回転ナデ。底部と体部の境界に

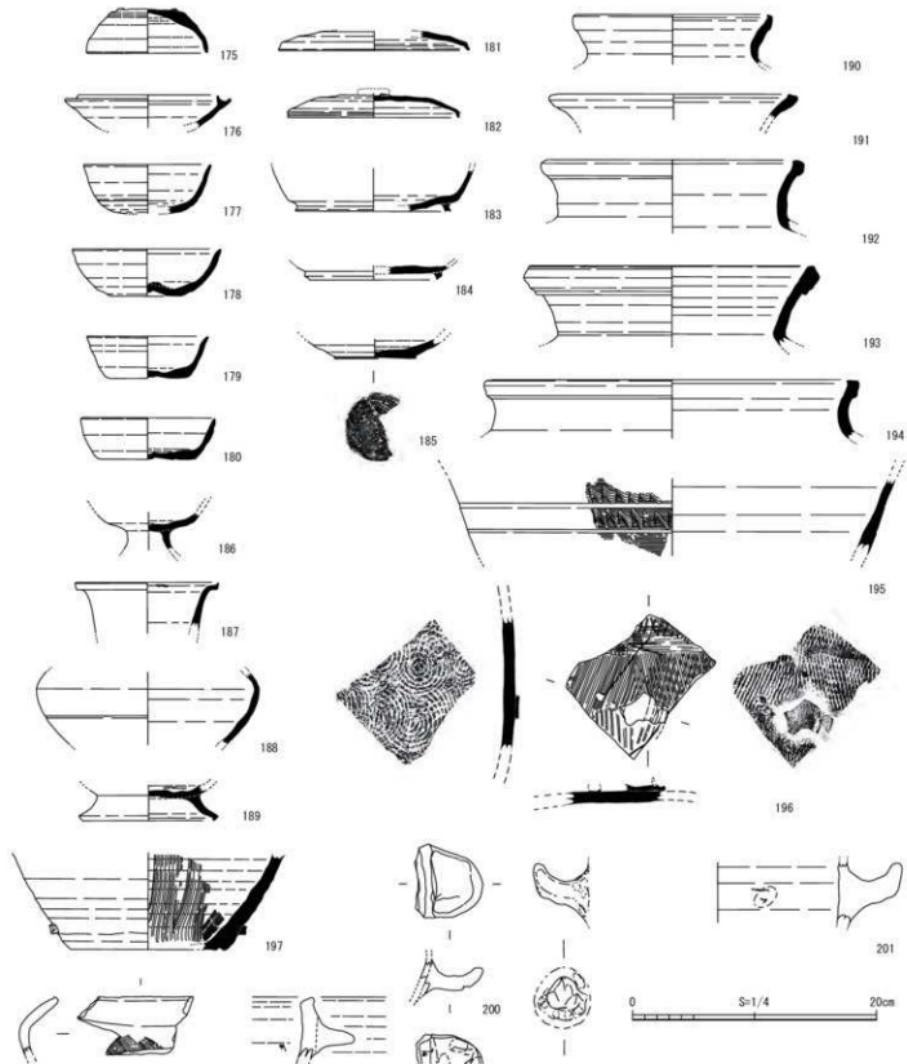


図 58 遺構に伴わない遺物

沈線状の稜が巡る。178は須恵器・杯G身。底部はヘラ切り無調整。他は回転ナデ。ヘラ切りの観察から、ロクロの回転方向は左回り。内外面に自然釉が付着するが、内面見込み部には窓体の一部や何らかの付着物が焼成時に発泡したものが多く付着している。179は須恵器・杯A。底部はヘラ切り未調整。他は回転ナデ。180は須恵器・杯A。底部はヘラ切り未調整。他は回転ナデ。ヘラ切りの観察から、ロクロの回転方向は左回り。181は須恵器・杯B蓋の口縁部。全面回転ナデ。外面に自然釉が付着している。182は須恵器・杯B蓋。つまみは完全に剥離し、形状は不明。口縁部は強く屈曲する。全面回転ナデ。183は須恵器・杯B身の底部。高台は内側に貼りつけられている。底部外面は回転ケズリ、他は回転ナデ。184は須恵器・杯B身の底部。高台は内側に貼り付けられている。底部外面は回転ケズリ。他は全面回転ナデ。185は須恵器・椀の底部。底面は右回転糸切り。他は回転ナデ。186は須恵器・高杯の脚柱部から杯部。全面回転ナデ。187は須恵器・壺の口縁部。口縁端部はわずかに立ち上がる。全面回転ナデ。188は須恵器・壺の肩部。長頸壺か。全面回転ナデ。外面下半に1条の沈線が巡る。内面下半には自然釉の付着がみられる。189は須恵器・長頸壺の脚部。脚端部はふんばるような形状となっている。全面回転ナデ。190～194は須恵器・甕の口縁部。全面回転ナデ。195は須恵器・甕の口頸部。外面下半にはカキメ状の調整がみえるが、他は全面回転ナデ。2条の沈線が巡り、その間を充填するように5本一単位とする波状文が2段施文されている。磨滅が激しい。196は須恵器・甕の体部。外面は平行タタキ目を一部カキメ状の調整で消している。内面は同心円文で具痕。外面には自然釉が付着し、同時に他個体も溶着している。溶着した個体はその形状から杯G蓋の口縁部と思われ、宝珠つまみの一部と思われる部分も付着している。197は備前焼・擂鉢の底部から体部。底部外面へラ起こし、他は全面回転ナデで器面は激しく凹凸がある。擂目は縱方向で、9本一単位とし左回りの順に施される。擂目は上半の間隙が大きい。これらの特徴から16世紀末～17世紀初頭のものと判断される。198は土師器・甕の胴部から口縁部。口縁端部は内側に肥厚する。胴部外面は斜め方向のハケ、口縁部は内外面とも横方向のナデ。外面にコゲ状の炭化物が付着している。199は土師器・羽釜の口縁部。全面が粗いユビオサエで成形されている。200は土師器の把手部。把手は板状を呈し、ユビオサエによって粗く成形されている。外面の一部にハケ。コゲ状の炭化物が把手の上面に付着している。201は土師器の把手部。把手はやや扁平な角状を呈す。内面は横方向のナデ。

以上の遺物もおおむね飛鳥I～平城III併行期までにおさまり、集落跡の存続時期を示している。

# 第5章 有年牟礼・山田遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学 白石 純

## 1 分析目的

有年牟礼・山田遺跡出土土器には在地で生産された土器と搬入された土器（加飾壺・大型二重口縁壺・吉備型壺）が、形態と肉眼胎土観察よりわかっている。そこで自然科学的な胎土分析で、搬入品の土器がどの地域の胎土に類似しているか検討した。

## 2 分析方法

自然科学的な分析法には、蛍光X線分光法とデジタルマイクロスコープを用いた。

蛍光X線分析法は、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から胎土の違いについて検討した。測定した成分（元素）は、Si, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Zr の13成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計（エアライド・ナノクルセイド製 SEA5120A）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものと加圧成形機で約15%の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

測定条件は、管球ターゲットR h、励起電圧は50kV・15kV・7kV、管電流は4 μA～1000 μA、測定時間は300秒、雰囲気は真空中で測定した。

デジタルマイクロスコープ（キーエンス社製 VHX-1000）による分析では、土器表面を20倍～100倍で観察し、胎土中に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさなどの大まかな含有量を調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、「多量・中量・少量・まれ

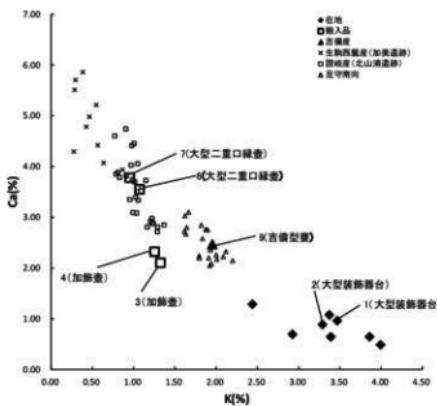


図59 有年牟礼・山田遺跡出土土器の产地推定（K-Ca散布図）

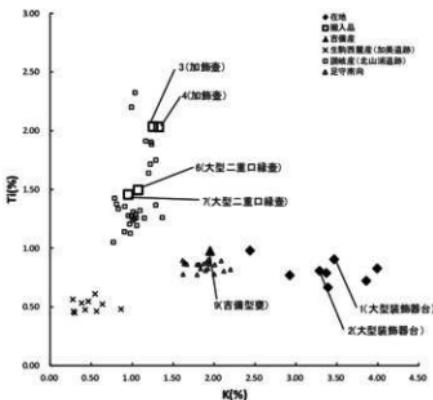


図60 有年牟礼・山田遺跡出土土器の产地推定（K-Ti散布図）

に」の4段階であらわした。

分析した有年牟礼・山田遺跡の土器試料は大型装飾器台2点、加飾壺2点、大型二重口縁壺2点、高杯2点、甕2点、器台1点、壺2点の合計13点である（表2参照）。

### 3 分析結果

#### (1) 蛍光X線分析

図60・61・62の散布図（K-Ca・K-Ti・Ti-Ca）では、有年牟礼・山田遺跡の土器が、在地産（試料番号1・2・5・8・10・11・12・13）と加飾壺・大型二重口縁壺（3・4・6・7）と吉備型甕（9）に胎土が分かれた。そして、この散布図に大阪市加美遺跡出土の生駒西麓産と香川県高松市北山浦遺跡の讃岐産と、岡山市足守南向遺跡の吉備型甕をそれぞれプロットすると、加飾壺・大型二重口縁壺（3・4・6・7）は讃岐産の領域に、吉備型甕（9）は吉備型甕の領域とそれぞれ重なった。

#### (2) マイクロスコープによる胎土観察結果（85頁：図62参照）

- デジタルマイクロスコープによる土器表面の胎土観察では、以下のようない結果となった。
- ・試料番号1・2・5・8・10・11・12・13には1mm以下の石英を中量程度含み、0.5mm以下の長石・角閃石を少量含む。また、2mm程度の花崗岩らしき岩石片が観察される。
  - ・試料番号3・4・6・7には、1mm以下の石英を中量程度と、0.5mm以下の雲母・角閃石・長石を多量に含む。まれに2mm程度の閃緑岩らしき岩石片が観察される。
  - ・試料番号9には、1mm以下の石英を中量程度含み、0.5mm以下の角閃石・長石を少量含む。また2mm程度の閃緑岩らしき岩石片がまれに観察される。

### 4 おわりに

以上の分析結果から、以下のことが推定される。

#### 蛍光X線分析結果

有年牟礼・山田遺跡出土の土器13点を分析すると、大きく3つのグループに分類できた。これは、試料提供者により分類されている在地産と生駒西麓産と吉備産の3つに相当する。そして、産地推定では、加飾壺・大型二重口縁壺（試料番号3・4・6・7）は、讃岐産土器（高松市北山浦遺跡出土讃岐産土器）が分布する領域に入り、生駒西麓産（大阪市加美遺跡出土生駒西麓産土器）の領域には入らなかった。

吉備型甕（試料番号9）は、岡山市足守南向遺跡出土吉備産土器の分布領域に入った。

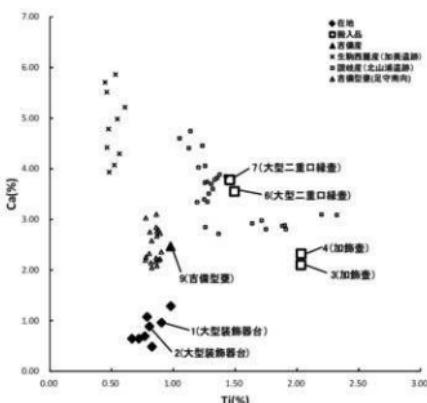


図61 有年牟礼・山田遺跡出土土器の产地推定（Ti-Ca散布図）

## 土器表面の砂粒観察結果

砂粒観察でも3つの胎土に分類できた。加飾壺・大型二重口縁壺には、雲母と角閃石が含まれており、生駒西麓産（加美遺跡）および讃岐産（北山浦遺跡）と非常に砂粒構成が似ていた。また、在地産と推定される土器の胎土には、花崗岩と思われる岩石片が含まれていた。これは、有年牟礼・山田遺跡の北側山塊が花崗岩（含閃綠岩）の基盤層で形成されていることと顕著ではなく、在地産と推定される土器は、遺跡周辺で生産されたことが考えられる。

以上、蛍光X線分析法を用いた胎土分析により、有年牟礼・山田遺跡より出土した搬入品と考えられる加飾壺や大型二重口縁壺は讃岐で生産されたと推定される。また吉備型甕も吉備産と推定される。そして、在地産と考えられる土器も、砂粒構成から在地の胎土に類似していることが推定された。

この胎土分析の機会を与えていただいた中山良平氏をはじめ赤穂市教育委員会の方々には、お世話になった。また、比較試料とした大阪市加美遺跡および高松市北山浦遺跡出土土器は田中清美氏、渡邊 誠氏にお世話になった。記して感謝いたします。

表2 有年牟礼・山田遺跡出土土器の胎土分析試料一覧表 (Si ~ P : %, Rb ~ Zr : ppm)

試料番号	報告書番号	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	
1	33	大型裝飾壺	70.43	0.90	19.11	4.29	0.01	0.19	0.96	0.00	3.47	0.43	59	180	358	在地産
2	33	大型裝飾壺	70.15	0.81	18.65	3.88	0.06	0.43	0.89	1.28	3.29	0.38	45	151	291	在地産
3	34	加飾壺	56.01	2.03	20.80	13.33	0.14	4.04	2.10	0.00	1.33	0.06	7	298	294	讃岐産
4	34	加飾壺	55.91	2.03	19.54	14.15	0.16	4.03	2.32	0.18	1.26	0.30	12	186	174	讃岐産
5	26	高杯	72.37	0.72	17.76	2.89	0.01	0.22	0.64	1.00	3.86	0.33	51	107	403	在地産
6	35	大型二重口縁壺	53.39	1.49	20.30	15.29	0.23	4.27	3.55	0.00	1.07	0.28	19	296	122	讃岐産
7	35	大型二重口縁壺	54.61	1.46	19.59	13.47	0.19	4.87	3.78	0.74	0.95	0.21	6	247	151	讃岐産
8	60	高杯	69.37	0.79	18.94	4.34	0.03	0.15	1.08	1.31	3.37	0.51	49	183	349	在地産
9	55	吉備型甕	63.92	0.98	19.34	8.26	0.11	1.25	2.47	1.24	1.95	0.34	40	425	294	吉備産
10	24	邪舟	66.24	0.98	18.93	8.21	0.12	0.47	1.29	0.82	2.44	0.40	58	165	270	在地産
11	54	タタキ甕	69.89	0.77	20.47	4.13	0.04	0.08	0.69	0.52	2.93	0.40	39	79	367	在地産
12	19	広口壺	70.59	0.67	18.46	4.32	0.01	0.39	0.64	1.36	3.39	0.06	40	109	360	在地産
13	18	広口壺	71.08	0.83	18.58	4.39	0.05	0.14	0.49	0.01	3.99	0.35	54	48	376	在地産
14	-	加美遺跡	55.64	0.46	24.07	8.45	0.17	4.75	4.42	0.00	0.57	1.23	10	432	0	生駒西麓産
15	-	加美遺跡	54.92	0.48	22.62	9.49	0.17	5.78	3.93	0.61	0.87	0.94	11	334	44	生駒西麓産
16	-	加美遺跡	53.92	0.52	22.35	10.52	0.17	6.25	4.07	0.38	0.64	0.97	13	350	87	生駒西麓産
17	-	加美遺跡	51.75	0.46	22.80	10.95	0.17	6.75	5.51	0.08	0.29	1.03	10	276	0	生駒西麓産
18	-	加美遺跡	52.29	0.53	23.48	9.95	0.17	5.84	5.86	0.00	0.39	1.22	8	416	74	生駒西麓産
19	-	加美遺跡	53.01	0.61	23.21	10.41	0.18	5.36	5.21	0.04	0.55	1.30	15	474	0	生駒西麓産
20	-	加美遺跡	51.34	0.45	22.35	11.09	0.18	6.76	5.71	0.55	0.30	1.03	9	381	103	生駒西麓産
21	-	加美遺跡	54.08	0.48	22.49	9.64	0.15	6.29	4.78	0.28	0.43	1.20	8	419	52	生駒西麓産
22	-	加美遺跡	52.19	0.56	24.08	10.74	0.18	5.88	4.30	0.05	0.28	1.47	13	420	52	生駒西麓産
23	-	加美遺跡	54.22	0.55	21.86	10.04	0.17	6.33	4.98	0.00	0.47	1.12	7	416	63	生駒西麓産

## 第6章 有年牟礼・山田遺跡の位置づけ

### 1 方形周溝墓の構造と遺構の形成過程

有年牟礼・山田遺跡は削平が激しく、検出できた弥生時代の遺構は、土坑1基のほかは、石材と土器とを埋土に含む方形周溝のみであった。しかし、今回の調査結果からこの遺構は墳墓遺構であり、方形周溝墓であると位置づけられる。ここではその根拠を整理し、さらにその位置づけを検討したい。

#### (1) 墳墓とする根拠

方形周溝の性格を明らかにするため、まず検出状況と出土土器から検討していきたい。1号墓とした方形周溝に堆積した土層の観察からは、方形周溝内から弥生土器や石材を含む土砂が流出し、周溝内に堆積している様子が観察できた。このことから、弥生土器・石材・土砂は、方形周溝の内側に存在した施設に由来するものであると推測できる。

石材の検出状況という点では、近隣の調査事例である有年原・田中1号墳丘墓においても周溝内に貼石が転落したものと判断される石材が周溝に落ち込んでおり、今回の検出状況と類似している（写真図版参照）。

次に、方形周溝内から出土した土器は、最上層の古代の遺物を除くと、いずれも弥生土器である。器種は甕・壺・高杯・鉢などの一般的な器種とともに、大型装飾器台・装飾器台・加飾壺・大型二重口縁壺といった特殊な器種が出土した。

大型装飾器台は一般的な集落ではまずみられない器種である。周辺の類例としては、有年原・田中1号墓出土器台があげられ、形状や装飾、口縁部や脚部形態までもが酷似している。また、加飾壺・大型二重口縁壺は胎土分析から讃岐産胎土を使用していることが明らかで、確実な搬入土器である。これらの搬入土器はその装饰性やサイズから、日常用の土器とは考えにくい。さらに、出土した広口壺（18）には胴部下半に焼成後穿孔が施されている。これらのことから、方形周溝内から出土した土器群は日常的な土器とは考えにくく、墳墓への供献土器と捉えるのが妥当であると考えられる。

以上の点から、今回の調査で検出された方形周溝は墳墓遺構であると考えられ、ひとまず「方形周溝墓」と呼称するのが妥当であると考える。

#### (2) 規模と構造の復元

この方形周溝墓の位置づけを明確にするため、ここでは検出状況などからその規模と構造を復元したい。

前述のように、方形周溝墓にはマウンドが伴っていたことが推測できるがマウンドは完全に削平されており、高さや構造等は不明であった。しかし、周囲の遺構との関係からマウンドの存在及びその高さもある程度の推測が可能である。

今回の調査区では、弥生時代の方形周溝墓のほかに古代の集落跡も検出された。掘立柱

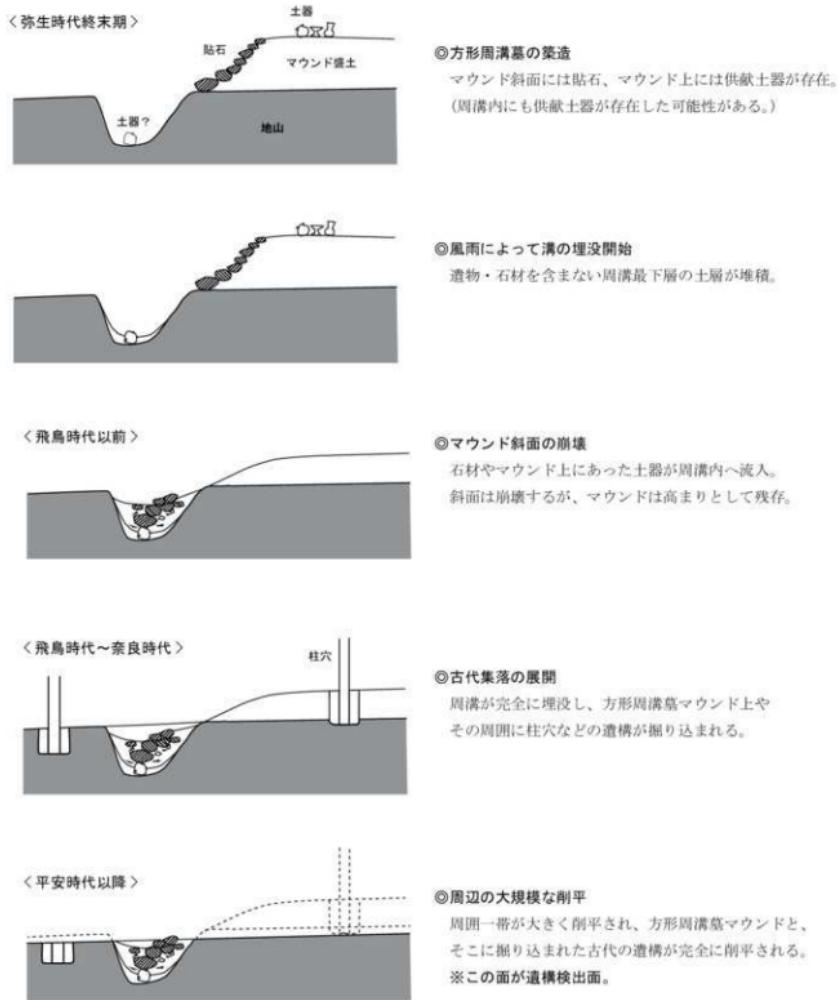


図 63 推測される遺構の形成過程

建物跡が 7 棟以上と柱穴 150 基以上、土坑 2 基などが検出され、集落の中心部と評価できる地点である。調査地は地山が黄褐色系、遺構埋土が黒褐色系の土層であり、比較的検出が容易であったが、1 号墓の周溝内側では柱穴 1 基すら検出できていない。これには以下の 2 通りの可能性が考えられる。

①方形周溝墓の位置を避けて飛鳥から奈良時代の遺構が掘削されたため、本来的に遺構

が存在しない。

②本来、方形周溝墓のあった範囲にも古代の遺構が存在したが、後世のマウンドの削平によって完全に消滅した。

①については、方形周溝墓の周溝が飛鳥時代前半頃まで埋没していなかったことから考え得る可能性である。しかし、掘立柱建物跡7は埋没後の1号墓南溝上に建築されており、方形周溝墓を避けるという意識があったとは考えづらい。

②の可能性は、方形周溝墓のマウンドが飛鳥時代まで微高地状に残存しており、そのため後世に周囲より深く削平を受けたとする可能性である。この場合、弥生時代終末期から飛鳥時代まで方形周溝墓のマウンドが残存していたことになる。第4章で報告した通り、本調査区からは古墳時代の遺構は検出されておらず、方形周溝墓は古代まで擾乱されていないことから、マウンドの大部分が残存していた可能性は十分に考えられる。

以上のことから、方形周溝墓のマウンドが飛鳥時代まで残存していたといえ、このマウンドに掘削されたであろう遺構が完全に削平されていることから、方形周溝墓のマウンドの高さは周囲で検出されている飛鳥から奈良時代の柱穴の深度以上に高いものであったといえる。周囲で検出された柱穴の平均はおよそ40cmであるため、1号墓のマウンドの高さは40cm以上はあったと考えるのが妥当である。

次に、周溝内に転落した石材について検討したい。この石材はマウンドの流出土とともに周溝内に堆積しており、本来、マウンドに伴っていたものと思われる。周溝内の石材は大きく分けて径20cm以下のやや小型の石材と、長径50~60cm程度の大型の石材とが存在した。大型の石材は列状に検出され、その上部に小型の石材が載るようなかたちで検出されている。この検出状況は原位置をとどめていないものの、築造当初の貼石石材の配置を反映しているものと思われる。つまり、大型の石材はいわゆる「基底石」のような役割を果たしていたものと評価したい。貼石は大型の石材を最下段に設置し、その上部に小型の石材を積み上げる形で施されていたと想定できる。

また、石材はいずれも原位置を保っていないことから、貼石はマウンド上半のみ、おそらく盛土部分にのみ施され、周溝内の部分については施されなかったものと推測される。石材は1号墓では検出した4辺すべての溝内で検出されたため、貼石は4辺すべてに施されていたものといえる。

次に、1号墓出土土器の配置状況について検討したい。今回、出土した土器はその残存状況や出土位置から大きく2つのグループに分かれる。1つは東・西・北溝から出土したもので、小片で残存状態が悪く、密度も散漫に出土したもの。もう1つは南溝から出土したもので小片化しているが完形近くまで復元でき、比較的集中して検出されたものである。特に昭和63年度調査時に南溝東半で検出されたもの（図8、遺物番号14ほか）は完形品が多く、また、磨滅しているものが多い。器種についても大型装飾器台や搬入品の加飾壺・大型二重口縁壺など、その特殊性が際立っている。東・西・北溝ではそのような土器の出土状況はみられなかったため、2つのグループの間には、土器が供獻された位置や方法に何らかの差異があったと考えるのが妥当である。

東・西・北溝において、散漫に出土したグループは出土状況や土層観察から石材やマウンドの流出と同時に溝内に堆積していることがわかっており、本来はマウンド上に置かれていたものがマウンド流出とともに周溝内に落ち込んだものと判断される。一方、出土状況は十分に明らかで

はないため可能性にとどまるものの、南溝から出土した土器群はその残存状況の良さから、当初から溝内に供献されていた可能性がある。

検出できた遺構は残存状況が良いとはいっても、これらの特徴が復元できる。

## 2 方形周溝墓の位置づけ

### (1) 出土土器群の編年的位置

ここでは方形周溝墓出土土器の時期を明らかにしたい。

まず、もっとも時期を捉えやすい在地産の土器から検討を行う。タタキ壺（53・54）は、口縁部をわずかに摘み上げるようにして端面を成形し、外面はタタキをハケで一部消している。底部はやや退化気味である。広口壺（18・19）の胴部は肩が張り、玉ねぎ状を呈している。高杯（27～32）は付加法（脚柱部内実）をとり、脚柱部を細い棒状工具で貫通させるものなどが存在している。これらの土器群の特徴は長友朋子・田中元浩両氏による編年（長友・田中 2007）、V-5から庄内2の範囲内にあたると理解できる。

次に搬入土器について検討してみる。まず吉備型壺（55・56）は典型的な形状をしていると同時に、胎土分析から搬入土器であることが明らかとなつて、吉備地域の編年を援用することが可能である。吉備型壺（55・56）は口縁部の立ち上がりが鋭く、多条沈線が明瞭に施されている。底部はわずかに残存し、底部内面にはユビオサエが顕著にみられ、外面の縱方向のミガキは入念に行われている。以上の特徴は高橋護氏による編年IX-cからX-a期（高橋 1988）、平井泰男氏による編年IV-3期（平井 2010）にあたるものと判断できる。これまでの諸研究では、この段階は近畿地域の庄内式に併行することが明らかになっており、また、その前半期にあたる可能性が高い（亀田 2006 ほか）。

最後に、讃岐産胎土を使用しているとされる加飾壺（34）・大型二重口縁壺（35）については、讃岐地域には類例がほとんどなく、当該地域の編年基準に当てはめることは難しい。ただ、今回出土した土器に類似する加飾壺が比較的多く分布する河内地域においては、加飾壺が存在するのは弥生時代後期後半から庄内式期とされ、布留式期にはほとんど存在しないものとされている（西村 2008）。このことから、加飾壺（34）・大型二重口縁壺（35）についても庄内式期に併行するものと考えるのが妥当である。

以上の検討により、1号方形周溝墓から出土した土器群はいわゆる庄内式期の前半段階に併行するものと理解できる。

### (2) 大型装飾器台の位置づけ

有年牟礼・山田1号墓出土土器群は庄内式期の前半段階のものと考えられ、在地土器や搬入土器はおおよそこの範疇に収まる。しかし、1点のみ、これまで庄内式期のものとは考えてこられなかった器種が存在する。それが大型装飾器台（33）である。この形状の装飾器台はこれまで弥生時代後期中頃の墳墓とされる有年原・田中1号墓に出土例があることから、一般的に

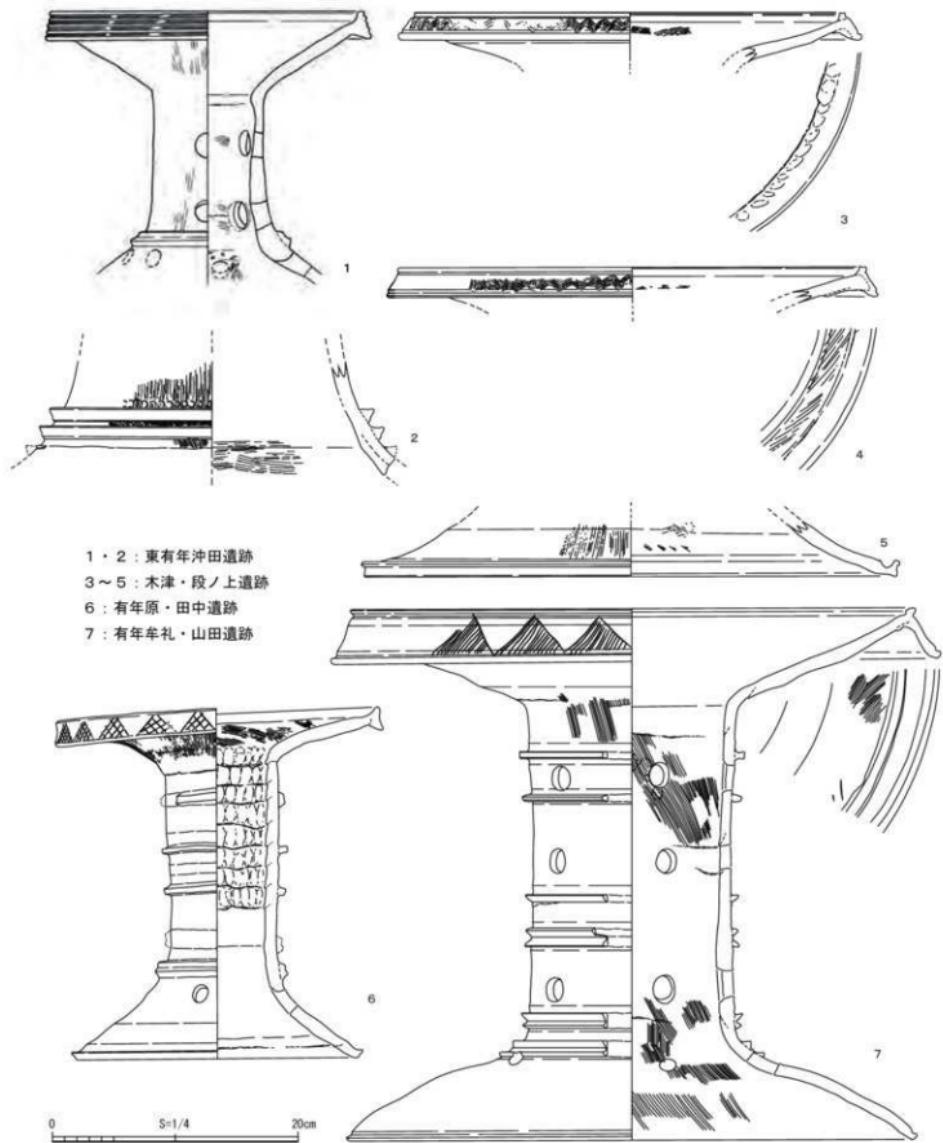


図 64 赤穂市内における装飾器台の類例

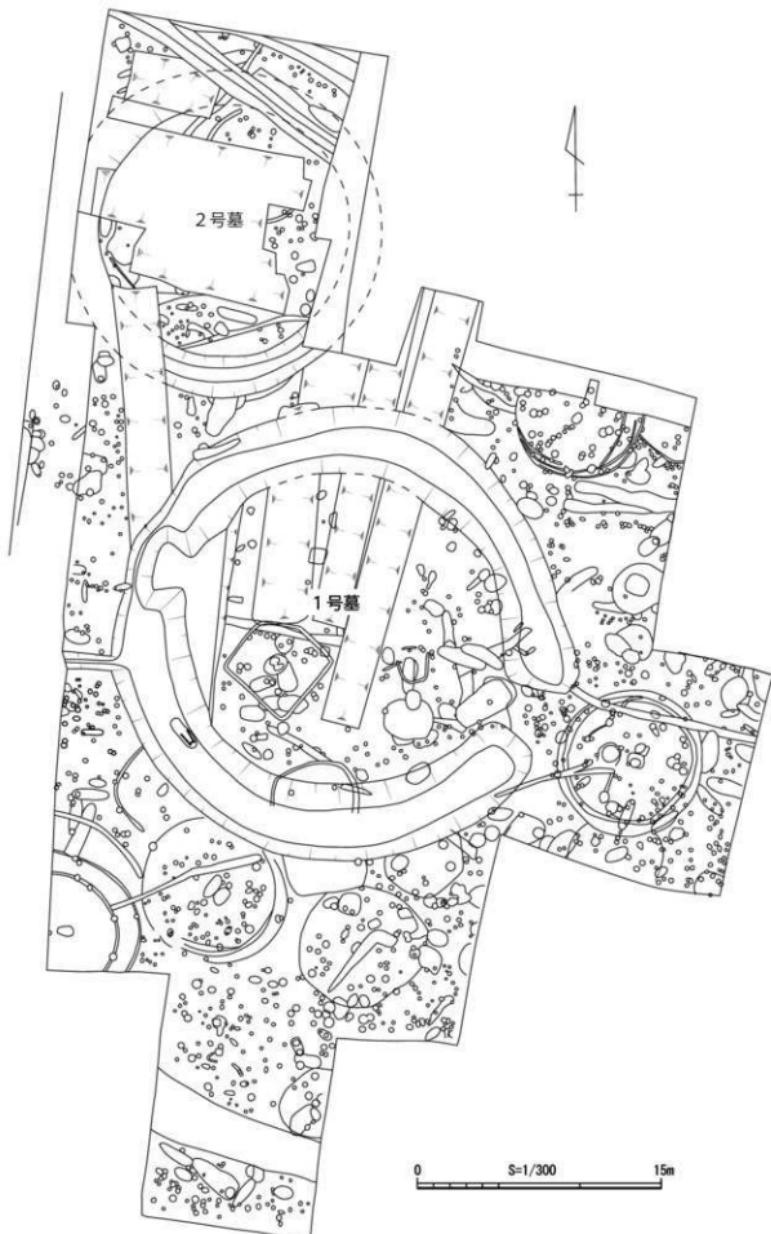


図 65 有年原・田中遺跡墳丘墓群

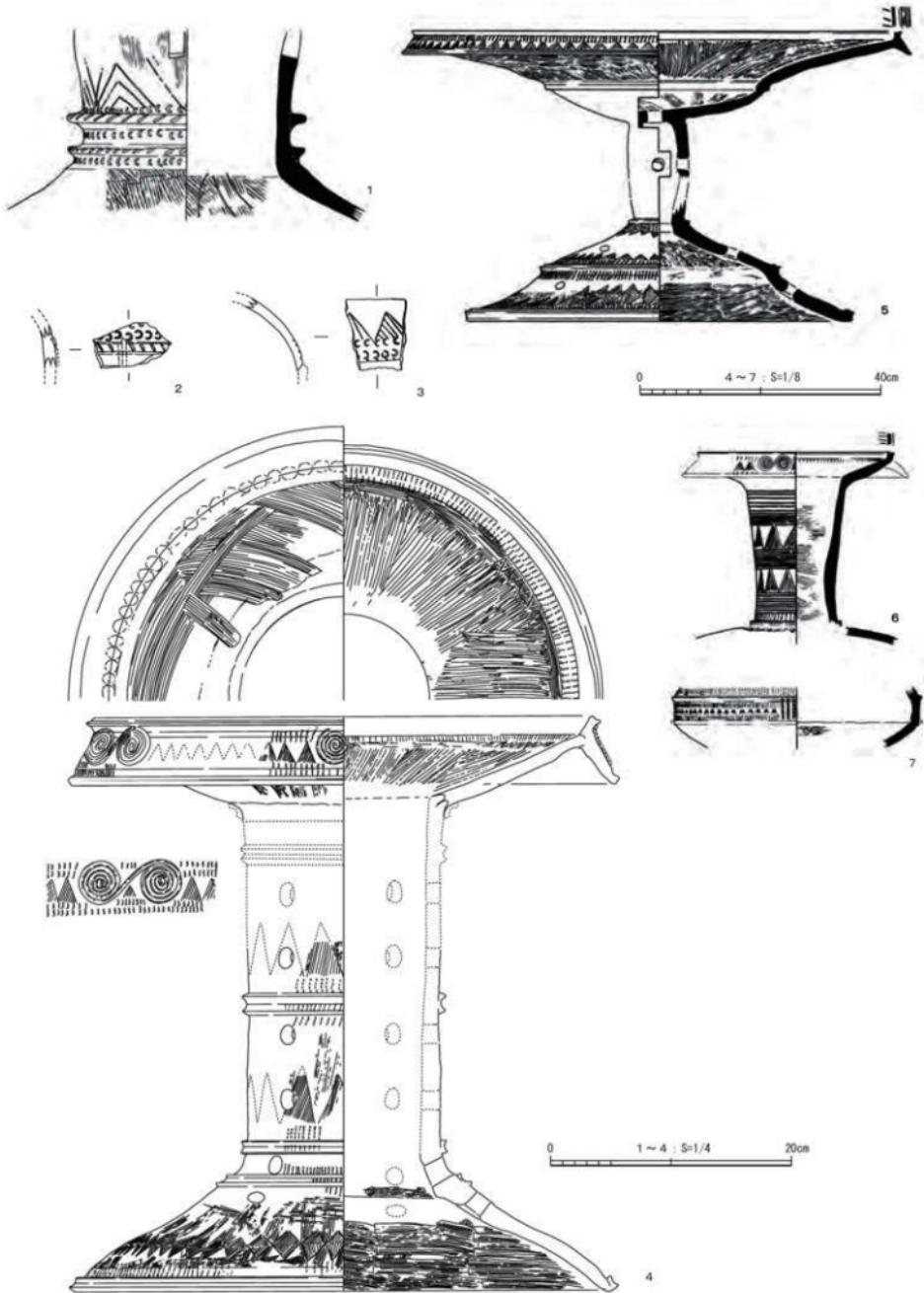


図 66 有年原・田中遺跡墳丘墓群出土土器

は弥生時代後期中頃以前のものと理解されてきた。

しかし、この種の大型装飾器台の検討はほとんど行われておらず、有年原・田中1号墓の大型装飾器台の時期についても十分に明らかにされているとは言い難い状況にある。

これまでの研究では、大型装飾器台を特殊器台の素地とする理解や、装飾器台が特殊器台出現前後には消滅に向かう（大橋1992、近藤2005ほか）という理解を受け、有年原・田中1号墓出土装飾器台や周辺地域に点在する大型装飾器台は、弥生時代終末期には消滅、もしくは存在しても単発的・例外的なものと捉えられてきた。

しかし、有年牟礼・山田1号墓出土大型装飾器台と有年原・田中1号墓出土例を比較すると、その形状・装飾方法は酷似している。さらに、有年牟礼・山田1号墓出土器台の口縁部形態は丸みを帯び、文様装飾も省略されるなど、明らかに有年原・田中1号墓出土器台の退化形態をとっていることから、同一系譜になるものと理解できる。有年牟礼・山田1号墓出土例は庄内式併行期のものと捉えられることから、有年原・田中1号墓の時期はその前段階に位置づけられる可能性が高い。

今回、型式学的に有年原・田中1号墓に後続する型式の大型装飾器台が確認されたことで、大型装飾器台が弥生時代後期から庄内式併行期まで型式学的な時間幅と分布をもつことが明らかとなり、必ずしも単発的・例外的な器種であるとは捉えられなくなった。同時に、大型装飾器台の位置づけや、有年原・田中墳丘墓群の時期についても、再検討が必要となってきたといえよう。

### （3）有年原・田中墳丘墓群と有年牟礼・山田方形周溝墓群

前述のように、有年地区には弥生時代後期の墳丘墓として有年原・田中1号墓が存在し、そこから出土した装飾器台の形状や貼石の存在は有年牟礼・山田1号墓のそれと非常によく似ている。時期は異なるにもかかわらず大型装飾器台という特殊な供献土器を使用していることは、両墳墓に強い関連性があることを示唆している。また、両墳墓は墳丘墓形態が異なるものの、貼石や陸橋部を作り、この点からも両墳丘墓の関連性が指摘できる。これらのことから、有年牟礼・山田1号墓は有年原・田中墳丘墓群に系譜的にも後続するものと捉えるのが妥当である。

有年地区では、東有年・沖田遺跡において弥生時代中期中葉まで遡る円形周溝墓が検出されており、周辺地域同様、大型墳墓に円形周溝墓を採用する地域と理解されている（岸本2008、荒木2009）。有年原・田中墳丘墓群も円形墳丘墓であり、当地域は弥生時代を通じて円形墳墓を採用する代表的な地域として捉えられてきた。

しかし、有年牟礼・山田遺跡で検出されたのは方形周溝墓群であり、当地域では墳丘墓が円形から方形へ墳墓形態が大きく変化している。次節では、その変化の背景を考えるために、有年牟礼・山田遺跡で検出された方形周溝墓の性格について、さらに検討したい。

### （4）はたして近畿的な「方形周溝墓」か？

有年牟礼・山田遺跡で検出された方形周溝墓は、河内・大和・山城地域などの近畿地域で盛行

する「方形周溝墓」と関連するものであるのか、あるいはそれ以外の地域の墳墓形態と関連するものなのか、または在来の墓制の変容であるのか、という点は重要である。これによって本遺跡の評価は大きく異なってくる。遺跡を正しく位置づけるために、今回検出された方形周溝墓の「故地」について検討したい。

本遺跡で検出された遺構と類似したものとして、弥生時代中期後半から後期前半に近畿北部から山陰地域にかけて分布する「方形貼石墓」（肥後 2010）と、弥生時代を通じて近畿地域に一般的な「方形周溝墓」の主に 2 つが挙げられる。「方形貼石墓」については弥生時代後期後半から終末期には四隅突出型埴丘墓や、貼石を持たず丘陵上に立地する方形台状墓・卓状墓へと変化することが明らかにされており、「方形貼石墓」からの影響を考えるのは難しい。

一方、近畿地域の方形周溝墓と比較すると、周溝を共有して群集する点、陸橋部の存在など、貼石以外については共通点が多く見出せる。さらに、有年牟礼・山田 1 号墓に特徴的なことは、溝内に胴部下半に焼成後穿孔した土器を供獻していることがある。これは方形周溝墓に多くみられる土器の供獻方法であって、このことからも近畿地域の方形周溝墓の影響を受けたものと理解するのが妥当であろう。

以上のことから、有年地区では弥生時代後期までは東有年・沖田遺跡や有年原・田中遺跡でみられるような円形周溝墓の墓制を採用していたが、庄内式期にいたり近畿的な墓制である方形周溝墓を取り入れ、大きな墓制の変化が起こったと理解できる。

#### （5）墓制の変化とその背景

有年地区では弥生時代終末期に墓制の変化が起こることが明らかとなったが、その変化が在来の墓制を否定した完全な「転換」なのか、もしくは在来墓制を維持しつつ発生した「変容」であるのかの評価も重要である。ここではその点について検討したい。

有年牟礼・山田 1 号墓とその前段階の墳墓である有年原・田中 1 号墓とを比較すると、貼石と大型装飾器台という 2 つの共通点がある。墳墓の形状が異なるにも関わらず、共通する特徴が引き継がれていることは注目すべき点であり、この 2 つの共通点を詳しく検討したい。

まず、播磨地域の貼石を持つ墳墓は庄内式期には増加するものの、弥生時代後期には極めて稀である。貼石を持つ墳墓が最も多く築かれ、継続して築造されていると考えられるのは有年地区であり、有年原・田中 1 号墓と有年牟礼・山田 1 号墓との間には貼石をマウンド斜面上半にのみ施すという施工上の共通点もあり、貼石が有年地区的墳墓の 1 つの特徴といえる。

次に大型装飾器台について検討したい。これまで、有年原・田中 1 号墓で出土したこの形状の器台は類例がなく、その位置づけについては不明な点が多かった。しかし、有年牟礼・山田 1 号墓で明らかな後続型式となる器台が出土したことで、この種の器台が型式学的な時間幅と分布圏を持つことが明らかになった。今一度、この種の装飾器台の類例と分布を検討する必要性が出てきたといえる。

両墳墓から出土した装飾器台の属性をまとめると、①直線的な筒形の胴部をもち、受部・胴部・脚部が明瞭に区分される高杯状の形状をとる。②胴部には円形透穴を採用する。③胴部・脚部屈曲部に断面 M 字状、方形の突帯を巡らせる。の 3 点に集約される。赤穂市内では東有年・沖田遺跡、有年原・田中遺跡、周世・入相遺跡、木津・段ノ上遺跡といった、弥生時代後期か

ら庄内式期の拠点的な集落からこの種の装飾器台が出土しており、赤穂市内では比較的類例が多い（図64）。

この種の装飾器台は、備前地域の東部から播磨地域の西部に集中していることが明らかにされており、これらの装飾器台が弥生時代後期中頃から庄内式期までの時間幅を持っていることが近年、明らかになりつつある（米田2008）。これらの装飾器台は、出土状況が判明しているものは墳墓用の供献土器が主体であり、墳墓供献用に特化した極めて地域性の高い土器である。逆にいえば、これらの装飾器台を墳墓へ供献するということが、当地域の墓制の特徴であると考えられる。

このような在来の独自性の強い墓制を有年牟礼・山田遺跡は維持していることから、有年原・田中1号墓から有年牟礼・山田1号墓への墓制の変化は、墳丘形態が円形から方形へ変化したとしても、在来の墓制が完全に「転換」したのではなく、近畿地域の方形周溝墓の影響によって「変容」した結果であると位置づけられるだろう。

有年牟礼・山田1号墓からは吉備地域・讃岐地域からの搬入土器も出土しているが、これらの地域からの墓制への影響は認められない。吉備型壺を供献しているにも関わらず、特殊器台ではなく在地的な大型装飾器台を使用し、讃岐地域の搬入土器を供献しているにもかかわらず、讃岐地域に典型的な形状の壺や甕は供献されていない。在来の要素と遠隔地の要素が複雑にからみあい、それが複雑に取捨選択された結果が、有年牟礼・山田1号墓に現れているといえるだろう。

庄内式期にみられる各地の墳墓には、1つの墳墓に遠隔地の要素が入り交じり、複雑な様相を呈することは從来から指摘されていることで、有年牟礼・山田1号墓もそのような墳墓の1つである。しかし、当墳墓が他の庄内式期の墳墓と異なり重要な点は、墳墓の系譜が弥生時代後期から直接的に追える点にある。このことによって、在来墓制の要素と他地域の要素との峻別がきわめて明瞭に行え、要素の取捨選択の有り様が詳細に検討できる。今後、他地域の墳墓との比較検討を行えば、さらに重要な成果が得られるだろう。

### 3 古代集落の位置づけ

#### （1）遺構の変遷

本遺跡では多くの柱穴を検出し、少なくとも7棟の掘立柱建物跡が復元できた。7棟の建物跡はその切りあいと基準とする方位から少なくとも2段階に区分でき、周囲の遺構との関係から、古代以降の調査区は計3期に区分できる。

##### 第Ⅰ期

第Ⅰ期は掘立柱建物跡4・5・7が建設された時期で、1号墓周溝最上層が堆積した段階である。掘立柱建物跡は磁北からやや東にずれた方位を基準としている。落ち込みもこの時期に埋没している。この段階は出土遺物から7世紀代（飛鳥Ⅰ～Ⅲ併行期）にあたると考

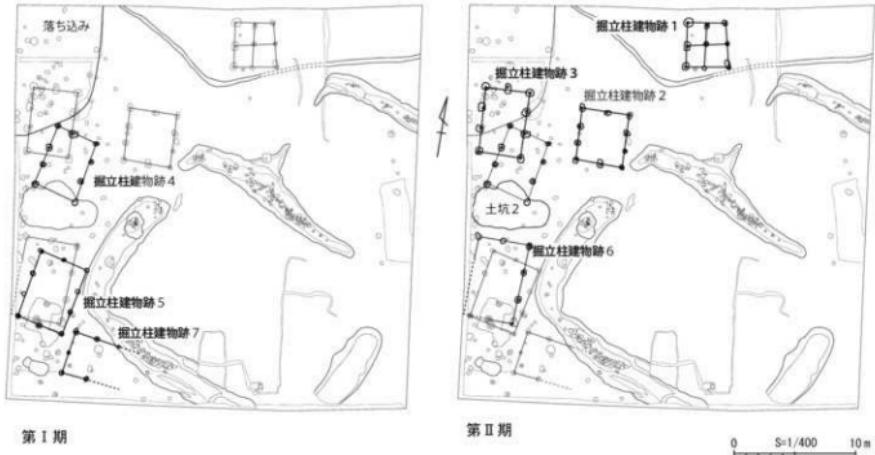


図 67 飛鳥時代～奈良時代の遺構の変遷

えられる。

掘立柱建物跡 7 が方形周溝墓の周溝上に建設されていることから、この段階の間に 1・2 号墓の周溝は完全に埋没していると判断される。古墳時代の間、溝として機能していた周溝が埋没した契機は人為的なものと思われ、埋土に須恵器や土師器など、遺物が大量に含まれることからも、周囲で新たに人々の居住が始まったものと理解できる。

#### 第Ⅱ期

掘立柱建物跡 1・2・3・6 が建設された時期で、落ち込みが埋没した後の段階である。この段階で掘立柱建物跡 4 は廃絶し、土坑 2 が掘削されている。掘立柱建物跡はほぼ正確に磁北を基準として建設されている。この段階は 8 世紀前半(飛鳥Ⅳ～平城Ⅲ併行期)にあたると考えられる。

#### 第Ⅲ期

第Ⅲ期は溝 1 が掘削された段階である。出土した遺物から平安時代中ごろの段階だが、この段階の遺構は溝 1 以外に検出できておらず、すでに居住域としては放棄された段階であろう。

以上の検討から、検出された古代集落は古墳時代以前に居住域とされなかった場所に突如として出現し、平安時代まで利用された後、居住域は他所へ移動してしまうことが判明する。周囲の調査では、北側で平安時代の遺構が、西側の有年牟礼・宮ノ前遺跡で中世の大規模な集落遺跡が検出されており、この段階にいたり集落の中心域は遺跡の北

側、もしくは西側の有年牟礼・宮ノ前遺跡へと推移していくものと理解できる。

## (2) 古代集落の位置づけ

有年牟礼・山田遺跡において検出された古代集落は、古墳時代以前には集落域に利用されない場所に掘立柱建物群が建築される。掘立柱建物群は主軸をそろえ計画的に配置されていると同時に、「秦」刻書須恵器が出土するなど、赤穂市内では主要な古代集落遺跡である。

その性格を明らかにする手掛かりとして、出土遺物の特徴があげられる。第3・4章の事実報告で述べたように、出土遺物には窯跡出土資料を思わせる焼け歪みが激しいものや、焼成時の付着物が厚く付着した資料、また破断面に自然釉が付着し、転用焼台に使用された可能性のある資料が含まれている。

有年牟礼・山田遺跡の北側丘陵裾には、赤穂市唯一の須恵器窯である山田奥窯跡が存在している。この窯跡は窯本体が発見されておらず、灰原からの採集資料のみの検討になるが、6世紀末から平安時代に操業していたことが明らかになっており（松岡1984）、有年牟礼・山田遺跡の集落の存続時期とほぼ一致する。このことは偶然ではないと考えられ、有年牟礼・山田遺跡の古代集落は窯跡の経営や製品の保管搬出等に関わった集落の可能性が高い。それまで居住域ではなかった区域に突如として集落が展開する契機は、おそらく須恵器窯の操業開始と無関係ではないだろう。

これまで有年牟礼・山田遺跡はその規模や「秦」刻書須恵器の存在から、「官衙的」性格が指摘されていたが、その具体的な内容までは明らかにされてこなかった。有年地区には古代山陽道が設定されず、赤穂郡衙や古代寺院、駅家などの代表的な官衙関連遺跡は北方の上郡町高田地区に存在すると想定されていたからである。

今回の調査成果から、有年牟礼・山田遺跡の古代集落は7世紀初頭に設定された須恵器窯の経営に関わった集落と推測でき、そう捉えることでこれまで漠然と「官衙的」とされてきた本遺跡の性格の内容が、より明らかにできたといえるだろう。

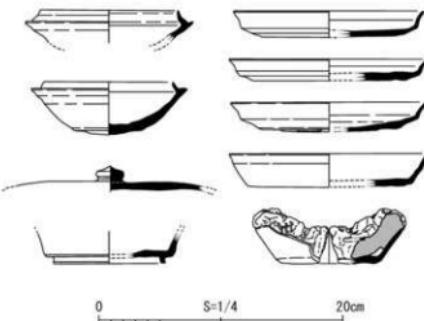


図 68 山田奥窯跡出土須恵器

#### 4　まとめ

今回の発掘調査によって、方形周溝状遺構の範囲と内容を明らかにするという当初の調査目的は達成された。またその内容は、赤穂市内の弥生墳墓の変遷を明らかにするのみならず、庄内式期の墳墓の地域性の複雑さや、墳墓に入り乱れる諸要素がいかにして取捨選択され墳墓へと反映されるのか、という重要な問題を解明する手がかりとなり得るものである。

また、これまでほとんど注目されてこなかった大型装飾器台という器種についても重要な知見をもたらし、前方後円墳の祖型の1つともされてきた有年原・田中1号墓の築造時期の検討の必要性を改めて示すなど、大いに価値のある成果を得ることができたといえる。

古代集落についても重要な知見を得ることができ、赤穂市内における古代集落の性格の一端を明らかにすることことができた。

これ以上の検討は報告書の範囲を逸脱するため行わないこととするが、今後、本遺跡の資料を基に検討を進めれば、弥生時代から古墳時代への複雑な社会変化の一端を明らかにできるだろう。

## 参考文献

- 赤穂市教育委員会 1991『有年原・田中遺跡』
- 赤穂市教育委員会 1999『東有年・沖田遺跡の風景ーほ場整備事業に伴う発掘調査の記録ー』
- 赤穂市教育委員会 2008『有年原・クルミ遺跡発掘調査報告書』
- 荒木幸治 2009「統計的にみた播磨の弥生墓」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究集会の記録 第9回  
播磨考古学研究集会実行委員会
- 大橋雅也 1992「9 器台形土器」『吉備の考古学的研究』上 山陽新聞社
- (財)大阪府文化財センター編 2006『古式土師器の年代学』
- 岡山県古代吉備文化財センター 2008「第4節 今岡中山遺跡の器台について」『今岡中山遺跡』岡山県埋蔵文化  
財発掘調査報告 213
- 岸本一宏 2008「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究集会資料集  
第9回播磨考古学研究集会実行委員会
- 岸本道昭 2006「播磨の集落と初期古墳」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジ  
ウム 6 資料集 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 近藤義郎 2005『前方後円墳の起源を考える』青木書店
- 西播流域史研究会編 1991『有年考古館藏品図録』
- 田中真吾 1984「第一章 赤穂の自然環境」『赤穂市史』第一巻 赤穂市
- 高橋 譲 1983「山陽」「弥生土器」『ニューサイエンス』
- 高橋 譲 1988「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』第9号 岡山県立博物館
- 長友朋子・田中元浩 2007「3. 西播磨地域の土器編年」「弥生土器集成と編年一播磨編一」大手前史学研究所
- 中村大介・秋山浩三 2004「方形周溝墓研究と近畿弥生社会復原への展望ー瓜生堂遺跡ほか河内湖周辺における  
弥生墓制の位置づけー」「瓜生堂遺跡1」(財)大阪府文化財センター調査報告書第106集 (財)大阪府文化  
財センター
- 西村 涉 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』ふたかみ邪  
馬台国シンポジウム 8 資料集 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 肥後弘幸 2010「方形貼石墓概論」『京都府埋蔵文化財論集』第6集—創立三十周年記念誌— (財)京都府埋蔵  
文化財調査研究センター
- 平井泰男 2010「吉備における古墳出現期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』第30号 岡山県立博物館
- 松岡秀夫 1984「赤穂市の考古遺跡と遺物」『赤穂市史』第四巻 赤穂市

## 報告書抄録

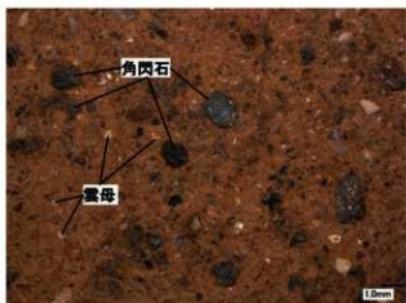
ふりがな	うねむれ・やまだいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	有年牟礼・山田遺跡発掘調査報告書
副書名	—
卷次	—
シリーズ名	赤穂市文化財調査報告書
シリーズ番号	78
編著者名	山中良平(編)、白石純
編集機関	赤穂市教育委員会生涯学習課
所在地	〒678-0292 兵庫県赤穂市加里屋81番地
発行年月日	平成26年3月31日

所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		(世界割地系)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
有年牟礼・山田遺跡	兵庫県赤穂市 有年牟礼	28212	130318	34° 50' 3"	134° 24' 5"	2012.02.12 ～ 2012.03.31	1,000 m <sup>2</sup>	範囲確認調査

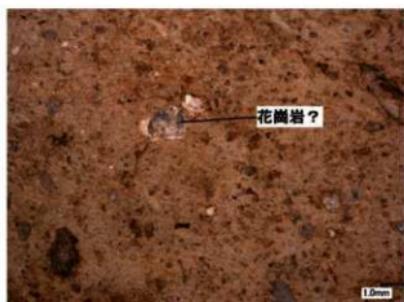
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有年牟礼・山田遺跡	集落	弥生時代中期	土坑1基	弥生土器	搬入土器の胎土分析
	墳墓	弥生時代終末期	方形周溝墓2基	弥生土器 (大型装飾器台、 吉備型甕、 大型二重口縁壺、 加飾壺)	
	集落	飛鳥～奈良時代	掘立柱建物7棟 土坑、落ち込み	須恵器、土師器	
要約	範囲確認調査により、過去の調査で部分的に検出された溝状遺構が弥生時代終末期の方形周溝墓であったことを確認した。また、未確認であった2号墓を検出し、方形周溝墓群となることが明らかとなった。出土土器には大型装飾器台や吉備地域、讃岐地域からの搬入土器が含まれる。 古代集落は掘立柱建物が計画的に配置され、出土遺物等から周辺の須恵器窯の経営に携わった集落の可能性がある。				



試料No. 3 小型加飾壺



試料No. 4 大型二重口縁壺



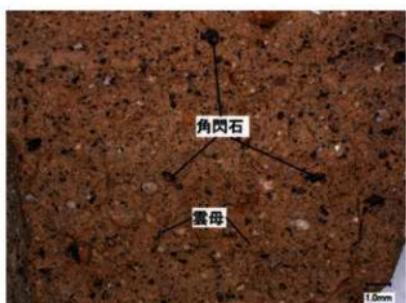
試料No. 5 高杯



試料No. 9 吉備型壺



大阪市加美遺跡（生駒西麓産土器）



香川県高松市北山浦遺跡（讃岐産土器）

図 62 有年牟礼・山田遺跡出土土器の砂粒観察写真

(第5章参照)

## 有年牟礼・山田遺跡発掘調査報告書

平成 26 年（2014 年）3 月 31 日発行

---

編集・発行：赤穂市教育委員会 生涯学習課  
〒678-0292 兵庫県赤穂市加里屋 81 番地  
TEL：0791-43-6962 FAX：0791-43-6805

印 刷：東洋紙業合資会社  
〒678-0239 兵庫県赤穂市加里屋 89 番地  
TEL：0791-45-2123

## 写真図版



調査風景

写真図版



有年牟礼・山田遺跡遠景 西から。遺跡の南側、JR 有年駅周辺では国道 2 号線バイパス工事や区画整理事業に伴い、有年牟礼・井田遺跡と有年原・クルミ遺跡の継続的な発掘調査が進められている。平成 23 年度撮影。



有年牟礼・山田遺跡近景 南から。右奥の谷部に赤穂市唯一の確実な須恵器窯跡である山田奥窯跡が存在する。平成 23 年度撮影。



昭和 63 年度調査 No. 2 トレンチ近景 北から。調査区の周囲では圃場整備工事が実施されている。奥に見えるのは千種川の支流である矢野川。



昭和 63 年度調査 No. 2 トレンチ垂直 上が北。No. 2 トレンチ北西部では A 区大溝が検出され、その周囲には古代の遺構が検出されている。

写真図版



昭和 63 年度調査「A 区大溝」断面 南から。1 号墓の東溝にあたる。



昭和 63 年度調査掘立柱建物跡 西から。右手前が 1 号墓東溝、手前左側が 1 号墓の北東側陸橋部。



昭和 63 年度調査 No.2 トレンチ掘立柱建物跡遠景 南から。調査区では大規模な掘立柱建物が多く検出されている。



昭和 63 年度調査 No.2 トレンチ掘立柱建物跡近景 南から。左奥には A 区大溝がみえ、溝内にはわずかに土器が出士している状況がわかる。

写真図版



調査区近景 南東から。周囲は昭和 63 年度に実施された圃場整備によって、整然とした区画となっている。



調査区垂直写真 上が北。1 号墓の北東側に寄り添うように、2 号墓が築かれている。調査区北東部分は標高が高かったためか、削平が激しく、遺構の密度が薄い。



方形周溝墓群検出写真 北から。右奥にみえる円錐形の山は通称「牟礼山」と呼ばれている。



1号墓検出状況 東から。陸橋部になると思われる周溝の途切れる部分が明瞭に検出されている。

写真図版



1号墓検出状況 北西から。石材の一部が露出している。



1号墓掘削状況 北西から。北溝・南溝で多くの石材が検出されている。



2号墓検出状況 北西から。2号墓西溝は激しく削平されており、検出できない部分もあった。



2号墓掘削状況 北西から。2号墓は周溝が浅く、1号墓北溝周溝との間に標高差がある。

写真図版



1号墓南溝石材検出状況 径 50cm以上という大型の石材もみられた。



1号墓南溝断面 東から。石材が列状に検出されている。



1号墓南溝断面 西から。右側がマウンド側。土器などの遺物も、溝底から浮いた状態で検出されている。



1号墓南溝 北から。最も多く石材が検出された箇所である。

写真図版



1号墓南溝掘削状況 西から。石材が喰みあっている状況が観察できる。



1号墓南溝掘削状況 東から。石材は比較的整った列状に検出され、斜面から滑り落ちたような状況であった。



1号墓南溝掘削状況 西から。石材の下からは遺物が出土したが、量はさほど多くない。



1号墓南溝掘削状況 東から。遺物は石材の間や直下から検出され、いずれも小片化している。

写真図版



1号墓南溝土器出土状況 西から。中央の小型の壺は遺物番号 57。今回の調査で唯一、完形で出土した土器である。



1号墓北溝掘削状況 東から。北溝は比較的浅かったが、石材が多く検出された。



1号墓北溝掘削状況 東から。石材には2号墓に由来するものも含まれると思われるが、判別することはできなかつた。



1号墓北溝断面 東から。1号墓マウンド流出土の上に2号墓マウンド流出土と思われる土層が堆積している。

写真図版



2号墓北溝検出状況 東から。2号墓の周溝はかなり浅く、検出時にすでに大部分の石材が露出している。



2号墓北溝掘削状況 東から。わずかだが石材が検出され、このことから2号墓にも貼石が存在したと判断している。



土坑1遺物出土状況 南東から。土坑底面に張り付くように、弥生時代中期後半頃の土器が出土した。



1号墓西溝断面 北から。最下層が土坑1の埋土。

写真図版



古代遺構掘削状況 北から。掘立柱建物跡が 7 棟以上、検出された。



土坑 2 掘削状況 南から。不整円形の土坑で、深さは最大 15cm 程度と浅い。



土坑2遺物出土状況 南西から。中央部から遺物が多く出土した。



土坑3掘削状況 南から。土坑2同様、かなり浅い遺構である。

写真図版



落ち込み掘削状況 北東から。右側は標高が低くなり、おちこんでいる。



落ち込み遺物出土状況 東から。完形に近い土器も出土している。



掘立柱建物跡 1 検出状況 南から。この付近は遺構の切りあいがほとんどみられない。



掘立柱建物跡 2 検出状況 南から。いずれの柱穴でも柱痕跡が確認できた。

写真図版



掘立柱建物跡 3・4 検出状況 南から。付近は遺構の切りあいが比較的激しい。上方には、落ち込みがあり、掘立柱建物跡は落ち込み埋没後に建築されている。



掘立柱建物跡 5・6 検出状況 南から。右側には1号墓周溝があるが、掘立柱建物跡はこの周溝の埋没後に建築されている。



柱根検出状況 南から。遺物番号 172 の検出状況。柱根が遺存していたのは、この柱穴のみであった。



柱穴掘削状況 南から。径 20cm程度の柱痕跡が明瞭に確認できた。

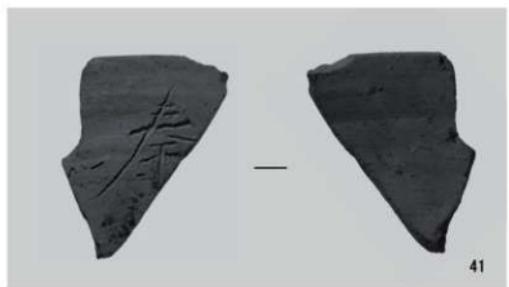
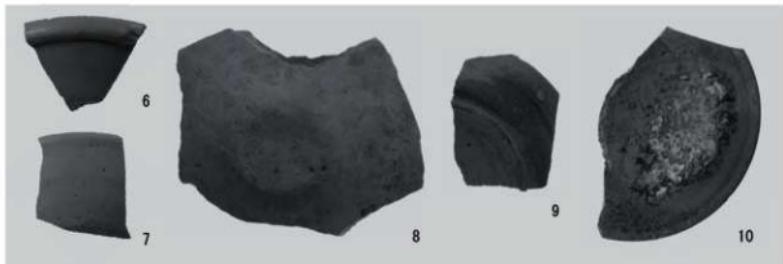


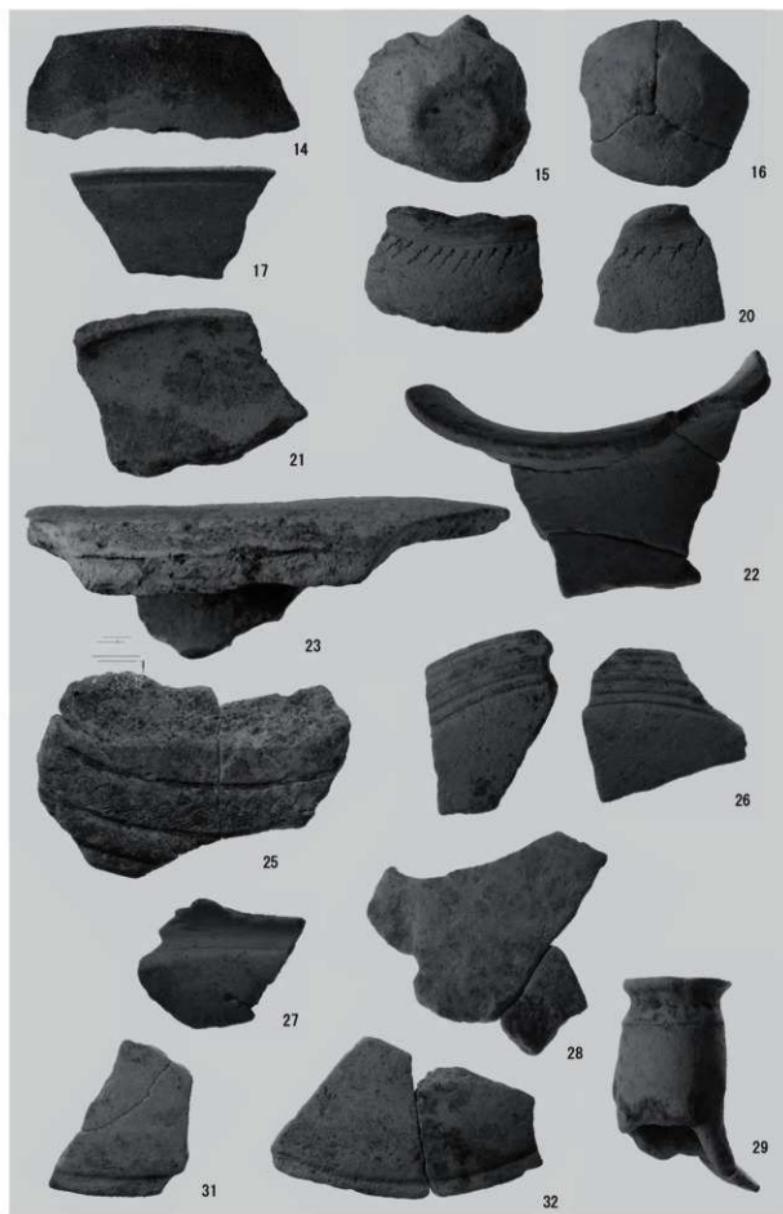
1号墓出土土器集合 昭和63年度・平成23年度出土遺物集合。



大型装飾器台の比較 左側が有年牟礼・山田1号墓、右側が有年原・田中1号墓出土大型装飾器台。

写真図版



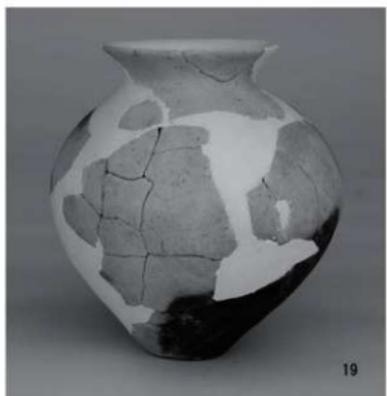




18



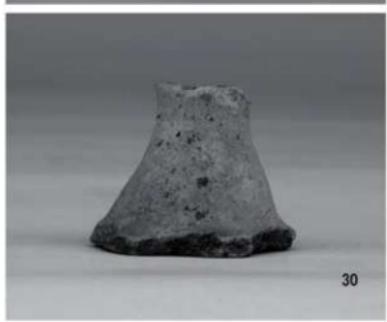
18・底部及び穿孔



19



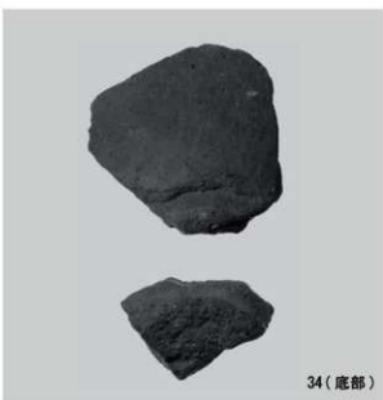
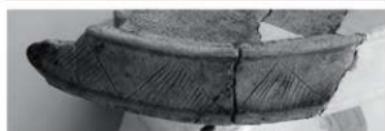
24



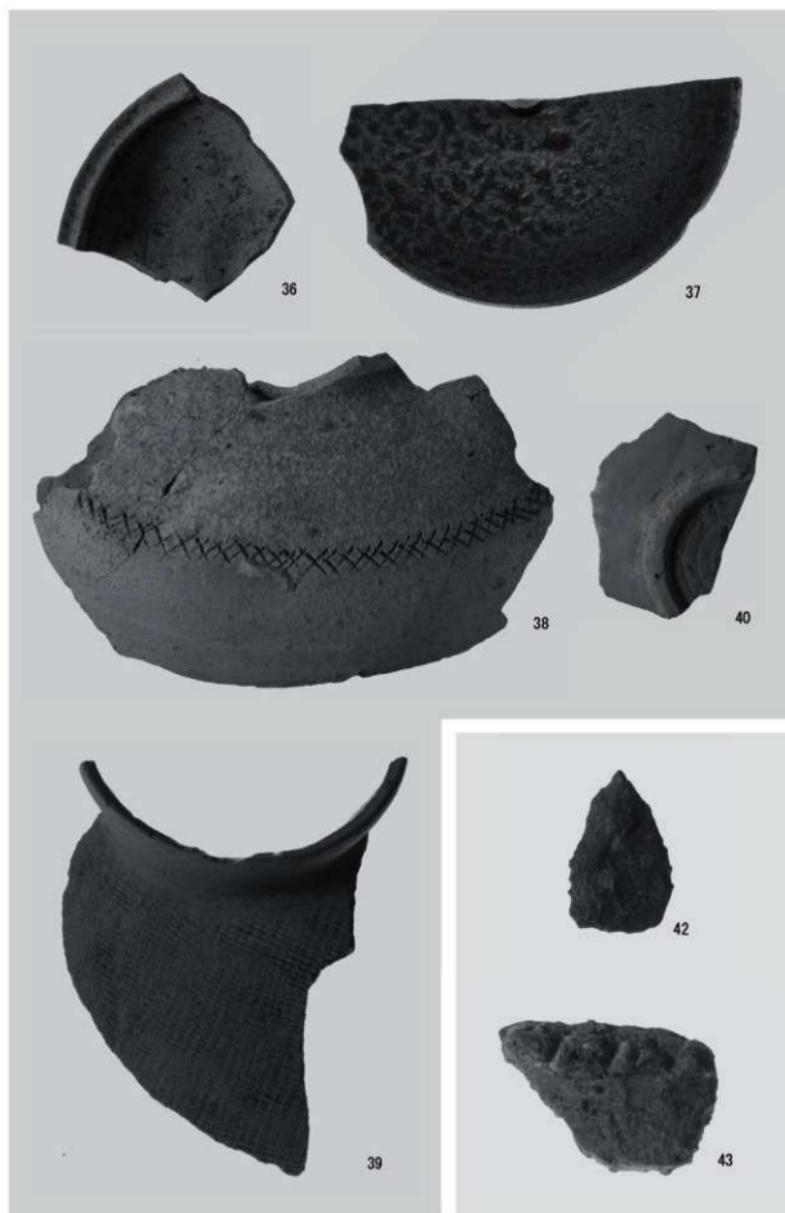
30

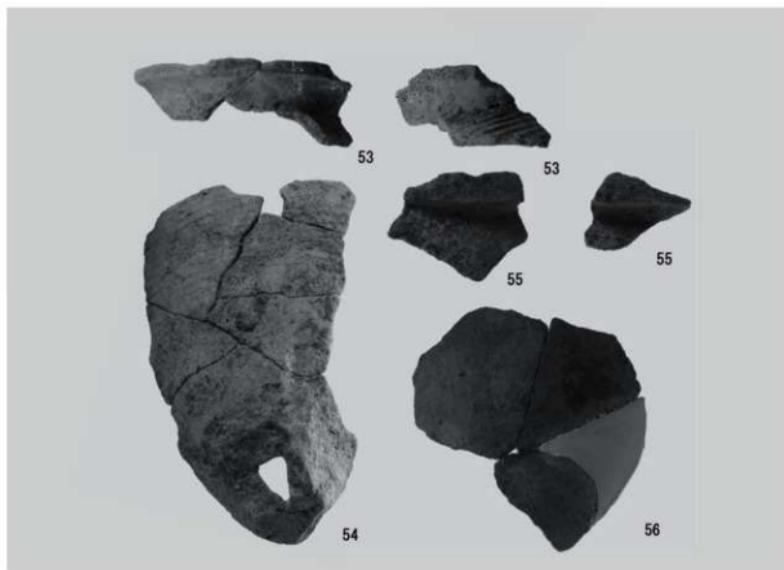


24・突帯部波状文



写真図版



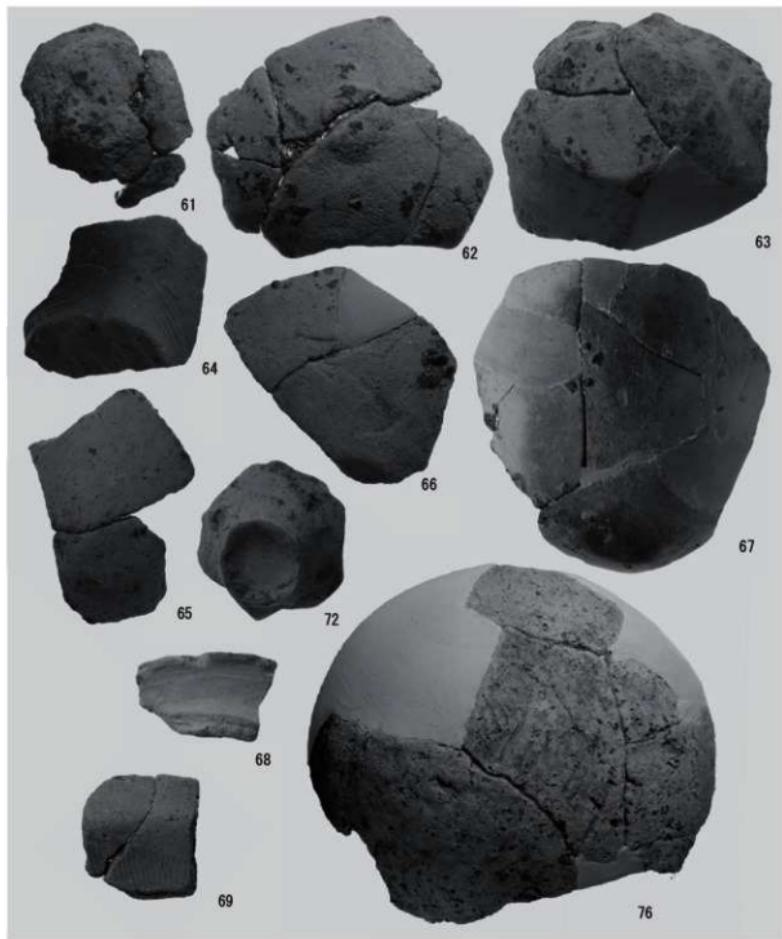




57



60

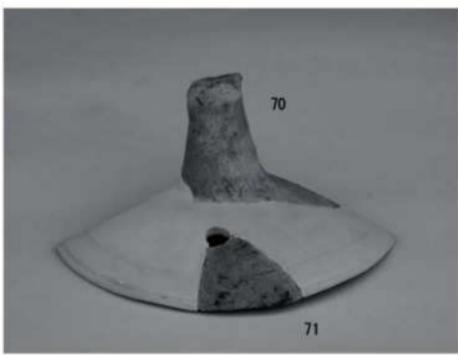




77



78



70

71



73



74



75



79



86

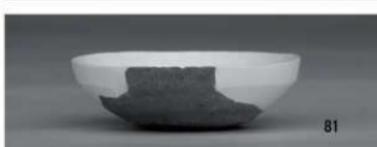


87

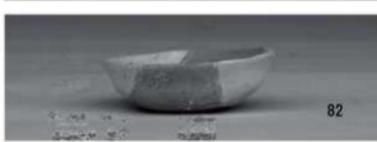
写真図版



80



81



82



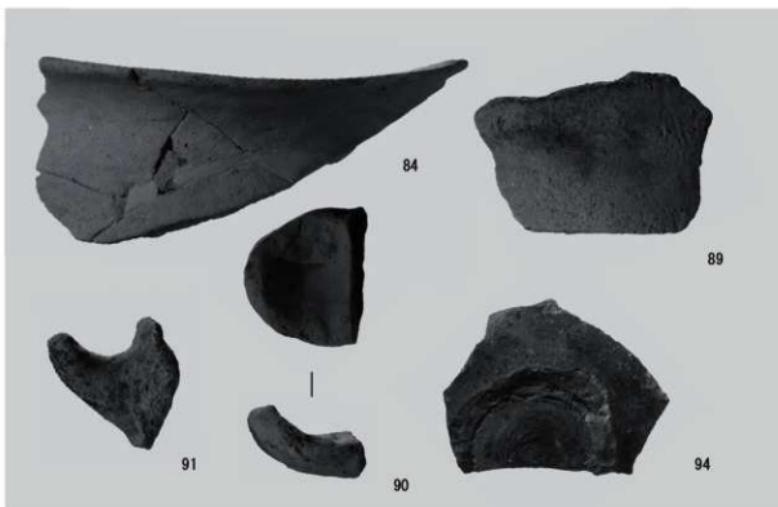
83



84



85



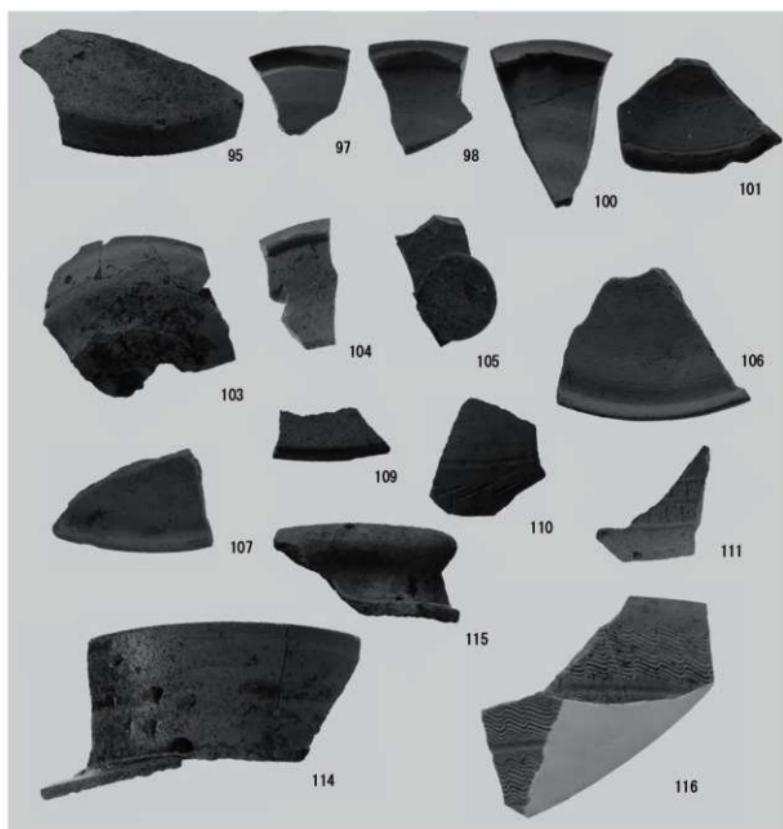
91

90

92



写真図版





写真図版



137



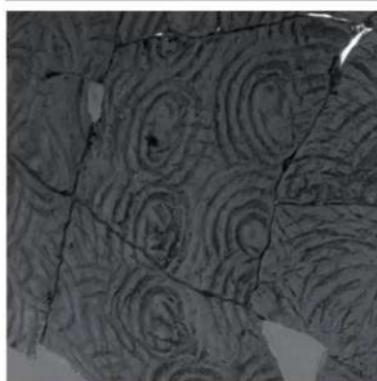
138



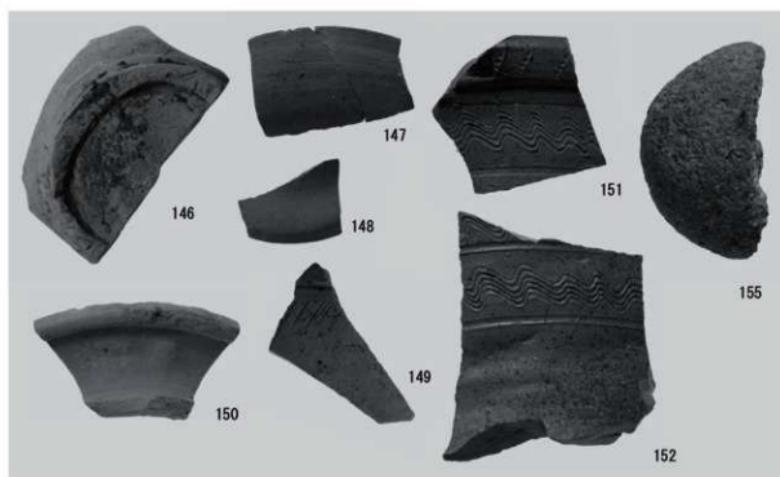
141



154



154・内面當て具痕



146

147

148

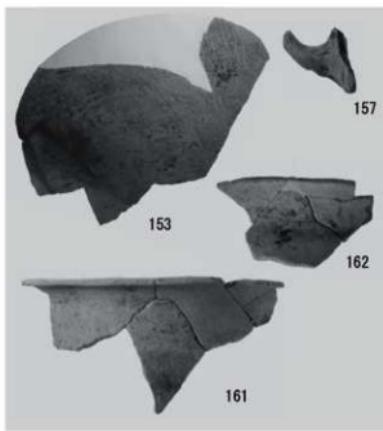
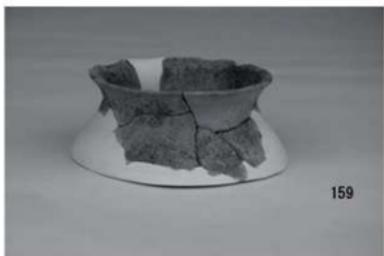
151

155

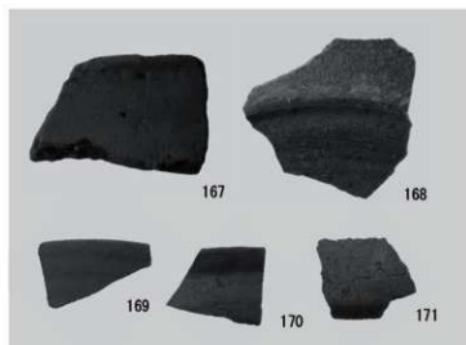
150

149

152

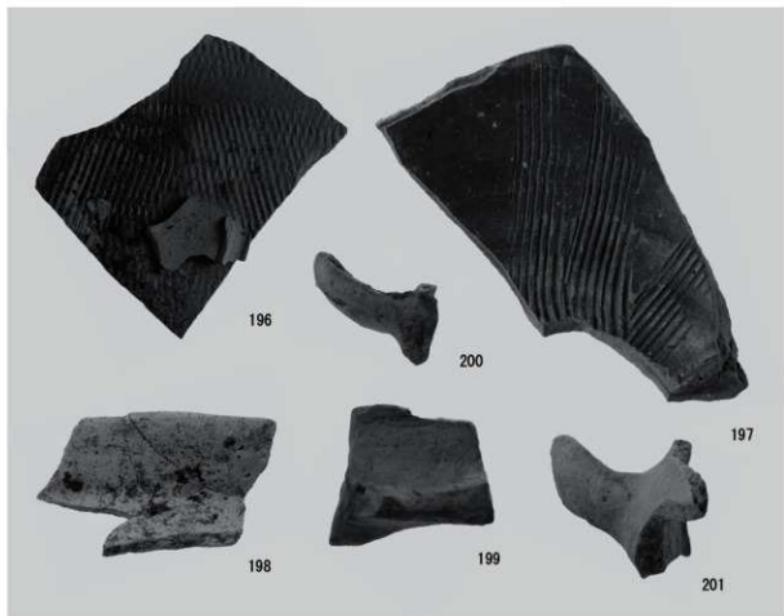


写真図版





写真图版



古代集落出土土器集合



有年原・田中墳丘墓群調査状況 墳丘墓群は弥生時代後期前半の集落域の上に築かれている。昭和 63 年度調査。



有年原・田中 1 号墳完掘状況 南から。中央部のトレンチ状の部分は、近現代の瓦用粘土採掘土坑。墳丘墓はこの土坑によって大きく破壊されている。昭和 63 年度調査。

写真図版



有年原・田中1号墓調査状況 北西から。右側に突出部が確認できる。周溝には大量の円碟が落ち込んだ状態で検出されている。



有年原・田中1号墓掘削状況 南から。左側の溝状遺構が「排水溝」状の遺構。中央には装饰高杯が出土している。また、周溝内の円碟は周溝底からではなく、周溝底から浮いた状態で検出されていることがわかる。



有年原・田中1号墓遺物出土状況 周溝内からは大型装飾器台が出土した。



有年原・田中1号墓周溝断面 南から。周溝埋土は黒褐色系の土層で、地山との判別は容易である。

写真図版



有年原・田中1号墓出土大型装飾器台・壺 全面に文様が施され、口縁部や脚部も入念に調整を施している。



有年原・田中1号墓出土大型裝飾器台 形状は類似しているが、縦部の文様や突帯の形状が異なっており、かなりのバリエーションがある。

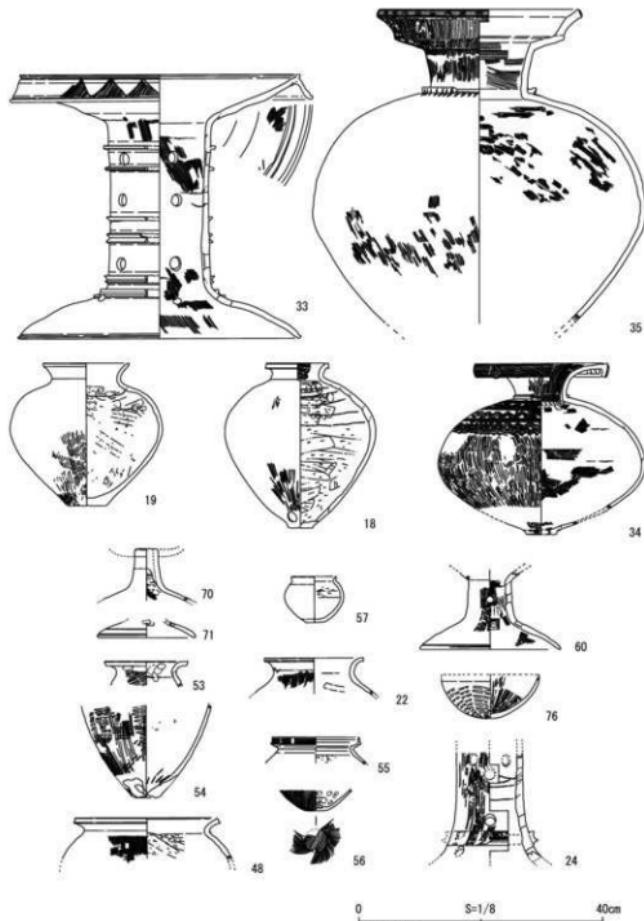
写真図版



有年原・田中1号墓出土大型装飾器台 受部内面に弧文状の線刻があり、注目される。



有年原・田中1号墓出土装飾高杯 脚部や口縁部の文様は、大型装飾器台と全く同じである。



本データは全国遺跡報告総覧において公開するため、  
赤穂市教育委員会文化財課文化財係が編集・作成したものです。

データ編集・作成 赤穂市教育委員会 文化財課 文化財係  
〒678-0292 兵庫県赤穂市加里屋 81 番地  
TEL : 0791-43-6962 FAX : 0791-43-6895

---

令和3（2021）年3月31日 データ編集・作成